二-38

應用心理學論文集

第20回大会発表研究抄録

（広　島　会　場）

1955. 10. 29・30.

日本体育大学図書館蔵書
昭 61. 4. 28
133830

日本応用心理学会

140.4
N77
V.20

序

日本応用心理学会第20回大会は、この10月29日及び30日の両日にわたり広島大学教育学部心理学教室において開催された。海陸運の災害及び犯罪少年に関するシムポジウムの外に個人研究の発表百有余、会する者数百を擁して盛大に挙行された。本会は広島の如き遠隔地において催されたことがないので、はじめ参加者が少数にかぎられるのではないかと危ぶまれたが、中・四国心理学会の声援を得て、広島としては異例の会員を吸収し、その研究の質と量とにおいて中心地区におけるものに比して優るとも劣らざる勢を示したのである。

顧みるに昭和のはじめ関西において関西応用心理学会が成立して、京都・名古屋・大阪・神戸・倉敷の各地にまた昭和七年には広島の地にその会合を催して、松本亦太郎先生の御来広を得た。越えて数年の間に春秋２回の会合は20数回に及んだのである。なお、東京を本拠とする応用心理学会は、関西応用心理学会よりもおくれて発足したが、昭和12年には、東西の応用心理学会は連合して広島文理科大学において開催され全国より多数の来会者を得た。当時の学長は心理学の先達の１人である塚原政治氏で、その下に久保良英、楠弘閣の２教授とわたくしがいて種々接待につとめた。広島における全国的な学会は—他の学会をも含めて—これをもつて嚆矢とすると云つても差支えないであろう。戦時中は諸学会が統合される気運に際会し、関西応用心理学会は、日本心理学会の地区会の一つとなつて解消されることになつた。

日本心理学会はその創設以来隔年１回開催されたが、その間に東西の応用心理学会を糾合した日本応用心理学会が開催される慣例となり、やがてそれは春秋２回行われる運びになつた。かくて研究の進歩と発表の気運が漸く熟するにつれて日本心理学会も毎年東京・京都・仙台・福岡・京城の各地に催され、昭和28年春はじめて広島においてこの大会を開いた。しかるにそのときは、すでに塚原学長及び久保・楠の両教授なく、旧来の成員としては、その前年重患にて死生の間をさ迷いたるわたくしのみ、この広島における第２回目の全国学会に参会するを得たのである。それは実に新に広島に赴任されたる高木・兼子の両教授、広島大学が産出せる三好・古浦の両教授及び教室同人の骨折に負うものである。しかるに此度日本応用心理学会は全国の会員によびかけて広島に会集される機会を与えられたることは、実に第３回の記念すべき広島会合であり、広島大学の心理学教室の新進とともにわたくしの生涯における最も喜びとするところである。

茲に収められたる発表はいずれもたゞ数十行に尽しうるものではないが、経済的な制約によりいまは簡単な抄録に止めざるを得なかつたのは、頗るわたくしの遺憾とするところではあるが、それは研究の進捗をうかがわしめる里程標で他日それぞれ完全なる形において発表される機会をもつものであることをおもうとき、われわれはわが心理学会の前途に期待するところが少くないのである。いささか過去をおもうことから将来の豊かなる実のりにおもいをはせて序とする。

昭和３０年１２月

日本応用心理学会
第20回大会会長　古　賀　行　義

目　　次

1. 知覚・生理

頁

1. 同心円図形内の錯視……東京都立大学　今井省吾…1
2. Perceptual defense に関する実験的研究（中間報告）……大阪学芸大学　後藤与一…1
3. 脳波の心理学的基礎研究 (1)……日本大学　山岡淳／岡本健／○長沢有恒…2
4. 脳波の心理学的基礎研究 (2)……東京少年鑑別所　鰭崎轍／南孝夫／佐山克伯／山川博臣…2
   日本大学　○山岡淳／岡本健／長沢有恒
5. G.S.R.の一考察
   —G.S.R.測定におけるresistance level の問題—(2)……早稲田大学　○新見良純／橋本仁司／望月一靖…3
6. 学習行動の実験的研究（第7報告）
   —行動の定型性と興奮剤が行動に及ぼす影響について—…大阪学芸大学　今井欣悦／○中西重美…3

2. 感情・思考・学習

1. 配色感情に及ぼす面積の効果（Ⅱ）……慶応義塾大学　○林銈藏／宍道令子…4
2. 盲児における空間表象の研究（第2報）……東北大学　○大脇義一／菊池哲彦…5
3. 運動学習における休息後の学習過程 (7)
   ——Warming-upの検討——……大阪学芸大学　前田三郎…5
4. 家庭科学習の心理……東京学芸大学　芦田昇…6

3. 発　　達

1. 図形類同視に於ける方向及び配置の発達的研究（第4報告）…京都大学　園原太郎／大阪学芸大学　○田中敏隆…7
2. 手根骨X線像計測による身体成熟度決定基準と
   その妥当性について……金沢大学　大平勝馬…7
3. 幼児画に関する一考察……東京経済大学　石川英夫…8
4. 児童生徒の基地における実態について……山口大学　久芳忠俊…8
5. 青年心理の研究 (12)
   ——青年期及びその以後の恋愛——……日本女子大学　児玉省／○堀井千鶴子／松本伸子／吉田敬子／登倉京子…9

4. 言　　語

1. Integration＝I＝統合の行動に及ぼす効果について……信州大学　原善平…10
2. 幼児の読書レディネスについて……東京学芸大学　角尾稔…10
3. 生活場面における言語行動の特徴—運勢判断—……国立国語研究所　村石昭三…11

5. 人　　格

1. 自我概念の安定の測定に関する一試案……日本大学　丹羽淑子…12
2. 心理劇の効用と限界……お茶の水女子大学　松村康平…12

6. 教　　育

1. 学生生活と悩みについて……山口大学　小西秀勇…13
2. 四日市における小学校音楽学力についての一考察……四日市市教育研究所　神沢良輔…13
3. 指導法についての一研究（第2報告）……名古屋大学　大西誠一郎…14
4. 英語学習の心理学的研究 (13)
   —英作文学習書にあらわれた
   本邦学生の誤謬について—　第2報告……東京教育大学　小保内虎夫／○永沢幸七…14

頁

5. 知能と学力との相関をめぐつて
——列位差の著しい児童に於ける行動特性について——…岐阜大学附属小学校　宮脇　修…15

6. 学級に於ける心理的集団の形成について……愛知学芸大学　末利　博…16

7. 学力予測に関する研究（第2報告）……名古屋大学　白石一誠　○中嶽治麿　太田雅雄　山本輝夫…17

8. 賞罰に関する一考察
——特に診断性向性検査別集団において——……日本大学　○駒崎勉　古牧節子…17

9. ホスピタリズムの研究……日本女子大学　児玉省　石井雅子　高橋昱子　○北里美智子…18

10. 児童の社会観……日本女子大学　児玉省　○石川百合子　川島千恵子…19

11. 自敍伝による研究（基督教主義大学学生の宗教）……国際基督教大学　岡部彌太郎…19

7. 検　　査

1. 性格自己診断の分析……京都大学　正木正　天王寺中学　○河原正則…20

2. 教研式学年別知能検査の妥当性、信頼性に関する一考察……応用教育研究所　平沼良　榊原清　○堀辰巳…20

3. 欲求的適応性検査の妥当性について（第2報）……日本大学　○長谷川貢　精工舎　浅野行雄…21

4. T.A.T.にあらわれた Emotional Tone……香川大学　高橋茂雄…22

5. ソシオメトリツク・テストにおける
選択基準と選択形式について……名古屋大学　塩田芳久…22

6. 玉岡式音楽鑑識力テストの実施 Ⅱ……共立女子大学　玉岡忍…23

7. 質問紙調査法の信頼性について
——P.G.R.を媒介として——……香川大学　○佃寛夫　水口芳明…24

8. 沖縄における教師の情緒性検査について……東京学芸大学　堀内敏夫…24

9. 平均寄与率の構造について……名古屋大学　白石一誠…25

8. 社　　会

1. 意見の変化に影響する集団規準効果……徳島大学　岸田元美…26

2. Red Pentadic Relationにおける選択……日本大学　近喰秀大　○大村政男…27

3. Influence Process の実験的研究……帝塚山学院短大　沢井幸樹　浪速大学　○松原慶太郎…27

4. 集団の成層構造に関する一研究
——精神薄弱児集団の場合——……実践女子大学　小林さえ子　○齊藤美智子…28

5. 社会的適応と社会的規準（第2回目）……早稲田大学　伊藤安二…28

6. 児童と社会環境（その2）
——工場街のこどもの生活と意識——……社会心理研究所　寺内礼治郎…29

7. 交通事故が生じた人身傷害におよぼせる
心理的要因に関する二、三の考察……日本大学　○渡辺徹　浅井正昭…29

8. 電話交換作業に於ける Action Research（その1）
—交換要員の組編成についてのSociometric Study—…広島大学　兼子宙　正戸茂　○西山啓…30

9. 青年の消費行動について……広島女子短大　鹿股寿美江…30

10. 社会現象の予測研究
——社会的行動の流動過程の要因分析——……興論科学協会　牧田稔…31

11. 戦後十年間の社会現象に対する適応の一調査……南山大学　寺沢ひさ…32

12. 駐留軍基地の幼児について……広島女子短大　山内美子…32

13. 琉球における民族好性について……広島大学　酒井行雄…33

14. 原爆被害の社会心理的処理……川村短期大学　松浦田鶴子…33

15. 里子定着の予測……岡山大学　天野牧夫　岡山県玉島児童相談所　○須見喜六　鳥取少年鑑別所　菅俊夫…34

9. 産　　業

頁

1. Productivity と労働態度についての一研究……広島大学　正戸　茂…34
2. 社会行動の構造論的考察（第一報告）……名古屋大学　白石一誠／中嶽治麿／太田雅夫／○山本輝夫／犬山高等学校　梅田昭吾…35
3. 身体障害者の情意生活について……鉄道弘済会　丸山茂樹…36
4. 交通事故防止の心理学的問題について……国鉄労働科学研究室　鶴田正一…36

10. 司　　法

1. 嘘偽診断に於ける判定の基準について……東京工業大学　宇治野藤雄／日本大学　○岡本健…37
2. 収容少年の交友関係（生徒と比較して）……高松家庭裁判所　稲毛登代子…38
3. 心理テストに基く少年交通事犯の研究……大阪家庭裁判所　上田好一／○豊田十三郎…38
4. 非行少年に対するClient-Centered Counseling——実施結果について——……茨城県中央児童相談所　遠藤勉…39
5. 交友関係と不良化……東京家庭裁判所　山本晴雄…39
6. 気象と人身犯罪 (3)……警視庁　佐伯茂雄…40
7. 刑期の判決に現われし数字習慣……明治大学　小熊虎之助…41

11. 臨　床・異　常

1. 触読推理に関する研究……広島大学　林重政…41
2. 臨床心理学と精神医学との関聯に関する所観——一裁判鑑定患者に関する両者の所見を通じて——……広大医学部　小沼十寸穂…41
3. 偉大性に関する研究（第3報）——性度の問題を中心にして——……日本大学　高嶋正士…42
4. 聾児童・生徒の言語能力（その4）——特に表現語彙の発達についての量的考察——……日本大学　森一司…42
5. 沖縄における神経症の一症例……東京教育大学　鈴木清…43
6. 機会的非行者——行為場面と人格——……横浜少年鑑別所　台利夫／明治大学　○堀淑昭…43
7. パースナリテイ・インヴエントリイの特性について……慶応義塾大学　○佐野勝男／精神医学研究所　槇田仁…44
8. 精神薄弱者鑑定についての一研究——知能測定における実験者—被験者間の rapport——…名古屋大学　秦安雄…45
9. 肢体不自由者の診断法の研究（その3）——Rorschach TestによるHabilitationの予診——……国立身体障害者更生指導所　○田中豊／早稲田大学　金子精宏…45
10. 精神薄弱児の運動能（I）——その発達過程について——……大阪市立思齊小・中学校　吉岡宏…46
11. 日本人のロールシヤツハ反応の研究 (11)……日本女子大学　○児玉省／渡辺和子／寺内幸子／加藤千枝…46
12. 危機場面におけるロールシヤツハ・テストの集団検査実施結果について……香川大学　○水口芳明／佃籠夫…47
13. Rorschach Testの集団法の試み……早稲田大学　本明寛…47

12. シンポジアムについて……広島大学　高木貫一…48

あとがき

日本心理学会会則

1. 知 覚 ● 生 理

1. 同心円図形内の錯視

都立大学　今　井　省　吾

同心円図形の内部におかれた平行線は内側に弓状に彎曲して見える。ここでは、この曲りを量的に測定して、この錯視が主としてツエルネル錯視の変形であることを実験的に証明する。

第一実験では同心円図形内におかれた垂直な平行線の曲り量と同心円の中心からの距りとの函数関係をみる。

実験図形は同心円図形で最大半径3.75糎、最小半径0.25糎、この間0.5糎毎に円が入り、計8箇の円。平行線は垂直方向で2本、長さは四糎。

比較刺戟図形は2本の対称な円弧（直線も含まれる）。但し曲り量は、ある半径で描かれた円弧の曲りに等しいものと仮定。曲り量は半径の逆数で表わされる。両図形は同時比較、両眼視、観察距離1米、被験者10人。

結果は平行線が中心から距るにつれ曲り量はやや増大、距り1.5糎のところで極大（半径75糎の円弧の曲り）となり、以後やや減少していく。

第二実験では平行線の間隔を一定（4糎）にしておき、これと同心円と交わる斜線の数を変化させたときの曲り量との関係をみる。

実験図形は平行線と、これに交わる斜線（同心円の一部）の水平の長さ（4糎）だけ残し他を切捨てた図形。斜線の数は4本から20本まで変化。なお、他の手続は実験一と同様である。

結果は斜線の数が増すと曲り量は増大し、やがて極大（斜線の数12本のとき半径約50糎の円弧の曲り）となり以後曲り量は減少する。

以上の実験結果とツエルネル錯視の要因とを比較してみる。

先ず、ツエルネル錯視では主線と斜線のなす夾角と錯視量との関係は、夾角25度から30度で極大、角度が大になると漸減する。ところで同心円図形では平行線が中心から距るにつれ平行線と円とのなす角は減少（48度から23度へ）する。それ故、この場合、曲り量は中心から距るにつれ大きくなる筈である。

次に、ツエルネル錯視の要因として夾角の他に斜線の数が考えられる。実験二から曲り量は斜線の数が増すと増大し、極大となり、斜線の数が多くなりすぎると減少する。ところで実験一では斜線の数は中心から距るにつれ減（6本から2本へ）る。それ故、この場合、曲り量は中心から距るにつれ小さくなる筈である。

結局、この二つの場合を合成すると曲り量は同心円の中心附近及び周辺で相殺し合い小さく、中間の距りで相対的に大きくなる。これは実験一の曲線に一致すると考えられる。

筆者は先に、放射線図形内におかれた平行線が外側に弓状に彎曲してみえる錯視について実験吟味した結果、これをツエルネル錯視的要因から証明した。（日本心理学会第19回大会発表）。今回の研究はこれと一対をなす訳である。

2. Perceptual defense に関する実験的研究（中間報告）

大阪学芸大学　後　藤　興　一

知覚防禦の研究は Postman, L. と Bruner, J.S. との1948年の研究に端を発し、1949年に発表された McGinnies, E. の研究によつて、注目されるに至つた。McGinnies は鮮かな実験整理と類のない生理学仮説とを発表した。これが反響を呼び、 Howes, D.H. と Solomon, R.L. との反論が発表された。McGinnies は Howes らに回答し反駁する論文を重ねて発表した。この2つの論文は1950年の Psychol. Rev. 誌上を賑わしている。その後、知覚防禦について、実験報告としては1953年に Postman, L., Bronson, W.C. & Gropper, G.L. の研究、Lacey, O.W., Lewinger, N. & Adamson, J.M. の研究、並に Bitterman, M.E. & Kniffin, C.W. の研究、更に1954年に Freeman, J.T. の研究がある。一方、理論的研究としては1952年に Howie, D. の研究、1953年に Postman, L. の研究がある。

我々のこの実験の目的は McGinnies と Howes らとの論争点に関している。即ち McGinnies が知覚防禦現象を実証せんとするに対し、Howes らはそれは使用頻数理論 frequency theory によつて説明し得るとする。そこで、McGinnies が neutral words と taboo words との2種を刺戟語としたのに対し、我々は neutral words を使用頻数の多少によつて更に2つに分け taboo words と共に3種の刺戟語を提示し、尚口答による報告を避けて全て筆答によつて反応せしめることにし、何れの論が正しいかを検証せんとした。

実験方法　K・Y・S・ Stimulater に連結された手製の瞬間露出器、これは覗き穴から刺戟語まで 70cm の距離を持ち、70ルックスの照度で照し出されるように作られた。刺戟語は零号活字の大きさで 0.5 mm の太さの平仮名であつた。その提示順序は次のようであつた。

1 けいかく　2 せいよく　3 たまむし　4 すいしん　5 こしまき　6 こくさい　7 きんだま

8 もんだい　9 けんさつ　10 ふんどし　11 かんそく　12 はいれつ

1, 6, 8, 11 は新聞紙上に多く出現する中性語、3, 4, 9, 12 は出現の少い中性語、2, 5, 7, 10 は taboo words.

各刺戟語を10秒間隔で 30σ, 40σ, 50σ・・・と露出し、その間見えたと思う文字を書かせ、正しく書き得たとき、この試行を終了し、次に2秒休んで、前同様試行を繰返えし、総計、刺戟語数だけの、すなわち12試行を行つた。実験中 Ss は GSR の electrode を左手に密着させられていた。実験終了後、質問紙に各刺戟語について使用頻度の程度並に情緒性の程度を check させた、Ss は男子大学生10名、実験期日は本年の10月上旬。

結　果 (1) 内省報告における使用頻度の程度は全く予想通りであつた。即ち頻数の多い中性語が最大、taboo words が最小、そして頻数の少い中性語が taboo words に近く、而も3個の平均の差は有意。(2) 認知閾の平均は McGinnies の理論からすれば taboo words が相当大にならねばならなぬ筈であるのに、この結果では頻数少の中性語よりも、僅かながら、小であつた。頻数多の中性語は予想通り最小であつたが、しかし3個の平均間には有意の差は認められなかつた。(3) 内省報告における情緒性の程度は taboo words が中性語よりも平均して大で而もその差は有意であつた。これは GSR の結果とも一致していた。(4) 認知前の hypotheseはMcGinnies の報告と同様、中性語に similar, part が多く、taboo words に unsimilar, nonsense が多く、その差は有意であつた。(5) Howes らが taboo words を口答で報告する時禁止が働き為に GSR が大になり又認知閾が大になるとして McGinnies に反駁しているが、この実験はそれを否認している。即ち我々の実験は筆答によつて禁止を避けたにも拘らず GSR は taboo words に大であり又認知閾も僅かであるが大になつている。hypothese の傾向からすれば McGinnies の理論が正しいように思われるが、認知閾からすれば Howes らの理論が正しいように思われる。仮に Howes らの frequency theory が正しいとすれば、使用頻数の系列にどのように taboo words を位置づけるかが問題である。これが解決されれば、2つの理論の対立も解消されるのではなかろうか。

3. 脳波の心理学的基礎研究 (1)

日本大学 山岡　淳・岡本　健
○長沢有恒

頭皮上から誘導した脳波の諸特徴、特にγ波の振幅は、その部位によつて異るということは周知のことである。第19回の本大会で山岡は後頭部領域について、後頭部電極の標準位置を決定するためにその資料を報告したが、その結果、さらに頭蓋上全領域にわたつて脳波特にγ波の分布状態を検討する必要を感じたので、今回正中線上のγ波振幅について調べたところ、一例ではあるが、興味ある結果がえられたので、ここにそれを報告する。

被験者は正常成人で暗室内で閉眼し（坐位）安静状態においた。不関電極は左右両耳朶とし、関電極はいわゆる前頭部から眉間寄りへ2.5cm（この電極番号をNo.1とする）の部位から後頭結節から下方へ5cmの部位（この電極番号をNo.15とする）までの範囲（約35cmの長さ）を2.5cmおきに計15の部位にゴムバンドで固定した。そして、これら電極による15の単極誘導脳波を6系統装置によつて3回に分け記録した。そして各誘導脳波から60秒づつをえらび、それからのγ波の平均振幅を算出しグラフに曲線として表わした。

その結果を本川氏（1944）の報告と比較してみると ① 各誘導脳波の振幅が増減する部位（No.1, No.4, No.6, No.9, およびNo.15が振幅極小で、No 3, No.5, No.7, およびNo.12が極大）は両者とも同様である。しかしこれら極大値と極小値との差異はこの報告ほど大きくはない。② 特にNo. 12（いわゆる後頭部）だけが極端に振幅が大きい。ところがこの報告では前頭部や頭頂部の振幅と較べて決して大きいとはいわれない。これらの結果および山岡の前回の報告すなわち今回の No.11、および No.12に相当する部位の振幅は殆んど差がない程度であるということを併せ考えてみるとNo.11からNo.15は同時記録したのであるから、個人差の問題が、振幅の極大極小の部位が時間的経過につれて変つてくるものが、あるいは電極間距離が広すぎたためか推定も困難である。従つてなるべく小さな電極を用いて電極間距離を小さくし、しかもなるべく多くの部位の脳波を同時記録できるような装置によつて十分慎重に検討してみたい。

とにかくいずれの原因にもとずくにせよ、特に人格研究において電極の標準部位を決めるに当つては従来こういう点についての考慮が払われなかつたが十分留意すべきことではなかろうか。

脳波の心理学的基礎研究 (2)

東京少年鑑別所 鰭崎　轍・佐伯　克
南　孝夫・小川博臣
日本大学 ○山岡　淳・岡本　健
長沢有恒

一般に非行少年を含む情意変調者の脳波を云々する場合、その異常脳波の誘発法の一つとして過呼吸がよく用いられるが、この影響の現われ方は各個体について、ほぼ一定しているだろうか？　他方第17回本大会で山岡が正常成人

7名につき数日以上の間隔をおき数回づつ記録した場合その F_r, および F_r—O_c の安静時における各々の脳波の%time 乂自体は相当大きく変動するが、その各誘導脳波相互の相対的関係の個体間変異は各個体で特有であり、しかも各個体は常に殆んど同様な相対関係を保つていると報告した。これと同様なことが過呼吸中やその後においてもみられるだろうか？　主にこれらの点をみるために、今回情意変調群（東少鑑在所中で2名以上の技官から変調高度であると判定された少年）および正常群（大学生）の各々3名づつにつき、その F_r, P_a および O_c の各左側単極誘導脳波を3日おきに3回づつ記録した。過呼吸は4分間行い、その前の安静時で60秒、過呼吸開始後3分目から20秒、および過呼吸終了後3分目から20秒づつにつき、各資料、各誘導脳波ごとにその周波数を測定した（今回は振幅については省く）。その結果

Ⅰ　安静時脳波については　①両群ともその個体内変異は少い。特に O_c は少。②各誘導脳波相互の相対的関係の個体間変異は認められるが個体内変異は少い。③変調群には正常群よりも低周波数成分が多い。

Ⅱ　過呼吸中および過呼吸後脳波では　①変調群では過呼吸中に個体内変異が安静時のそれよりも大きくなる傾向がある（特に F_r および P_a が大きい）。②正常群の方が過呼吸の影響（低周波数波の出現）が遅く現われ、また過呼吸後は直ぐに影響消失する。③各誘導脳波相互の相対的関係は正常群では殆んど安静時と変らないが、変調群では過呼吸中に特に F_r が低周波数波の方にずれ、過呼吸後もその影響残存する。他の諸点については特に安静時と変らない。

この結果からいうと、特に過呼吸の影響をみる時には1回だけの記録で云々することは危険であり、数度の反復記録を検討して考えるべきであろう。また或一個所の脳波だけを分析して云々するよりも、数個所の脳波を同時に記録して、その相互の相対的関係をも考慮すべきであろう。

電極位置に関する研究も参酌しながら、被験者を増加し、記録回数も増してなお検討を続けたい。

5.　GSR の一考察
—GSR 測定における resistance level の問題　(2)

早稲田大学 {○新美良純・橋本仁司
望月一靖

resistance level について言及した過去の数多くの文献は、resistance level が精神的、身体的条件によつて大きく影響をうけることに著目し、疲労、飽き等の indicator として resistance level を用いる試みについても述べている。しかしながら17回日本心理学会で私達は、皮膚の conductance が夏期には、室温、指の皮膚温、湿度とそれぞれ +.81, −.03, +.76; 冬期にはそれぞれ +.06, +.66, −.12 の相関をもつことから、resistance level について云々する際には、気温の高い時節には室温を、気温の低い時節には皮膚温を考慮せねばならぬことを指摘した。

この第1報告は、すべて同一被験者の連続測定値に基いたものであり、そのことは第1報告の長所でもあつたが短所でもあつたので、その後5人の被験者について同様な連続測定を行い、夏期において conductance と室温の間に +.94 の相関係数をえたのをはじめとし、第1報告の裏づけをする結果をえた。

ところで resistance level はこのように室温等の物理的要因によつて大きく左右されるに拘らず、過去の文献は昼間の resistance level と夜間のそれとを直接して、この差異を疲労、その他で説明しているのであつて、昼夜の室温の変化に考慮を払つたものはほとんど見当らない。そこで、これ等の文献が指摘するような精神的、身体的要因が果してあるものか、それともまた室温等の物理的要因のみによつて左右されたに過ぎないのかを検討するために、2月から3月にかけて、室温を連日約 20°C に保つて、2人の被験者の conductance を連続測定した。

その結果、室温がたとい一定でも resistance level には、毎日類似したかなり大きな時刻変動がみられ、実験に飽きたり、日が経つて疲労が増してくると conductance は小さくなることが窺われた。特に最終日の徹夜の測定では、夜から暁にかけての時刻変動曲線の凸凹が被験者によつてずれて現われて来、ねむけ、疲労感を特に訴える時期の conductance は非常に小さくなる。そしてこの時期が日常生活における早寝型か宵つぱり型かの傾向とも類似していることが窺われた。すなわち、一般に交感神経緊張に傾く昼間は conductance が大きく、副交感神経緊張に傾く夜間は小さい。そのうちでも副交感神経緊張の極致といわれる睡りを催している時は小さいのがみられた。

これらのことから、みかけの resistance level の変動は気温、皮膚温等の要因と、精神的、身体的要因とによる変化とが重つて現われているものであり、従つて室温、皮膚温等に考慮さえすれば、身体的、精神的状態の indicator としても使用しうることを認めた。

実験の後半は早稲田大学大学院上田雅夫氏の尽力によつてなされたものであり、記して謝意を表わす。

6.　学習行動の実験的研究（第7報告）
—行動の定型性と興奮剤が行動に及ぼす影響について—

大阪学芸大学 {今井欣悦
○中西重美

問題　問題箱から逃避の直前の運動は定型的反応を示すことを E. R. Guthrie, G. P. Horton は明らかにし行動の

定型性を強調し、私も第1，2，3，4報告で明らかにしたが E. R. Guthrie は、この問題について数量的考察はしていない。私は第5報告で行動潜時を指標として研究した結果、条件刺戟と反応が接近している事態においては定型的反応を示すことを明らかにしたが更に究明するために運動量を指標として次の実験を行つた。

実験Ⅰ　一定時間内における運動量と試行日数の増加によつてどのような変動を示すか。

方法　回転輪装置を用い、マウス22匹、マウスを回転輪に入れ30分間、自由に回転せしめ7日間連続して行つた。

結果　第1日目と第2日目の運動量の間にはU検定の結果、U＝154、Uの表から5％の信頼水準、その後の試行日数間にも5％の信頼水準でも有意でなかつた。時間の経過による傾向分析すると試行日数の如何に拘らずマンの検定の結果、5％水準で有意でなかつた。

実験Ⅱ　興奮剤（交感神経未梢は Adrenalin, 副交感神経未梢は Acethylcolin）を注入することによつて行動量が増大するか、時間の経過によつて如何なる変動を示すか。

方法　実験Ⅰと同様でマウスを3群に分けた。興奮剤は Ach. 10^{-5} を0.1cc,0.2cc, 0.3cc, 0.4cc　Ad. 10^{-5} を0.1cc,0.2cc,0.3cc,0.4cc を皮下に注射した。

結果　先づ3群間をH検定すると $H_0=0.2, df=2, X^2$ 分布表から90％で有意でない。Ad. 及び Ach. を10^{-5}0.1cc 皮注の時は $H_0=0.66, df=2$, 80％，0.2cc皮注の時は$H_0=1.93, df=2$, 80％，0.3ccの時 $H_0=0.20, df=2$, 90％，0.4ccの時は $H_0=2.95, df=2$, 30％ で共に有意でない。又時間経過に従つて3条件間の差は何れの場合においてもH検定によると30％以上で有意でない。時間の経過による傾向分析するとマンの検定の結果0.1cc 皮注の時、Control, Adrenalin, Acethylcolin の各群において5％水準で有意でなく、0.2cc皮注の時も5％水準で有意でない。しかし、一般的に Adrenalin 皮注の効果が減少し、Acethylcolin 皮注の効果が増大する。

実験Ⅲ　実験Ⅱで Ad. 及び Ach. の行動に及ぼす効果が明確でなかつたので興奮剤を皮注後15分休憩後の行動の変動を研究する。

方法　Ad. 10^{-5} を0.1cc,0.2cc, Acho. 10^{-5} を 0.1cc,0.2cc 皮注し15分後、回転輪に入れ、30分間自由回轉せしむ。

結果　10^{-5}0.1cc皮注の時 $H_0=12.69, df=2$, 1％, 0.2cc皮注の時は$H_0=12.25, df=2$, 1％ で共に有意であつた。更に3条件間の差は0.1ccの場合はすべて1％水準で有意であり、0.2ccの場合は20％以上で有意でない。一定時間経過による傾向はマンの検定より 0.1cc 皮注の時 Ad. 5％、Ach. 1％ 水準で有意、control は5％水準で有意でなく、0.2cc皮注の時は5％水準で有意でなかつた。

結論　(1) 一定時間経過による運動量は定型曲線を、試行日数間においても運動量差なく定型的反応を示している。(2) Ad. Ach. の効果は皮注後15分休憩後から現われる。(3) 一般的に Ad. の効果は行動量が減少し、Ach. の効果は増大する。(4)、(2)から心理学的緊張の問題が所在するのではないかと思う。

2. 感情・思考・学習

1. 配色感情に及ぼす面積の効果（Ⅱ）

慶応義塾大学 {○林　鉄　藏
宍　道　令　子

目的＝異なれる色調の2色をそれぞれ内部色及び外部色として組合せた場合に、その内部色の面積の変化によつて、快・不快の感情判断が如何に変化するかを検討する。

期間＝昭和30年8月中旬より10月中旬に亘り週2回を厳守して施行した。それ故に各実験次の間隔は全く恒常に保たれている。

観察者＝心理学科卒業者3名。（内2名は女性）

刺激方法＝実験Ⅰ及びⅣに於ては Milton-Bradley 社の標準色の 赤（R），橙（O），黄（Y），緑（G），青（B），紫（P），の6色の色紙（6×6cm）を使用した。実験Ⅱ及びⅢに於ては、6種の色紙（9×9cm）を外部色とし、その中央部に面積を大（6×6）、中（4.5×4.5）、小（2.3×2.3）の3種に変化させて、外部色以外の5色を内部色として貼附した物を刺激として使用した。以上の色紙は総べて中性灰台紙（15×22）に貼附され、大衝立の中央の露出窓から約2秒間呈示される。

実験＝実験Ⅰに於ては、単一色彩に就て、最も快（＋3）から最も不快（－3）までの7段階に分けて絶対判断をさせた。呈示順位はランダムで一色彩、10判断合計50判断を求めた。実験Ⅱに於ては、一対比較法を使用し、比較される一対は、常に外部色が同一の色調であり、それ等の内部色の色調は異つている。（R，O ……の6系列）一実験次に一系列を実施した。実験Ⅲは Ⅱ と同様、但し比較される一対は常に内部色が同一の色調であり、それ等の外部色の色調は異つている。一刺激は他の一刺激と左右の位置を変えて2回比較され、都合一系列内で8回の判断が求めら

れる。従つて、一実験次（50分）に一系列に就て60判断が求められた。実験Ⅳに於ては、単一色彩の感情値の変動の吟味を実験Ⅰに準じて行つた。

結果の考察＝

(1) 実験Ⅱ，Ⅲの前後に同一の手続きで求められた実験Ⅰ及び実験Ⅳに於ける単一色彩に就ての感情値は一例を除いて殆んど変化は見られない。

(2) 実験Ⅱに於て、或る配色が快又は不快として選ばれたならばその配色は内部色の面積を変化させてもその快、不快の系列内に於ける順位に殆ど変化は見受けられない。

(3) 実験Ⅳに於ても、実験Ⅱと全く同様の傾向が見受けられる。

(4) 組合される２色が同じであつても、外部色・内部色の関係を逆にすれば、即ち系列が異なる場合には好嫌の順位が大きく変動することがある。

(5) 或る刺激が実験Ⅱの系列に於て最も快なる配色として選ばれたとしても、その配色が実験Ⅲの系列に於ては、最も不快なる配色として選ばれることがある。又その逆もある。更にその場合に於ても内部色の面積の変化の影響は見受けられない。

2. 盲児に於ける空間表象の研究（第２報）

東北大学 ○大脇義一 菊池哲彦

盲児は空間関係を如何に表象しているか。これを研究するのに空間関係を持つような事物をば粘土細工で制作させる方法を試みた。課題は二階にある自分の教室から出て階段を降り、廊下を通つて便所に行くまでの道をば与えられた油粘土で以て制作するにある。盲児は宮城県盲学校中学二年生17名、これと比較するための統制群として仙台市の東北大学教育学部附属中学二年生16名である。盲児のうち先天的全盲８名、後天的全盲８名、先天性光覚盲３名、後天性光覚盲５名、学力は点字がやつと読める者２名、教科書だけ読める者７名、教科書以外に読書する者５名である。結果について先ず所要時間を測定すれば、盲児は55分乃至４時間、常態児は40分乃至90分であつて、大体に於いて盲児の方が二倍半から三倍の時間を要した。次に空間関係を構成している要素の表現が存在するかどうかを調べると、盲児の作品に於いては屋根が全く無いばかりではなく壁及び窓の表現頻度が小である。盲児は階段の手すりをよく表現し、常態児は是に反して両側の壁をよく表現する。その他の空間的特徴の曲り角の壁とか敷居など八要素についてみるとやはり五ケ年以上就学した盲児の方が最も多く表現し得ている。この場合先天盲と後天盲との差違はあまり明瞭でない。二階の表現については明かに常態児の方が勝れているが階段の傾斜の表現は盲児の方が遙かに正確である。盲学校の階段は20度であるが正確に20度の階段を作つた者が５人ある。ところが中学校の階段は20度であるが正しく20度の傾きの階段を作つた正常児は１名しか無い。盲児が運動感覚による傾斜の感覚が如何に正確であり、敏感であるかがこれによつて知られる。次に、空間的大さの表現がどれほど正確であるかを知るために実際の建築に於ける相互の比（たとえば二階の廊下の長さと階下の廊下との比）と、作品に於ける相互の間の比とを比較した。そうすると実物の比に比較的近いものは階段の下段、窓と踊場、教室と便所である。これに対して、過大表現されているのは階下の廊下である。その反対に過小表現されているのは階段の上段、手すり、階上の廊下である。一般に階上のものは実際よりも小さく表象され、階下のものはすべて実物よりも大きく表象される傾きが現われている。ただし便所だけは例外であつて、その大さの均合が割合に正確に表現されている。終りに作品の出来栄えの上、中、下について分け、就学の年数及び点字の読み方成績と対照させてみると、僅少ながら相関々係が存在するのが認められる。

概して先天盲の作品は、吾々が眺めて、何を作つたものか理解することが困難であるものが多い。部分部分の寄せ集めの傾向が強く全体の相互関係を正確に表現することから遠い。けれども先天盲の中にはまた後天盲と殆んど区別出来ないほど正確な表現をしている作品もある。後天盲の中には常態児と極めて似た表現をなし得た者が見出された。

3. 運動学習に於ける休息後の学習過程 (7)
—Warming-upの検討—

大阪学芸大学 前田三郎

Alphabet printing task の学習に於て休息後の学習過程では従来 Kimble, Wasserman, Archer 等は第二試行に於て著しい drop 現象が生ずることを見出し Pursuit rotor task に見られる如き、休息後の再学習に初期上昇が見られなかつた。この現象につき彼等は反応性禁止の早期発達又は Motivational factor によるか、又は Warm-up decrement の観察され得る時間は Pursuit rotor よりも短く30秒以内であること等で説明している。Kimble の方法に従つて行つた小生の実験に於ても同じような傾向が見られた。併し Printing task には Pursuit rotor task に見られるような Warm-up decrement が見られないだろうか。元来運動学習に於ては類似の反応が各試行に於て

反ぷくされると考えられる。Kimble の方法は各試行に現れる反応は稍々異る為に Warm-up decrement が現れないのでないだろうか。この為、本実験では Alphabet の順序で各試行の始めは常に A よりはじめるようにして実験をなし、再学習に初期上昇が見られないかを見ようとした。それと共に休息前の学習量によつて何等かの関係があるかどうか。更に Reminiscence 現象があるかどうか、そして休息前学習量と何等かの関係があるかどうか、をも従来の結果と併せ考えようとする。

実験方法は Alphabet の逆文字を一試行30秒間書かせる。休息前学習量によつて 5 ,10,15,20,25,30,35,40 の試行群に分け休息後（1時間）10試行の再学習をさせた。学習は凡て集中学習であつた。本実験の結果 Printing task に於ても休息後の初期上昇が明白に見られ唯35試行群のみが drop を示し 30,40 の各試行群は第三試行迄急上昇が見られた。Bell に従つて再学習の一、二試行の Performance の差を以て Warm-up を測定し休息前学習量との関係を見たが明白な傾向が見られなかつたが原学習量が多くなるに従つて減少する傾向があるようで Ammons の仮説と相反する。Ammons は休息初期の Dwu は以前の練習期間の消極的加速度函数として増加すると云う仮説をあげ、Warm-up decrement は有利な Postural adjustments より構成された Set が休息中に消失するからである。そして原学習が多い程多くかゝるものを獲得しているが休息中に失われ再学習の初期に再発達するから初期の急上昇が現れると考えた。Ammons の考えに合致する傾向が小生の従来の研究で見られたものがある。次に Reminiscence 現象はグループによつて見られたがその量は少く有意の差はなかつた。そして原学習量との間に明白な関係が見出されなかつた。原学習量と Warm-up decrement 又は Reminiscence との関係については更に休息時間を更えて検討する予定である。

結論として Alphabet printing task に於ても Warm-up decrement の現象が見られ、それは実験方法による条件が一つの要因であると考えられる。

4. 家庭科学習の心理

東京学芸大学　芦田　昇

家庭科と云う学科に関してはまだ心理学的研究が殆どなされていない。それで問題の手掛りを得るために次の点について調査した。

1. 学科を好む順位
2. 家庭科に対する好悪とその理由
3. 家庭科に関して日常考えていること
4. 家で「毎日」及び「時々」行うお手伝及びこれと家庭科学習との関係
5. 家庭科を学習してよかつたと思うこと及び学習しても仕様がないと思うこと

調査は質問紙法による。対象は東京都区部の山手及び下町の小、中学校各一校及び特殊小、中学校各一校につき各学年任意の学級若干を選んだが、こゝにはその中の小学校児童528名について調査した結果を示す。

好悪順位から云えば一般に男女間に反対の傾向が見える。つまり女子は家庭科を高く評価し好むのが普通であるが、男子の評価は低く嫌う者が多い。その傾向は5年より6年に著しい。好悪の理由はともに裁縫と料理が多く、女子ではこれが好む理由にあげられ男子では嫌う理由にあげられる場合が多い。ついで工作を理由にする者が多いが、これは6年の男子に著しい傾向である。領域を限定しないものでは興味と効果に関する記述が多く、5年では前者が6年では後者が多い。

日常考えていることについても右と同様な傾向が見えるが、外に授業に関する希望や批判が多い。こゝでは「学習態度に対する不満」と「時間増加」以外では「悪」の者の意見が多く、準備・方法・内容・設備等にわたつて否定的なものが大部分を占めている。これも5年より6年に著しい。

「お手伝」は毎日行うものも時々行うものも内容は大体似た事柄である。5年と6年の関係では5年が時々行つていることが6年では習慣化して行く傾向があり、特に女子に顕著である。亦一面「時々」行うものには各家庭で毎日は必要がない様なものが多く、「毎日」行うものはお使・掃除や食事前後の部分的な仕事の様に簡単な作業が主であり、学校で学習する内容としては奥行きの極めて浅いものである。尚おこれは「お手伝」の多くのものについて云われることであり、児童は意識的に学校の学習とは無関係に行つている者が多い。学習内容としての家庭科は、実際生活では尚お観察と多少の模倣の時期である。

併し掃除や洗濯の仕方一つでも家庭科で勉強してよかつたと云う者もかなりいる。特に裁縫・工作その他実用面で或る程実生活の喜びを味つている者が多い。家庭科に対し否定的な態度を示す者は理解があいまいですることは無器用で下手であつたり、実習をともなわない授業や特に男子の場合実生活に役立てる機会を与えられず、将来の見透しも同様で、興味が持てない状態にある。

3. 発　　達

1. 図形類同視に於ける方向及び配置の発達的研究（第4報告）

京都大学　園　原　太　郎
大阪学芸大学○田　中　敏　隆

第一回の報告においては、4組の図形群を使用し、各図形群の各々に一つの標準図形を作り、選択図形を5乃至6にして、類同選択を行なわせた。そして幼児及び成人が図形把握に当り、図形のもつ方向性、配置性が図形類同視に当り、如何なる重みをもつかを研究した。第二回目の報告は、幼児から成人間の発達過程を取扱つた。第三回目の報告は1、2回の実験結果を更に分析するため、図形に修正を加え、又図形数を8乃至9つにし、更に各図形群共に標準図形を或る一定の図形に固定しないで、比較図形も必らず一度は標準図形にして、幼児と成人の図形認知の特徴を研究した。本報告は、幼児と成人間即ち、小1年から中学3年までの発達過程を取扱つた。

手　続

使用図形　4組の図形群（個別用と団体用）を使用

実施方法　小1年から6年まで個別的、中2年から3年まで団体的

個別的—被験者を個別的に実験者に机を隔てて対座せしめ、子供の前にまず選択図形を横に並べた後、標準図形を選択図形の前方において、標準図形に似た順序に比較図形中から2つ選択させた。

団体的—選択図形を黒板上にはり、しかる後に標準図形を示して、個別的と同じ方法で選択させた。

結果の整理方法　1番よく似ているとして選択した図形に2点、2番目よく似ているとして選択した図形に1点を与え、この得点を図形毎にまとめて、%で示した。被験者512名。

結　果

発達によつて、変化の著しい図形についてのみ述べる。図Ⅰ組—園児では、色調的配置よりも、形の配置性及び主方向性が同じ図形を重視し、成人では、図形のもつ配置方向性を分析し、標準図形に最も近い図形を選択する。園児的特徴が減少し、成人的特徴が増加して cross する学年は、3年と6年頃に見られた。図Ⅱ組—園児では、標準図形に対して、成素の同じ転旋図形と、同一方向性の同じ形の角性図形との間に、余り大きな差が認められなかつたが、成人では大きな差が認められた。この移行の cross は3年に見られ、6年で更に変化し、中学3年で著しく成人特徴に進む。

図Ⅲ組—園児では、裏返しの図形が dominant に選ばれた。次いで、色の配置位置と、形の配列位置が重視され、半転旋図形は軽視された。成人では、裏返しの優位は同じであるが、後の二つは反対になる。

図Ⅳ組—園児では、分化されていないが、成人では、方向性に於いて、形が異らない限り最も簡単な配置転換によつて標準図形と同形になる図を重視する。発達段階は、小学3年、小学6年と中学1年、中学3年に認められた。

結　論

発達の経路として (1)図形の選択順位が逆転傾向にあるもの (2)始め選択順位に差がないが、年長学年になる程開くもの (3)2の逆の型 (4)始めと終りに差がなく、中間学年に差が認められる (5)始めより同一の差の傾向をもつもの。発達段階として、3年、6年と中1年、中3年に認められた。

2. 手根骨X線像計測による身体的成熟度決定基準とその妥当性について

金沢大学　大　平　勝　馬

筆者は既に身体的成熟度と身体・知能・学力・性格等との相関的研究結果を報告して来た。本報告はこの身体的成熟度決定の標準とした手根骨化骨化の標準値と、それに基づいて定めた身体的成熟度の妥当性に関する考察である。自昭和25年、至昭和29年の間（この間昭和28年度・29年度の科学研究費交附を受けた）に撮影せる、自0才、至15才間の男女1022名のX線像計測による結果である。

標準値は先ず10個の化骨核の出現率と、出現核X線像の面積によつて定めた。面積はトレーシング方眼紙にX線像を写しとり、1 mm^2 の目盛数えを行つて定めたものである。然し化骨核像面積と身長との間には可成り高い相関が存している点にかんがみ、Gauss の最小自乗法に基づいて一定年令(月)、1年身長(cm)における個人別標準化骨核面積算出の公式を作成し、その公式より求めた骨格年令及び標準面積と、当該個人の計測結果から成熟指数 maturation Quotient (M.Q) を算出することにした。この公式に基づく M.Q の妥当性検討の結果は次のようである。

(1) 核出現率より求めた成熟度との間には男0才～2才間と11才以上、女0才と10才以上にやゝ低い相関を見るが、その他の年令では＋.5～.8の相関を認める。

(2) 年令・性別化骨面積標準値より求めた成熟度との間には、各年令共＋.94以上の相関がある。

(3) 成熟度を示す他の身体的特質との関聯を見ると次の如くである。

（A） 成歯年令(X_1)、骨格年令(X_2)、歴年令(X_3)、間の相関及び偏相関は $\gamma_{1\cdot2}+.94$, $\gamma_{1\cdot3}+.90$, $\gamma_{2\cdot3}+.86$, $\gamma_{12\cdot3}+.74$ である。

（B） 初潮年令により有潮者組を早組(E)，普通組(N)，遅組(L)，に分け、更に無潮組(U)を加えて、被験者を4群とし、その群別 M.Q 平均を求めると、(E)109，(N)103，(L)98，(U)92となり、有意の差を認め初潮期の早い者は成熟指数も高いことを示している。相関係数算出結果は一.41である。

（C） 身長・体重との相関は、身長との間に 男 .76 女 .75 を示し、体重との間に 男 .66 女 .67 を示した。

（D） 体質係数 $\frac{身長(cm)-胸囲(cm)}{体重(kg)}$ から求めた発育指数（高峰氏）その間には ＋.25（C.R 5.14）の相関を示し、有意ではあるが甚だしく低い。この指数は体型指数とも考えられ、体型の変化を通して発育度を定めようとするもので、筆者の基準とはその特質を異にするためかとも考えられるが、この点は今後の研究にまたねばならぬ。

以上の諸結果から考察する時、筆者の公式より算出せる成熟指数は可成り高い妥当性をもつて、身体的成熟度を定め得るものと思われる。

3. 幼児画に関する一考察

東京経済大学　石　川　英　夫

問題　K. Bühler が早くから指摘しているように、「幼児は見るものを描くのではなく、知つていているものを描く」という命題が、従来の児童画研究の基本的信条となつている。殊に最近では Projective technique の発達とともに、絵画から Personality を診断しようとする研究が盛に行われ、既に Alschuler and Hattwick の極めて詳細な研究として、又 Show の Finger-Painting, Machover の Draw a person test 等となつて発表されている。

このように子供の絵画にその personality が投影されるとすれば、子供のかいた親の絵にも、親への感情、態度が投影されることが予想される。本研究はこの点に関する予備的研究として、子供のかいた親の絵を分析し、そこから親子関係の一端を探ろうとする。

方法　対象は5、6才の幼稚園児、男女合計139名。25×36cm の画用紙とクレヨンを用意し、「好きなようにお父様とお母様の絵をかきましよう」と教示する。描画後予め用意した質問項目につき、子供の親に対する好き嫌いを調査した。それから約1ヶ月期間をおいて、再び両親の絵をかゝせたが今度は「お母様とお父様」と教示を逆にした。

結果　子供がどちらの親を好いているかを決めるため、親への好き嫌いが現れるような日常生活の具体的場面に関する13項の質問を行い、それに父という答が6項以上現れた者を父を好む群、母という答が7項以上現れた者を母を好む群とした。それによると、父を好む者は31名（25.2%）、母を好む者は48名（34.5%）となつた。

1） 描く順序　男児はいずれを先にかくともいえないが、女児は母を先にかく傾向がある（P<.01)。教示によつて父から母にかく順を変えた者は26.7%で、教示の影響はあまりない。好きな親を先にかく傾向がある（P<.01)。特に女児にこの傾向は著しい。この傾向は一般的かき順の傾向を凌駕している（CR＝2.05,2.00)。男児はかきにくい親を先に、女児はかきやすい親を先にかく傾向がある（.02>P>.01)。

2） 大きさ　男女児とも同性の親を大きくかく傾向がある（P<.01)。好きな親を大きくかく傾向は認められない。男女とも先にかくものの方が大きい（P<.01)。

3） 位置　男女児とも同性の親を左にかく傾向がある（.05>P>.02)。男児は先にかくものを左にかくが、女児はどちらともいえない（.05>P>.02)。好きな親と位置との間には有意な関係は見出せない。

4） 恒常性　2回の実験で恒常性を保つた者は、かき順については60%、大きさについては59%、位置については56%で、恒常性は高いとはいえない。

結論　以上の若干の考察から、絵画によつて Personality を診断するには、相当慎重な態度が必要と思われる。本研究の範囲では、かく順序が好き嫌いと多少関係があるように考えられる。

4. 児童生徒の基地における実態について

山口大学　久　芳　忠　俊

1. 問　題

基地と言えば色々の観点から色々の事柄が関連し更角問題となり勝ちであるが、こゝでは基地に賛成とか反対とか言うような言わば政治的立場や思想的立場からは全然はなれて、現に育ちつゝある子供達を取り巻く環境において、基地であるが故にどのような姿を子供が現わすか、或は基地であるが故に色々な事象が現われているが、それに対してどのような感じ方をしているかを子供達の生地のまゝに捉えて現場教師が生活指導をする場合の参考になればと思つて、この問題を取り上げたのである。

2. 調査方法

1. 以下5つの立場から質問紙法により解答を求めた。
   a. 学習を妨げる爆音騒音の現状
   b. 街娼の行動が児童生徒の生活行動に及ぼす影響
   c. 基地の児童生徒の道徳的行動の現状
   d. 駐留兵に対する児童生徒の感じ方
   e. 基地に対する父兄の感じ方
2. 調査期間—昭和29年1月—3月
3. 岩国市小、中学生徒、児童1000名（無選択抽出）父兄は20才、30才、40才、50才の年令群に分つて夫々200名宛計800名

3. 結　果

問題1に対しては爆音騒音で勉強が妨げられるものが37%街娼の発する奇声怪声で邪魔されるもの7%。

問題2に対して街娼がいることをよいと思うもの0.4%　悪いとするもの85.2%　街娼の言葉遣いをよいとするもの0.4%　悪いとするもの73.1%　その理由としては48%のものが〔下品で男のような言葉を遣う〕としている。街娼をどう呼ぶかの質問に対しては62%がパンパンと呼んでいる。街娼の職業を知つているかに対しては小学校5、6年は殆ど知つているが低学年ではあまり知つていない。知つている理由としては現場を目撃したから知つているが大部分である。

問題3に対しては小使銭が多額に使われていることや、基地であるために〔パンパン・ガール、ハングリー〕と言う言葉が子供間で盛に使われている。〔ハングリー〕から投げ銭問題も起るのではあるまいか。

問題4で駐留兵をどう思うかの質問においてすきと感じているもの1.9%　きらいとするもの32.7%　どちらでもないが34.4%　きらいな理由としては〔人前でいやなことする〕が一番多い。

問題5の父兄に対する質問で、基地があることをどう思うかに対してよいとするもの0.3%　悪いとするもの35%いちがいに言えないとするもの54%。

5. 青年心理の研究(12)
—青年期及びその以後の恋愛—

日本女子大学 {児玉　省・吉田敬子 / ○堀井千鶴子・登倉京子 / 松本伸子}

青年期友情の一形態としての恋愛について、青年期及び其以後の変せんについて考察を加えようとした。調査の対象は10代、20代、30代、40代の男女1110名で、調査方法は無記名の質問紙法を用いた。第1の調査の要点は、恋愛的経験を持つた人がどれ位あるか、又何回位あつたか、であるが、恋愛的経験を持たなかつた者は 40才男子26% 女子36% 30才男子4% 女子30% 20才勤労男子16% 同女23% 20才男子学生30% 女子43%。また経験者はどの年代も1回が最も多く、2、3回が之に次いでいる。女性の場合は3回以上は非常に少ないが、男性の場合は3回以上も多く、20回位に及ぶものもある。

これらの恋愛的心情の結果がどうなつたかを見るために (1)結婚した (2)結婚しないが交際している (3)時折なつかしく思い出す (4)全然交渉がないし思い出すこともほんどない。の4つの角度から調査した。性別的な差を見ると、恋愛から結婚に進む率は男性より女性の方がはるかに高く、男性の恋愛は結婚にまで至るものが少なくなつている。また恋愛の破局の場合は、女性の方に〝時折なつかしく思い出す〟というのが多く、男性には、交渉もなく面影もないというのが多い。女性の恋愛回数は少く、多く結婚にまで進み、男性は恋愛回数は多いのに結婚率は低い。男女両性の恋愛態度の異る点であろう。恋愛して結婚しなかつた場合についてみると。男女とも、家庭の事情と答えている者が最も多く、これに次ぐのが、勉学中とか、経済的不安定とかの「結婚条件の不備」と「淡い感情」がある。20才男性では前者をあげた者が50%、同じく女性では後者をあげた者が50%である。「結婚と恋愛とは別」と答えた者が30代に見られる。「戦争のため」と答えた者が同じく30代だけ見られるが、戦争期の恋愛であつたものであろう。その他の理由は比較的低率である。

次に既婚者について配偶者以外の者との恋愛経験について調査を行つたところ、30代男性は40% 女性は50% 40代男性47% 女性74% が結婚前に恋愛的心情を結婚当事者以外に持つている。性別的に回数をみると、女性は1、2回位で止つているが、男性は1回から4回以上にまでわたり、4回以上もかなり多い。

以上のように、恋愛から結婚に至らなかつた理由には年代的特異性と性別的差異が見出される。青年時代一度の恋愛で結婚にまで進んだ者もあるにはあるが、相当数の男女性が1回以上の恋愛的心情を持ち、また結婚当事者以外との恋愛的経験を持つた人が多いことが見出された。

4. 言　　語

1. Integration＝I＝統合の行動に及ぼす効果について

信州大学　原　　善平

〔I〕 人は言語によつて難事から救われるというのが私の信条である。ではどんな言語がそういう力をもつているかそれは人と人との関係を望ましいものにする言語である。Iはその一つしかも大きな一つである。Iはわれわれの発達を方向づけて、われわれの関係を望ましいものにするところの言語である。それはIについてのつぎのしらべからいいうる。すなわちIは、(1)人の社会的な面と個人的な面とを社会的な面によつて統合し (2)人をフラストレーション、不安、不幸から救つてくれるところの調和と統一とを求め (3)積極的、力動的、建設的、創造的、発達的であり (4)相互作用的な人格としての個人と他の個人との関係、個人と国家との関係、国家と国家との関係を望ましいものにし (5)全体をより大なる全体の一部となし、その活動を円滑化し、平衡を破られるとき、平衡を回復するために、全有効潜在精力を使用して、最大の仕事を達成する。以上は Be integrated within oneself and integrated with the environment の公式で表わすことができる。

〔II〕 以上を簡単化し、具体化するために、ファミリアーな実験をとりあげる。それは紙上に描かれた二重線の星形を鏡に映し、鏡に映つた星形のみが見られるようにスクリーンで、紙面を、紙面から少し離れた上のところでおおい、被験者は鏡に映つた星形を見て星形の二線の間を二線にふれないように鉛筆を動かして、星形を描く実験である。この実験のめざす目標は、鉛筆がすらすらと二線の間を動いて二線に平行したような星形が描かれることである。すなわち Least action and maximum work が目標である。これができるようになつたとき、身心の統一体としての人間のは heterogeneity に達するのである。そしてこのときその action は homogeneity に達するのである。ところがこうなる前は action が heterogeneity で構造が homogeneity であつたのである。そこで Now, instead of homogeneity of structure and heterogeneity of action, we have heterogeneity of structure and homogemneity of action. である。こうなつたのは、目の方と手の方とが統合されたからである。部分が全体内の部分となつたからである。

〔III〕 心理学が機械的な要素観をすてて有機的な全体観をとるようになつたのは、心理学史上の重要な変革であるが、これは形態心理学の出現によつてもたらされたものである。Iは心理学的には、教育者が学習者の全体的な人格を示すために用いる語である。生活体は S－I－R なる公式で表わすことができる。この場合 S＝Stimulns, I＝Integration, R＝Reaction である。そしてIには生理学的なIと行動的なIとがある。後者は目的的な活動であり、われわれの問題にしているIは行動的なIであつて最小抵抗の神経的通路をつくり、これによつて最大の仕事をなす機制である。われわれの人格は Be integrated within oneself and integrated with the environment. なる公式が個人対個人、個人対国家、国家対国家の関係に適用されて成就された行動的統合の家庭的機制、国家的機制、世界的機制をもつとき、平和で幸福な家庭生活、人類生活を可能ならしめる行動の主体となる。ここにいう言語は生理的統合、行動的統合の統一的機制から発する行動を内容とする言語である。

2. 幼児の読書レディネスについて

東京学芸大学　角　尾　　稔

現在、幼稚園教育において、言語指導は原則として、聞く、話すの領域に重点がおかれ、読字指導の面については、なるべくふれないようにと指導されて来ている。このことは近く発表されんとしている、文部省の幼稚園教育要領の中でもこうした傾向は見られるのである。しかし、幼児のなかには、すでに読書レディネスのできる幼児も相当に見られるのであるから、積極的な指導が必要であり、こうした事実の裏付けと、その指導上の問題点を明らかにする為の一つの考察をしてみた。

対象幼児50名

年令、5才1ヶ月―6才0ヶ月　平均5才7月、阪本氏の読書レディネス診断テストを実施した結果、

指　摘	31.36
同形結合	8.15
記　憶	10.91
文　字	11.90
眼　球	16.28
総　点	78.60

左のような結果を得た。総得点の標準偏差は、8.60、読書レディネス偏差値では56.84であつた。

読書レディネスの総合的な考察をすれば、この幼児達は、6才2ヶ月に相当し、文字を拾い読みし、読字指導の必要な段階に到達していると判断された。

読字レディネステストの得点を、年令との関係に於いて考察するため、年長群25人 年少群25人 の得点上の比較をしたところ、

		レディネステストの得点	S.D.
年　長	(5:11)	82.4	8.80
年　少	(5:3)	73.2	12.20
		$t=3.06$	

両群の間には、危険率2.5％において有意の差を認めた。知能上位群25人と知能下位群25人の間の読書レディネステスト得点の比較をしたところ、

知能上位群のレディネステスト得点	81.4	(S.D. 15.3)
知能下位群のレディネステスト得点	76.8	(S.D. 13.6)

$t = 1.1$

知能の上位群と下位群の間には、読書レディネス得点の面では有意の差が見られなかつた。

以上、幼稚園年長組の中には、生活年令の上下によつて、読書レディネスの差は見られたが、知能の上下では差が見られなかつた。結論として (1)単に知能の上下につて、読書レディネスの推測をすることは、この年令では危険がある。(2)読書指導に当つて、読書レディネス診断テストの活用や、読書レディネスの因子についての十分な考慮が必要である。

3. 生活場面における言語行動の特徴
—運勢判断—

国立国語研究所　村　石　昭　三

1　研究の目的

個人は言語生活24時間中、さまざまな言語生活場面にそうぐうする。そうした場面系列の力学的体制のもとで、その規定を受け、特殊の言語行動を示していると考えられる。従つて、言語生活場面のひとつひとつをとりあげて、場面による言語行動の特徴を明らかにしようとする。本報告は (1)大衆浴場 (2)大衆酒場 につぐ第3報告として、場面を運勢判断においた。

2　研究の立場

(1) 話し手、聞き手の言語行動をみる。
(2) 言語行動の構図、言語、機能をみる。
(3) 音声言語、非音声言語の行動をみる。
(4) 言語を全事態における一行動形態とみる。

3　調査の条件

録音器によつて鑑定中の易者と客の音声言語を採集し、同時に、追跡観察によつて非音声的言語行動を記録した。調査期は昭和30年9月。場所は東京、神田と池袋駅前。

4　整理の方法

録音採集した音声言語を文字化し、これに観察記録を結びつけて、量的、質的分析をくわえた。（文字化した言語行動の一部は、雑誌「言語生活」昭和30年11月号に掲載した。）

5　結　　果

言語行動の特徴のあらましは以下のとおり。

A　言語行動の構図

(1) 構図は固定性を持つ。易者と客は対向し、両者の物理的距離が短かい。
(2) 客の手相は言語行動の素材的価値を持つ。
(3) 構図内に第三者の介入を避け、孤立した場面を構成する。

B　言　　語

(1) 言語表現過程
訴え(客)→占断(診断)(易者)→陳述(易者)→聞きとり(客)→確かめ(客)→助言(易者)
(2) 言語量
言語行動の初期は易者、中期は客、後期は易者（または等量）の言語量が多い。
(3) 話しかた
易者のプロジェクト的話しかたと表現論法の矛盾。
(4) 聞きかた
客の恣意的な聞きとり態度。
(5) ことばの特殊な使いかた
文脈における＜ソレカラ＞＜シカシ＞＜ートカ＞＜マアネ＞の魔術的効果性。

C　言語行動の機能

易者の鑑定はカンセリング的機能を持ち、運勢判断における言語行動は客に瞬時的な精神治療効果を与える。

133830

5. 人　　格

1. 自我概念の安定の測定に関する一試案

日本大学　丹羽淑子

研究の目的　自我概念の安定性はパーソナリテイの一デイメンショシンと考察され、人間行動の理解とその予見を行う場合に役立つであろうと云う見解から、これを測定する方法を見出そうとし、又本調査に用いた方法の妥当性を考察しようとした。

方法と手続き

被験者　某女子短大英文科（46名）保育科（24名）計70名。

自我概念の測定の方法　J. J. Brownfain の、その論文 Stability of the Self-Concept に用いた Self Rating Inventory を飜訳、そのまゝ使用する。各 Ss は25の項目を①「私的自我」②「肯定的自我」③「否定的自我」「社会的自我」の四面から、おのおの別個に自己評価を行うにあたり、1～8までの品等でおこない、②③の場合は巾を拡げて0～9にする。

Stability Index の評点の総和をもつてみる。両者間の脱逸が大であれば、あるほど自我概念の安定度はゆらぎ、その差が小であればその人は安定者とみなす。この安定度の測定の信頼度を奇数項、偶数項による折半法を用いスピアマンブラーウン予言式によつて検定の結果、.91を示す。

次に同様の手続きで Social Conflict Index の検査を私的自我と社会的自我の両評価の脱逸の度によつてみる。その脱逸大な時は、対人関係に不適応を示すとし、小なる時は、適応良好と云うことにする（然し本調査では、主要な関心は Stability Index に集注してみようと思う。）

全 Ss は Stability Index の結果に基いて、大体三分し Stable group 23名、Unstable group 25名を抽出する。これによつて、自己評価のレベルの比較をみると、両者間の平均得点には有意の差は認められない。即ち、ほとんど同様な平均を示す。然し不安定者グループにおいては、安定者グループにみられる各項目間に、評価の態度は一貫しておらず、評点間の巾は、前者に比して、大きい。私的自我の評価を基に、25項目中安定者グループが不安定グループより高い自己評価をなしているものは、15項目で、そのうち、P＜.05の有意の差を示すものに、寛容、明朗性、社会的落付、外見的魅力があり、不安定者グループの場合は、其の他の項目により高い評価を行つているが、就中、「一般的教養」にいちぢるしい差をみせている。

Social Conflict Index においては、大体 Brownfain の調査と比して、低得点を示し、社会的自我のの評価にあたつて、他人よりうける自分の評価より高いとする者が多い。

以上の試案を通じて、方法上の2、3の反省がなされ得る。即ち Stability index 及び Private Self-rating における各予言信頼度の測定は、それぞれ.91、.82と高い有意性を示しているが、項目を概念的言葉でのみ列挙した事、4つの異なる枠組から自己判断を行い得るまで、被験者は充分馴れていないため、混乱もまぬがれなかつたであろうとする点、及二つのグループの選定を三分したこと等に対する再考がなされるべきである。

2. 心理劇の効用と限界

お茶の水女子大学　松村康平

〔「心理劇」実践（研究）の経過〕

①子どもを包む世界の改変を目的として、幼稚園及び保育所の母の会・先生の会で実施（1955年7月1日より現在まで、母の会で5例。先生の会で10例。）②教員養成機関で、子どもの理解を深め、その扱い方を知ることに役立てる目的で、主として教室で実施（10例）③青年自身の問題を解決するために、主として教室で実施（15例）④一般講習会で、子どもの理解を深めるために実施（2例）

劇を演じる人は、その場に参集している会衆であり、これまでの例では、②及び③の若干の場合を除き、劇をすることは予告されていない。登場人数は、制限しなかつたが、2人以上8人までにとどまり、4ないし5人の場合が多かつた。人数は、劇の種類によつて異なるが、多くの場合、劇の前に「なにをするか」を会衆がきめる目的で「バズ集会」をもち、各グループから問題を出し、問題がきまつたならその問題を提出したグループに劇をするように導いたことも、人数を制約したと思われる。所要時間は、会衆と共に問題の核心にどこまで迫ろうとするかにより、まちまちになるが、実践場面で「私」（講演・演出・監督・解説を兼ねる）にまかされる時間にも制約があるため、約2時間である。実践経過の順序は、心理劇についての講演・主題決定のためのバズ集会・主題の選択決定のための投票（挙手）・劇をする人たちの打合せ（休憩をはさむ。②では、決定した主題について、劇をする人たちの打合せの間に、他の人は「自分ならこうする」という考えを紙にかく。）・劇の実施・劇についてのバズ集会（その前に、②では、感じたこと・最初に考えたとは違つてきたことなどを、書いておく。）・全体討議（バズ・グループが、6ないし7ま

でであるときは、各グループからバズ集会直後に1名を出して、その人たちでパネル・デイスカッションをおこなつて、効果をあげている。）（心理劇とバズ集会法とを組合わせての母の会の運営は、三隅二不二・岡村二郎・坂本龍生と筆者が7月1日に実施したのが最初で、それ以後、上例のように筆者が発展させたのである。）

〔「心理劇」の効用と限界〕

この試みは、モレノの主唱するものとはやや趣きをかえて発展している。現段階では多くを語ることを差し控えるが、その成果には期待できる。劇の実施を意図して実施し得なかつたことは、これまでにない。参会者はその効果を認め、部分的には疑問を抱くもの（例えば、先生たち自身が演出者となつて母の会で実施することについての疑問、その他）はあつたが、全面的な否定はみられなかつた。参会者数は、1会場15名から200名に及んでいたが、多数の場合は、せりふが通らないうらみあり。大声を出すと、問題の核心にせまる真実さを減じる。最高潮になると、劇の内容は深刻であるのに、「笑い」を誘発するおそれあり。問題が具体的に把握され、生々と討議されるところに特色があるが、劇化により問題が特殊化しているため、発展のはばまれるおそれあり。観衆の態度に、「今ーここ」に徹することと、「もしーならば」の仮設に立てることが、必要とされる。心理劇の効用と限界について語る場合の重要な基準の1つは、「今ーここ」の原則と「もしーならば」の仮設が、どこまで取りいれられているかである。

6. 教　　育

1. 学生生活と悩みについて

山口大学　小西秀勇

I 問題及び目的

発達段階からみて、青年中期から青年後期にかけての時期にある大学生等が、日頃彼等の生活の中に体験している困難は、種々様々である。そして彼等は、自己及び自己の生活環境に対して、より効果的に適応しようとして、常にそれらの困難とたたかつているのであるが、それらの困難は、学生自らの努力によつて合理的、効果的に処理出来ているとは、必ずしも断言し得ない。こゝに科学的、合理的背景をもつた Counseling を通じての、学生補導の必要性が考えられるわけである。

学生補導の中心機能としての Counseling の一面として、学生の Personality の評価に関する資料を得ることは、彼等をより効果的な適応に導くために、しばしば重要な意味をもつてくる。

以上のような観点から、学生に対する Counseling の一手掛りを得るためのものとして、学生が常に当面している困難の実態を明らかにし先づ、男女間の異同を、E. S. Mills の Story Completion Test を施行した結果との関連に於いて、考察しようとするのが、本調査研究の目的である。

II 結果及び結語

教育学部2年（男95名、女70名）の学生を対象として、彼等の個人的苦悩を調査した結果によると、特に悩んでいることはないという者は、男10%、女8%で、悩みをもつている者については、それを問題別に見ると、(1)勉学上の問題（男23%、女8%）(2)交友上の問題（男2%、女10%）(3)家庭上の問題（男14%、女12%）(4)自己の問題（男38%、女19%）(5)生活態度の問題（男5%、女3%）(6)将来の問題（男12%、女25%）(7)恋愛問題（男6%、女23%）という結果を示している。調査の結果から明らかであるように、男女間の最も異つた傾向を示しているものは、勉学上の問題と、恋愛問題である。このような傾向を示す原因を明らかにすることは、必ずしも容易なことではないが、男女両群の年令水準、生活環境等が、それほど異つていないということから考えると、発達的な何等かの男女差の問題が予想される。そこで以上の調査と同一対象に対して、Story Completion Test を施行し、その反応結果から得られた主題の分析結果を考察してみた。

Story Completion Test は学生生活の一般的範囲を包含した15項目から構成されている。15項目に対する反応を主題別に分類してみると、男子学生は、勉学及び罪に関する主題の出現率が、女子学生の場合よりも大なる傾向を示しているのに対し、女子学生は、性、恐れ及び攻撃に対する主題の出現率が男子学生の場合よりも大なる傾向を示すという結果が見出された。以上のような傾向が一般的に確証されるためには、テストの信頼性、妥当性も問題になるが、更に厳密な立場から調査研究が進められなければならない。

2. 四日市における小学校音楽学力についての一考察

四日市市教育所究所　神沢良輔

I 目　的

この研究の目的は、四日市々における小学生の音楽学力――主として知識理解――を、文部省の学習指導要領と、現行教科書を基準として分析し、それをテスト法によつて調査することにより、その実態をできるだけ客観的に把握することにある。

Ⅱ 方　法

i) テストの作成

テストは上記の基準により、小学校1年用より6年用までの6種のテストを作成し、各学年用テストには、同一問題の重複されるのをさけた、下位テストは、1) 音の長短　2) 音の高低　3) 和音　4) 各種の記号　5) 形式　とした。

ii) テストの実施

テストの実施は、学年末を選び、1955年3月22日とした。被験者は1、2年用テスト1年～6年、3年用テスト2～6年、4年用テスト　3年～中学2年、5、6年用テストは4年～中学2年とし、それぞれの学年用テストの未習学年にもテストを課した。実施人員は、

小　1年　319名　　2年　237名　　3年　213名　　4年　209名　　5年　119名　　6年　227名

中　1年　101名　　2年　53名　　計　1478名

で、小学校4校、中学校2校より被験者を選んだ。なお、このテストは、同一個人に対して、学力の発達をみるためそれぞれの学年用テストを課した。この結果、各学年用テストの延人員は、6393名となる。

Ⅲ　結果とその考察

i) 全体の平均正答率について

全体的に平均の正答率をみると

a) 学年の発達と、正答率の向上は、傾向として平行しているが、必ずしも、その間には、一定の関係はない。

b) 平均の正答率の範囲は、1年用テスト（60.6～78.9）2年用（38.0～76.7）3年用（28.9～58.5）4年用（27.5～53.6）5年用（33.7～41.9）6年用（40.0～42.9）であり、この結果2年用テストを除き被験者の学年の向上と正答率の間の差があまりないことを示している。

c) つぎに、最高の正答率をみていくと1、2年用テストは、70%　3年用50%　4.5.6年用 40%で、他教科の正答率と比べると非常に低い正答率を示している。

ii) 下位テストの正答率について

下位テストの困難度については、傾向として、和音が最も低く、これについで、音の強弱、音の高低の順になつている。しかし、これも、各学年用テストにおいて相当の移動を示している。

なお紙面の関係上、これ以外の考察は省略する。

3.　指導法についての一研究（第2報告）

名古屋大学教育学部　　大　西　誠一郎

目的　第1報告では、集団中心の学習が個人中心の学習に比して著しく進歩することを明らかにしたが、本研究では、学年の進むにつれて、このような差異がどう現われるかを明らかにする。

方法(1)　被験者は小学校2、4、6年それぞれ2学級を対象として行う。集団中心に指導を行う学級の集団は、男女別々にし、かつ学業成績に関して異質構成であり、成員は互いに親密であることを条件とする。

(2)　実験材料は、2、4、6年各々60.70.90字の漢字の書字を課す。

(3)　テスト後2日を経て結果の検討を行うが、その方法は両学級の間に差別をつけ、一方は答案の検討を個人別に行い、他方は、5名ないし6名の集団ごとに行う。同様の手続（テスト—答案の検討）を4回くり返えす。

結果(1)　2年生では、個人中心の指導と集団中心の指導との間に有意な差を認めることはできないが、4、6年生では、集団中心の学級の方が著しい学習の進歩を示している。

(2)　第1回テスト結果によつて成績上位群と下位群とにわけて検討する。成績上位群の2、4年生は、両学級の間に有意な差は認められないけれども、6年生では5%の危険率をもつて集団中心の方がより大きい進歩を示している。成績下位群にあつては、両者の間に一貫してけん著な差異を認めることができる。すでに2年生にも、5%の危険率をもつて集団中心の方がすぐれた結果を示している。4、6年においてはその差は1%の危険率で有意差を示し、6年生の進歩（1回目と4回目テスト結果の差）が個人中心の場合には27%であるのに対し、他方は50%で、ほぼ2倍の進歩率を示している。

4.　英語学習の心理学的研究（13）
英作文学習にあらわれた本邦学生の誤謬について—第2報告—

東京教育大学　小保内　虎　夫
　　○永　沢　幸　七
恵泉女子短大　国　安　清　香

「目的」　本邦学生生徒が和文英訳する際に多くの誤謬を犯すが、それらの誤謬を集め分類して類型に分ける。次にこのような誤謬の原因はどうすれば軽減できるかについて考察する。

「方法」　自分の担当している学生生徒の英作文、及び数種の高校用英語雑誌に現われる英作文の添削答案を材料

とした。更に英作文に関する学習講座をも参考とした。使用雑誌 The Youth's Companion、高校英語研究、英語世界、上級英語、螢雪時代などである。

「考察」　和文英訳は語句と英文法の知識があれば一応書けるものと、慣用的用法を憶えなければ出来ないものとがある。今回は後者には触れないで、英作文を書く時に学生生徒が犯す各種の誤謬の中から特に基礎構文に関する大きな誤謬を集め、第1回報告を検討して、類型を附加して行つた。

Ⅰ　表現法の根本相違

(a)　使役と受動態の混同―日本語では使役と受動態が同じために、英語におけるその相違が分らない。

(b)　英文の語順による語謬　(1)動詞と目的とを離しておく誤り　(2)先行詞と関係代名詞を離しておく誤り　(3)感嘆文と疑問文の混同。

(c)　感嘆文における形容詞、副詞の位置　(1)疑問文における動詞、疑問詞の位置　(2)否定文における否定詞の位置

(d)　英語における述語動詞の特性からくる誤謬

Ⅱ　日本語の未分化性と英語の分化性

Ⅲ　品詞の誤用　(1)名詞と形容詞の混同　(2)動詞と名詞の混同　(3)動詞と形容詞の混同　(4)名詞と副詞　(5)接続詞と前置詞　(6)形容詞と副詞。

Ⅳ(a)　日本語々句の云い廻しにひかれて英語語句の選択を誤る例

(b)　和文の冒頭語をいきなり訳文の主語に立てる誤謬、などである。

「要約」　以上の誤謬の起る原因は、一言にしていえば英語学習が十分に行われていないことによるもので、これは現在の英語教育法の欠陥に基つくことが多い。これを矯正するためには英語の基礎的な用法を一層組織的に研究するとともに、他方では反覆練習による訓練が何よりも必要である。この際特に注意すべき点として語を句として学習すること、語の意味を分析して学ぶこと、文中におけるその語の機能を理解することなどがあげられる。日英語表現上の相違を明らかにしておくことも有効である。

5.　知能と学力との相関をめぐつて
―列位差の著しい児童における行動的特性について―

岐阜大学附属小学校　宮　脇　　修

ここでいう列位差の著しい児童とは、知能と学力（基礎学力と呼ばれている国、算のみ）との相関をめぐつて、その列位差の甚しい児童を意味している。

知能に対し学力の列位が優位にあるものを＋型とし、劣位にある者を－型とした。

＋型及び－型児童の行動に於ける一般的特性を比較研究を目的として、評定法による調査を実施した。

調査の対象は＋、－型の夫々列位差10以上の児童を対象にした。対象頻数は、延べ　＋型～142名　－型～134名である。

評定に関しては、先に文部省が行つた〝精神遅滞児に対する性格調査（主として具体的行動を問題にした）〟を適用した。

評定項目は、66の item からなり、次の4つの場が設定されている。

i）　性格に於ける一般的傾向

ii）　家庭に於ける児童の行動的特徴

iii）　近隣、友人間での遊びに於ける行動的特徴

iv）　勉強や仕事に対する時の行動的特徴

評定者は、担任教師が家庭と連絡してあたつた。

☒結果の処理と解釈は、下記のようである

傾向を知るために各 item の頻数 total に誘意点を与え（評定には◎○△×？の5種チエックを施した）◎～＋2　○～＋1　△～－1　×～－2　とした。

頻数Nと誘意点とを相乗して誘意価を算出し＋の誘意価の全体に対する Percentage を求めた。

此の Percentage を－型、＋型とを比べる条件とし、item 中特に傾向度の著しい差異をもつた行動をとりあげて問題にした。

問題となつてあらわれたのは〝仕事に対する態度〟〝情緒性〟〝友人間の行動(グループの参加状態)〟等であつた。

－型と＋型とを比べ、それ等の行動的特性をまとめてみると、次のようになる。

＋型では

(1)　仕事に対し場がかわつても忠実さを示す。自分に与えられた仕事に誠実である。

(2)　社会的に適応する行動が多く、どの group にも参加出来、その一員となる事が出来る。

(3)　ひとつの事にこだわりすぎる位である。

(4)　情緒的に安定している。

等の諸点が、量的考察からして浮び上る。

一型では

(1) 仕事に対して比較的ルーズである。

(2) 社会的不適応行動が多く（反社会的行動）グループの参加状態がわるい。

(3) 落ちつきがなく、おしやべりである。

(4) 外にでて、遊ぶ時間が多い。

と、＋型とは逆な行動が（対比したので当然ではあるが）まとめられた。

☒今後、この問題の吟味を予定し、実行しつゝあるが、一型に重点をおき学業不振児と関係づけ、時に case-study, sociometric valuation の分析的研究によつて次の段階に進みたいと思つている。

6. 学級に於ける心理的集団の形成について

愛知学芸大学　末　利　　博

Ⅰ 研究目的　新入学女子学生の学級に於ける心理的集団の形成過程を究明する。

Ⅱ 被験者と調査期間　昭和29年度入学の岡山大学医学部附属看護学校女子学生41人について昭和29年度1ヶ年間の交友関係を毎月10日前後に質問紙により調査した。

Ⅲ 研究方法

a. 質問紙法を用い、内容の説明を附し、級友を The Confident.（信友）The Intimate.（親友）The Familiar.（親友）The Acquaintance.（知人）の4段階に区分して報告させた。

b. 調査期間の中間（9月28日）に〝入学後の学級に於ける友人関係について〟内省報告をさせた。

c. 調査期間の最後の月（3月）には毎月の調査の外に Social Acceptamce Test を実施し、又年間を通じての友人調査票記入の反省報告を求めた。

以上の資料を分析して学級のメンバーの社会的地位の安定の角度から心理的集団の形成過程を究明し、併せて調査票記入の反省にもとづいて本調査の信頼性、妥当性の検討を行つた。

Ⅲ 研究結果とその考察

Tab. 1. 社会的地位の相関（最後の月の調査結果 γ_1 と S. A. T. γ_2 基準）

項目＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
相　関（γ_1）	−.01	−.02	.19	.20		.46	.42	.51	.63	.63	.83	
相　関（γ_2）	.03	.17	.11	.02		.05	−.12	.14	.17	.12	.31	.27

Tab. 2. 各月間の社会的地位の相関

月	4～5	5～6	6～7	7～9	9～10	10～11	11～12	12～1	1～2	2～3
相　関（γ）	.51	.24	.49	.55	.73	.46	.74	.62	.70	.82

Tab. 3. 9月下旬（現在）に於ける友人関係発展段階

発展段階	a	b	c_1	c_2	d_1	d_2	不明	計
頻　数（f）	4	7	6	10	3	0	1	31
比　率（%）	13	23	19	32	10	0	3	100

註 a. 学級に於ける近接の一部の人達のみとの交友段階。

b. 学級に於ける全級友を一応理解し、友人関係模索の段階。

c_1. 学級に於ける全級友を一応理解し、友人関係に悲観的段階。

c_2. 学級に於ける特定のメンバーとの、交友関係への発展の段階。

d_1. 学級に於ける特定のメンバーとの交友関係崩壊の段階。

d_2. 学級に於ける特定のメンバーとの交友関係固定の段階。

被験者の生活環境は全寮制度で6人同室で生活している。従つてこの様な生活条件が学級の心理的集団の形成に強く作用していると思われる。心理的集団の形成とメンバーのクラスに於ける社会的地位の安定とは密接な関係があると思われる。第1. 2. 表を見れば大体10、11月頃から相関係数が高位で恒常となつているこの頃にこの学級では心理的集団が出来上つていると思われる。第3表によつて9月末の友人関係発展段階を見ると b. c_1. c_2. 段階のものが約70%を占めており上記の結論を裏附けしている様である。なお友人調査表記入の反省を無記名で求めた結果によれば真実を記録したと報告したものが80%適当に記入したとするもの20%となつている。質問票の各友人段階の框を不適としたものが約30%あつた。

7. 学力予測に関する研究（第2報告）

名古屋大学教育学部 白石一誠・太田雅雄 ○中嶽治麿・山本輝夫

第1報告では、中学生の3ヶ年間における学業成績、生活環境などの相互関連を考察して、予測の巨視的な立場からの概観を行つたが、今回は第1報告における知識と、中学校1、2年における学業成績、各種テスト結果に関する因子分析の結果とに基いて、学業成績の構造を予測の立場から明確にしようとした。

即ち、学業成績を左右する要因を

① 家庭における生活態度の一側面

② 心理学測定結果

の中から求め、これを基にして、学業成績の上位、下位群、上昇、下降群を弁別する方程式を設定し、この方程式体系によつて学業成績の構造を究明しようとするものである。

1. 家庭における生活態度の一側面からみた学業成績

愛知県立小牧高等学校全日制普通課程第1学年の生徒（52名）が反省の資料として記録している本年5月以後の帰校後の生活時間の状況と、彼等を取巻く家庭の学習環境、学習の計画性などの諸資料によつて、

① 学期末考査の総得点による上位、下位群

② 入学直後の実力考査に比較して、期末考査の成績が向上（低下）した上昇（下降）群

を弁別するために有効と考えられる要因を抽出し、これらの要因が上位、中位、下位群、上昇、恒常、下降群の弁別に相互に如何に関係し合つているかを考察する弁別方程式を作つた。

前者では

（上—中位群の弁別）$X_1 = .08(L) + .39(Lp) + .80(H) - .38(P) + .21(I) + .57(A)$

（中—下位群の弁別）$Y_1 = .14(L) - .39(Lp) - .22(H) + .13(P) + 1.05(I) - .05(A)$

（上—下位群の弁別）$Z_1 = .23(L) - .00(Lp) + .58(H) - .25(p) + 1.26(I) + .52(A)$

後者では

（上昇—恒常群の弁別）$X_2 = -.11(Lp) - .05(Lt) - .24(Ps) + .57(E)$

（恒常—下降群の弁別）$Y_2 = .47(Lp) + .70(Lt) + .73(Ps) + .15(E)$

（上昇—下降群の弁別）$Z_2 = .36(Lp) + .64(Lt) + .49(Ps) + .72(E)$

となる。

L……教科学習に使用する時間
Lp……学習計画の有無
H……進学希望
P……進学に対する両親の態度
I……中間考査
A……実力考査
Lt……生活時間の配分
Ps……両親の学歴
E……学習計画の実行

2. 心理学的測定結果からみた学業成績

名古屋大学附属中学校生徒（昭和28年入学）47名に実施した各種測定の結果に対する因子分析結果から、学業成績と共通な因子を多分に持つとみられる田中B式知能検査、同下位検査の数系列完成、ウエクスラー知能診断テストの下位検査の言語テストの結果からこの生徒の教科総評、数学、国語の成績を予測する弁別方程式を上述と同様な立場から作成した。内容は紙面の関係上省略する。

3. 学業成績の構造

以上のようにして抽出した要因とそれに基く方程式体系、方程式体系から演繹される各群の定義域の状態、更にこれらに関する不等式体系等は、上位、中位、下位群等の相対的な定義に関連して学業成績の構造の一側面を表わしているとみることが出来る。しかし、これらの根底にある種々の仮定に関しては十分に考慮する必要があるものと考えられる。これらは今後に残された問題である。

8. 賞罰に関する一考察—特に診断性向性検査別集団において—

日本大学 ○駒崎勉 古牧節子

賞罰が学習の動機づけとして有効であることは、古来多くの研究によつて証明されて来た。しかし賞罰は一次元的な関係にあるもの（例えば正と負）ではなく、その力動的なメカニズムは個体の変容によつて一層コンプレックスなものになることは論をまたない。本研究もこの立場から、個体の変容と賞罰との関係について考察することを目的としている。

〔実験手続〕 被験者 小学校の5、6年生に田研式診断性向性検査を実施し、劣等感、社会性、神経質の3因子に関して、それぞれの内向性、外向性を10名づつ抽出し、それに正常者10名を加えて70名とし、各因子別向性別に7つのグループを構成した。次にこの7つのグループをそれぞれ無作為に2等分し、1方を賞グループ、他方を罰グループとした。これによつて5名よりなる14のグループが構成されたことになる。実験材料としては、加算カード（1桁4項からなる加算の計算問題30ヶが印刷されたもの）を用いた。方法 1室に被験者をグループごとに坐らせ、グループ単位に作業量を競わせるという方法を採つた。実験は2日に亙つて行われ、第1日目は、全く刺激を与えず、試行

12分、休憩10分を3回繰返した。2日目は、第1試行直前に各グループの実際の成績とは関係なく、賞グループには態度、作業量、質などに関する賞讃を、罰グループには叱責を与え、前日と同様な方法で第1試行を行わせた。その後直ちに被験者自身にグループ別に作業量を比較させた（この場合、賞罰の間に明らかなハンデイキャップがつくよう、予め実験者の方で作業量をコントロールしておいた。）その後直ちに第2試行を繰返し、口頭による賞讃と叱責を与えた。結果　1）各集団の各試行の作業員は1日目の第1試行を100として、それに対する百分比で表わした。

2）神経質内向性集団における、賞罰グループ間の作業量は、2％の危険率で有意の差が認められた。これは、同質集団においては賞により40％の作業増加を見せるが、罰では全く向上しなかつた。

3）劣等感内向性集団では、神経質集団ほど明らかな差は認められないが、賞では30％増加し、罰では15％の増加がみられた。

4）一般に内向性集団は罰よりも賞の刺激によつて作業量が増加する。一方外向性集団においては、どの因子に関しても賞罰両群の間に全く有意な差が認められないばかりでなく統計的には有意な差はないが、罰の方が賞よりややまさつているという傾向が見られた。

5）前回の応用心理学会で発表した「賞罰と学習に関する一考察」では、個人的に与えられた賞罰について考察したが、その実験と今回の実験とを比較する時次のような傾向が認められる。集団的に与えられた賞罰効果は、個人的に与えられた場合よりも効果が少い、しかし集団に対する賞罰効果は、いずれも無刺激の場合よりも、遙に成績が上るということは明確な事実であつて、これは集団に関する限り、賞罰の何れも動機づけとして極めて有効なものであることを示している。

9. ホスピタリズムの研究

日本女子大学 {児玉　省・○北里美智子
石井雅子・高橋昱子

東京近在の2つの公立養護施設ABのうちAが3才―6才児48名、Bが10才―15才の子供68名を対象として行つた研究で、主として心理的ホスピタリズムを取上げた。調査方法は幼児ではタイムスタデイ及び日本保育学会の発達調査票、我々の手で作つた単語及び理解テストを用いたほか、研究者5名が施設内に4泊5日して観察し、かつ施設の保姆5、6名の1ケ月に亘る観察を用いた。施設Bでは大西誠一郎氏の理解検査、久保良英博士の語彙連想検査、早大版TAT、精研式SCT等を使用した。

幼児は4才頃はその運動機能が普通児に劣つているが6才児ではむしろ普通児よりすぐれている。それ位いこの養護施設はよく運営せられているが、社会性や感情の発達については、施設児は対子供との関係では泣いたり、怒つたりすることが多く適応が普通児より劣つているが、「大人にしかられぬよう気を配る」は施設児、普通児に差がない。その他大人との関係では施設児はむしろしばしば普通児よりも進んでいるような印象さえ与える。しかるに子供同志の関係で、「わがまゝである」は施設児が多い。要するに、施設児には子供同志の関係に問題がある。その他の項目について、「非常にする」「時々する」「一つもしない」の項目について施設児はそのどれかに集中して100％になつて、しばしばそれ以外が皆無である。普通児にはいつもそのどの項目にも当てはまる子供がいるのと著しい対照である。これは施設児がいつも集団生活をしているために、行動の水平化が起つているのではないかと思う。「他の子供を誘つて遊戯を始める」も施設児がはるかに少ないが、集団生活をしながら、こういう点が少ないのは、集団生活の圧力が小さいグループ―誰れかが誘つて小さいグループで遊戯を始めるような―の成立を抹殺するように作用しているのではないかと思う。多ぜいで生活しながら1人1人としての親しい生活が、成立し難くなつているのではなかろうか。「ひとの上に立とうとする」「ほかの子供に母のような愛情を示す」「ほかの子供をほめて話す」なども殆んどいない。「競争心がある」「嫉妬心がある」は施設児が多い。

学童期及び中学期の施設児については、連想検査の結果は割愛してSCTの反応結果から次の点が推測せられる。

施設児	普通児
1. 自由に表現できない。	1. 自由に心持ちを表現できる。
2. 施設的訓練を受けているせいか我がまゝが少い。	2. のびのびと抑制されたところなく育つている。
3. 馴らされているせいか我まゝが少い。	3. 自然的な我がままを表している。
4. 非現実性が少ない。	4. ロマンチックで童話的世界に住んでいることが多い。
5. 家族に対する郷愁を示す。	5. 郷愁などみじんもない。
6. 空想性少ない。	6. 空想をたくましくしている。
7. 余り多くの人に接していない。	7. 大人に広く接している。
8. 小さい実際的な職業を希望。	8. 将来大規模の仕事をすることを希望している。
9. 面会人をうらやむ。	9. 勉強のできる人、金持をうらやむ。
10. 親に離れているせいか、全面的に親を肯定する。	10. 不平に親の偏愛を批難する。

ＴＡＴの結果は、(1)身体的健康に関心。(2)想像性と欲求。(3)社会的態度と感情に分けて考察したが、(1)については施設児の関心が高い（これは虚弱児であることから当然であろう）(2)については施設児が共に乏しく、普通児は想像性たくましく欲求が多い。これも施設児が著るしく限定された環境に住んでいるためではないかと思う。(3)については、施設児に希望的反応が多いのに対し、普通児には不定と恐怖的な反応が多い。これは施設の管理のよさを反映すると共に、普通児が、自然環境を自然に反映しているものであると思う。

10. 児童の社会観

日本女子大学 {児玉 省・川島 千恵子
○石川 百合子

我々は社会観の意味を広く解釈して、第１に児童が日常生活環境に対してどの程度の社会的関心を持つているか。第２に、適応の問題に関連してどういう社会意識を持つているか。第３に、現在の日本における各種の問題及び子供の生活に於ける問題に関連して、社会意識を含めて如何なる社会観を持つているか、という３つの角度からこの問題を考究しようとした。(1)の角度を検討するために、久保良英博士の語彙連想検査を施行し、その反応語を個人関係に関するもの、文化的所産関係、自然関係の３つの角度から分析を試み、児童の反応がいかなる方向に傾くかを見ようとした。(2)のためには、精研式ＳＣＴ検査と早大版ＴＡＴ図版５枚を使用した。(3)のためには我々が作製した日本の政治、日本の社会、交通道徳、公衆道徳、軍備、日本人のふしだらさ、だらしなさ、お祭り、不良、競馬競輪、よつぱらい、友人達、学級委員、原水爆等15の項目について、５段階から成る品等法を使用した。対象とした児童は東京都世谷区の１小学校の４、５、６年生男女140名である。

結果について述べると、連想検査の反応からは、人間関係の反応が各学年を通じ50%、文化的所産が26%、自然関係15%その他となつている。性別的には人間の意志欲求に関する反応は、男子の方が多く、家庭に関するものは女子が多い。第三者に対する意志欲求も勿論男子が多いが、発達的には、年令が増加するにつれ、第三者に対する欲求が減少し、自分に対する欲求が増大している。自主独立的態度の増加であるかも知れない。

ＳＣＴの検査では、例えば「私は……」の刺げき語に対して、可愛がられたその他楽しい家族を示す反応が多く、引きつゞき叱られた、行儀が悪いなどになつている。施設児の反応と比較して対照的である。「弟……」というのに対しても、非好意的が一番多く、その半分位が好意的な反応である。これも自然に自由に放置されている子供の自然の姿であろう。家と言えば楽しい所、母と言えば大好きと、同時に叱られるが多く、人に対しては好意的であると同時に、他方に於ては可なり批判的である。

ＴＡＴの結果は省略するが、我々が制作した社会態度品等法の結果についてみると、子供たちは大人の世界及びしていることに対して、手きびしく批判的である。ただし４年生と６年生の反応を比較すると、６年生の方は、依然大人の世界や日本の政治などに対して批判的ではあるが、品等段階が移動して、漸次理想主義的傾向が減少して、現実的になりつつあることがうかがわれた。ただしこのことは項目によつて、かなり反応差が認められた。日本人はだらしがないというのが４年生では90%であるのに、６年生では、だらしがないというのと、そんなことはないというのが半々になつている。その他この種の傾向が強く見られた。

11. 自叙伝による研究（基督教主義大学々生の宗教）

国際基督教大学　岡部　彌太郎

すべての人間の生涯が最もよく書かれ得るのは彼自身によつてである。生徒や学生を理解するためには彼等の自叙伝を用いることが役に立つ。私は最近数年大学において教育心理学を講義する始めに聴講者各自に自叙伝を書かせ、学年の終りにおいてこれに教育心理学的な解釈をさせることにしている。その自叙伝については妥当性や信頼性の問題がある。どうしたならば妥当にして信頼出来る自叙伝を書かせることが出来るかを研究しなければならない。私は真実感に満ちたよい自叙伝を読むことが、年々自叙伝の質を向上させるのに役立つことを見出した。自叙伝は個人の理解に直接役立つが、又それを資料として多くのことを研究するのにも役立てることが出来る。ここに報告するものは自叙伝を資料として、キリスト教主義４大学の学生の信仰を探つて見たものである。

４大学はＡＢＣＤと名づける。Ｃの資料は昭和30年度のものであるが、ＡＢＤの３つのものは昭和29年度のものである。宗教に関してまず統計的に見る。Ａ大学はカトリック男子大学で、資料は男子66名、その中12名がカトリック信者で18%であり、Ｂ大学はカトリック女子大学で資料は女子28名、その中９名がカトリック信者で32%、Ｃ大学はプロテスタントの男女共学の大学で男子10名、女子19名の資料で合して29名中10名がキリスト教徒で34%、Ｄはプロテスタントの女子短大で、資料は40名、その中26名がキリスト教徒で65%となつている。全体を合して資料は163名分でありその中キリスト教徒数は合計57名であつて35%に当る。これは国立大学の場合に比して非常に多いキリスト教徒の割合である。以上の他にもキリスト教を信じているというもの、求めているものの数が多くある。

各大学について見ると、それぞれに特色がある。が全体として見て大きな問題は何か。国立大学の学生にとつては日本の社会の見透し、あいは社会思想が目立つた問題であるが、キリスト教大学の学生によつても今や宗教は個人の救済だけの問題でなく、社会をどう善くしていくかということが大きな問題となつていることが看取出来る。

個人的な宗教意識と共に社会の問題と宗教とを関係させている1例の後半部要旨、「私は自分の住む工場街の場所柄もあつて社会悪についての認識をわりあい早くからもつていた。……社会問題にも強く関心を引かれた。私は世の中の不平等がキリストの教に反すると考え、社会主義的な考えに向つた。そしてキリスト教社会主義という言葉を社会科の教科書で見つけてひどく気に入つたことがある。私は友達と信仰のことや、社会問題についてよく議論をした。しかし社会と信仰者の態度との問題は未来えの課題として解決はいつも前方に置かれている。」(参考、国際基督教大学刊教育研究2．昭和30年11月)

7. 検　　査

1. 性格自己診断の分析

京都大学　正木　正
天王寺中学　○河原政則

性格についての質問紙調査は、被験者の自己診断を媒介として応答を求めるものであるが、この性格自己診断は被験者のパーソナリテイを基盤として動くから、調査内容である心理的事実そのものの徴標ではなく、質問項目に対する被験者の応答形式に規制された反応として捉えられねばならない。

我々は先に諾否法 Method of dichotomous question における無応答について分析を試みて、無応答は単に Yes と no との中間に位置する応答であるとのみ解釈することは出来ないと考えた。これは調査結果の数的処理をかなり複雑にする上、無応答が多く表れる質問は方法的に価値が低いともいえるので、諾否法の難点と考えている。

しかし、摘出法 Checking method は無応答を表さず、肯定的応答のみを得るので、諾否法の難点を補うものと考えられるが、果して Checking method は諾否法に替りうるものであろうか。被験者が自己判断を Checking に表現する過程に対して一つの考察を試みた。

向性調査と神経質的傾向の調査の二種類をそれぞれ摘出法と諾否法の二形式で構成し、同じ中学生に、2日間の間隔をおいて実施して、両法の結果を比較した。

向性調査では、摘出法によると、外向、内向項目群とも Checking 数が上学年ほど増加するが、諾否法によると、両群とも肯定答（肯定答がそれぞれの向性特徴を示すものとしてある）は増減しない。

神経質的傾向の調査では、摘出法によると Checking 数が上学年ほど増加する傾向がみられるのに対し諾否法では2～3学年間のみ増加傾向が認められる。

これらの事実にもとづいて次の様な仮説を考えた。

(1) 発達的にみて上学年ほど Checking 数が増加するのは、諾否法の肯定が必ずしも増加してない事から諾否法に比して不安定な応答が混入していると考えられる。

(2) 自己の性格についての自覚が深まり、体験が豊かである上学年ほど、摘出法が肯定し易くなる。

(3) 摘出法で Check しないことと、諾否法で、No 或いは無応答とする事の間、又 Check する事と、Yes～No の選択肢によつて Yes をえらぶ事との間には形式的には同質であるが、自己診断の心理過程から考察すると、それぞれ異つた意味合いがあると想像されるので、今後肯定と否定の意味合いの考察をすすめ、Inventory 研究の方法論をすすめたいと思つている。

2. 教研式学年別知能検査の妥当性、信頼性に関する一考察

応用教育研究所{平沼　良　○堀　辰巳
榊原　清

(1) 教研式学年別知能検査の構成と諸検定

教研式学年別知能検査は東京教育大学内日本図書文化協会発行のものであるが、これは18個のサブテスト（A式B式併用、難易の差のみで同種のものも含まれる）を2個ずつ、ずらして小学校各学年別に構成作成し標準化したものである（中学用もこれに準ず）その標準化に際しての諸検定は構成表と共に手引書に記載されているので、ここでは省略する。

(2) 各学年別 I.Q の平均値と標準偏差

以下述べる調査は、この知能検査の妥当性、信頼性を考察する上に必要と考えて手引書に掲載せる諸検定以外に、最近実験せる資料についての調査である。

各学年におけるＩ．Ｑの平均と標準偏差の状況についての調査の結果は、第一表の通りである。標準化の際のＩ．Ｑの平均は勿論100であつて、ＳＤは16内外であつた。

第１表　　Ｉ．Ｑの平均とＳＤ

	１年	２年	３年	４年	５年	６年
標準化の測定人員	1628	2860	2443	2371	2308	2337
本調査測定人員	237	218	193	195	225	205
Ｉ．Ｑの平均	104.0	103.2	101.2	101.8	102.1	101.2
Ｉ．ＱのＳＤ	15.6	16.0	16.4	16.3	16.2	16.3
Ｍ＋3.5σ	158.6	159.2	158.6	158.9	158.8	158.3

いずれも１％の危険率にて前学年との有意の差は認められず。

表中Ｍ＋3.5σを計上せるは、全体を７σとみなしてその半を示しそれが同１数値ならば、大体各学年とも同じスケールと推定されるからである。

(3)　累年継続実施成績

或る学年に実施し次の学年の時その学年用のテストを実施した場合、如何なる変動があるかを見たのが第２表である。言うまでもなくＩ．Ｑの恒常性は絶対的のものではないのであるから、この調査の結果も全然同一ということは有り得ない。

第２表　（その１）

２カ年継続実施成績の相関（同一被験者）

	小学					中学	
	２年	３年	４年	５年	６年	２年	３年
測定人員	162	75	41	115	112	165	166
前学年との相関	0.772	0.811	0.827	0.774	0.808	0.763	0.831
参考 狩野氏	0.843	0.848	0.915	0.920	0.915	0.860	0.897
参考 石川氏	γ＝0.85						

（間隔１カ年乃至１年４カ月）

（その２）

２カ年後の相関（同一被験者）

	小学			
	１年と３年	２年と４年	３年と５年	４年と６年
測定人員	140	115	154	148
γ	0.711	0.720	0.725	0.776
参考 狩野氏	0.732	0.880	0.875	0.838
参考 石川氏	γ＝0.78			

（間隔１年10カ月乃至２年４カ月）

(4)　再実験成績

同一学年に１カ年以内に、同一学年用のものを用いて実施した成績が、第３表である。

第３表　　再実験成績

	３年	５年	中２年
測定人員	126	140	120
γ	0.844	0.871	0.894

間隔８カ月乃至10カ月

(5)　田中Ｂ式テストとの関係

両テストの実施間隔は１カ年乃至１年２カ月で、その相関係数は次のようになつた。

（ｉ）　２学年（田中Ｂ式）と３学年（教研式）

n＝115　　γ＝0.646

（ii）　３学年（田中Ｂ式）と４学年（教研式）

n＝97　　γ＝0.648

（iii）　５学年（田中Ｂ式）と６学年（教研式）

n＝105　　γ＝0.771

３．　欲求的適応性検査の妥当性について（第２報）

日本大学　○長谷川　貢
精工舎　浅野行雄

本検査は次のような諸点から、理論上従来のものより一層妥当性があるのであろうと考えられる。

(1)　被験者の単なる認識、情緒または行動を問題とせず、欲求する所を表明させる点。

(2) 被験者自身の人格価値にかかわると感じられることのないように、他人に対する欲求として問うことにしてある点。

(3) 適応と不適応とを別の問題において問う点。

(4) 各問題にもつともらしい理由を附けることによつて、どれに反応しても被験者自身に対する人格価値の評価には優劣がないような外観を与えてある点。

(5) 問題場面を設定して題意を一義化し、多肢選択法によつて応答させる点。

(6) 反応態度の良否を検出する問題を用意した点。

実験に徴して妥当性を検討した結果は次のとおりである。

検討資料 (a) 東京都内中学生247名について本検査を実施したもの。(b) 検査の被験者に対するホームルーム教師の適応性評定の結果。

検討結果

(1) a資料について情緒、社会、家庭、健康の4分野に別けて見ると、どの分野においても適応性得点の分配が従来のものより一層正規分布に近い形をあらわす。

(2) a資料について4分野の相互相関を見ると、係数の値はどれも小さい。

(3) a資料の情緒問題について不適応型を区別して見ると、攻撃、合理化、退行の3型は相互に親和性が大きい。この3型は従来主張されているほど異質的なものでないことを示すもののように考えられる。

(4) a,b 両資料によつて検査結果と教師評定結果との一致度（妥当性係数）を見ると、連合係数が+.6ないし+.7以上となる。また不適応型についてa,b両資料の一致は男75%、女83.5%である。

これらの諸点から、本検査は実用に供して相当の効果を挙げ得るものと考えられる。

4. TATにあらわれた Emotional Tone

香川大学　高橋茂雄

Rotter の方法にならつて、TATの emotional tone を物語の結末を除いた過程の部分即ち Plot と物語の結末 Ending とに分つて、同一規準で幸福、不幸、不定の三分類によつて整理してみた。

被験者は非行少年50名（男25名，女子25名）と対照群50名（大学生男子25名，同女子25名）で計100名であつた。その結果は次のようであつた。

(1) ハーバード版TAT10枚（前半）を用いて検査した結果を図版毎に Plot と Ending に分ち、夫々を Happy, Unhappy, Neutral に細分して、各該当物語の頻数を調べ更に%に換算するとき、図版によつて明〜中〜暗の比率は様々であるが、一般的にあらわれた現象は、Plot から Ending に移行する時に、Happy 反応は増加し、Unhappy 反応は減少し、Neutral 反応は増加していることであつた。即ち結末はより明るい情調で以て物語を結ばうとしている。

(2) 次にグループ別に即ちS(M)大学生男子、S(F)大学生女子、D(M)非行少年、D(G)非行少女の四群に分つて、Plot から Ending へ至る emotional tone の変化を調べた。その変化は幸福→不幸(○—×)，幸福→不定（○—△)，幸福→幸福(○—○)という風に九つの組合せを作つて、夫々の頻数を比較表示した。そこでこの統計表を更に簡易化して、Similarity (○—○, ×—×, △—△)，Gradual change (○—△, ×—△, △—○, △—×)，Sudden change (○—×, ×—○) に三分類してグループ毎に比較する時に、非行少年、少女は大学生男女に比べて Sudden Change が著しく目立ち、Gradual change は大学生の方が著しく、Similarity は両群略々同数であつた。X^2 検定すると、(S(M)とD(M), S(F)とD(F), S(M+F)とD(M+F))の間に夫々1%の基準で有意の差が見られた。

(3) 物語のEmotional tone が Plot から Ending に行くに従つて、より明るい方向に転ずることについては、すでに言及した所であるが、各グループ毎にみるに、明るい方向へ転ずる場合が暗い方向へ転ずる場合の約2倍〜3倍であつた。そこで Emotional change の Intensity を明確にするため、(○—×) を−1,(×—○)を+1，(○—△)を−0.5,(△—○)を+0.5として計算してみる時に両群の間にどの様な相違が見られたであろうか。例えばS(M)にあつては+66.5と−15.5であり、D(M)にあつては+69と−24であつた。D(M)とD(F)との間にあつても大体同様で、即ち非行少年は学生に比べて、物語りの結末において、より明るい方向へも、より暗い方向へも振動していることである。非行少年は対照群に比べて情調により大きな振幅を見せたのは、Sudden Change の著しいことからしても当然である。

5. ソシオメトリツク・テストにおける選択基準と選択形式について

名古屋大学　塩田芳久

目的： この研究はソシオメトリツク・テストのもつとも基本的な問題である選択基準と選択形式に関して、次の3点を明らかにしようとする。

(1) 各種選択基準の関係

(2) 再生形式と再認形式による選択の比較

(3) リテステイングの方法による安定度（信頼度）の検討

手続き：

(1) 選択基準――一般的基準として ①いま現に仲良しの友だち ②仲良しになりたいと思う友だち ⑨好きな友だち、具体的基準として ③こんど組みかえをしてもいつしよになりたい友だち ④席をならべたい友だち ⑤いつしよに遊びたい友だち ⑥いつしよに勉強したい友だち ⑦お掃除や作業のときいつしよの組（班）になりたい友だち ⑧日曜日などにいつしよに遊びに行きたい友だちの９種。

(2) 選択人数――とくに制限をもうけないで自由に何人でも選択させる。たゞし、選択後１番から３番まで順位をつけさせる。

(3) 被験者――小学校４年、６年及び中学校２年の各１学級

(4) 実施――１回目再生形式による選択、２回目再認形式、３回目再生形式、４回目再認形式とし、各回の間隔は約１週間とする。

結　果：

(1) 各種基準間の相関はかなり高く、その値はすべて60以上で、僅かに８年の基準⑨と⑦の間が、47を示しているだけである。

(2) 一般的基準⑨と具体的基準③から⑧まで、また具体的基準間、一般基準間（「現に仲良しの友だち」と「好きな友だち」間）の相関には各学年間に著しい差異は認められない。

(3) 選択総数は、再生形式よりも再認形式の場合が、また１回目よりも２回目の場合がいつそう多い。

(4) 選択数を制限しない場合には、選択数は増加するが、その増加は、制限選択（３位まで）における被選択数の多いものにおいていつそう著しい傾向がある。この傾向は、一般基準、具体的基準、再生形式、再認形式のいずれの場合にも共通に認められる。

(5) 安定度（信頼度）は、一般的基準、具体的基準のいずれについても、また再生形式、再認のいずれの場合においてもかなり高い。（76から98の間にある）

強いていえば、一般的基準よりも具体的基準を総合した場合の方が、また、再生形式よりも再認形式の場合の方が、その被選択数の安定度はやゝ高い傾向があるといえる。

(6) 選択順位による weighting をした場合の方が、しない場合よりもその安定度はやゝ高くなる傾向がある。

(7) このような傾向は各学年を通じて認められる。

6. 玉岡式音楽鑑識力テストの実施Ⅱ

共立女子大学　玉　岡　　忍

これは前回（第19回）の応用心理学会で発表したものの続きである。その後、小学校２校（長野県本郷村小、千葉県松戸市馬橋小）中学３校（埼玉県川口市幸並中、同青木中、松戸市第６中）高等学校２校（松戸市高校、共立女子高校(未整理)）等において実施したので、その結果を発表し、併せて前回のものとの関連と比較とについて考察する。

結　果

1. 学年別の得点は殆んど規則正しく上昇し、以前に行つた大学生の結果に先立つものとして、中高校の結果が入る。これによつて、このテストが、小学校から大学までの音楽鑑識力の発達を見るものとして妥当であることがほゞ決定した。

2. リズムの結果が最もよく、次がメロデイーでハーモニーはかなりよくない。この結果は前回も同様であつた。

3. 各学年毎の平均偏差に余り差がないので、テストの信頼度が高いことが、これによつても判る。

4. 男女差を見ると、前回と同じように、わずかの例外的な学年を除いて、他はすべて女子がよい。その原因を一義的に決定することは出来ないけれど、女子の機能と、環境と教育と積極性（または興味）などに、男子よりも音楽的なフアクターが多いことによるものと思われる。（これは外国における結果でも同じ）

5. 学校差を見ると、小学校では、本郷小が馬橋小よりもよく、中学では、川口中が松戸中よりもよい。小、中ともに、教育や環境の差がこの結果をもたらしたことと思うが、特に前者（小）は環境の差、後者は教育の差の方が勝つているように思われる。幸並中の２年が青木中の３年よりもよいのも教育の差によるものが大であると思われる。高校の比較はまだ出来ないので次回にゆずる。

6. 曲を知つている者と知らないものとで正答率がちがうだろうとの疑問に対しては、私は大して意にしない。これを分けて整理した結果から見て、知つているもの必ずしも正答者であるとはいえないことが判つた。

7. 質問紙調査法の信頼性について（第1報）
—PGRを媒介として—

香川大学 {○佃 範夫
水口 芳明

身体・交友（異性関係を含む）興味・行動・遊び・徳性・所有物・社会・経済・身上・家庭環境等の問題を項目とする31個の問題を Yes No Test の形式で作成し、それを大学生男女各50名に次の4段階で実験を試みた。

第一段階　質問紙に解答させる。（この場合1人1人別々に調査をする場合と集団で調査を実施する場合と行う。）

第二段階　P・G・Rによる所持物検査の実演（P・G・Rに対する認識を深めると共に危機場面の構成に役立てようとした。）

第三段階　P・G・Rをかけて質問紙調査の実施。

第四段階　質問問題の夫々について追求調査をしてその真相を確める所謂真相調査。

P・G・Rによる危機場面の構成によつて解答がどの様に変化するかをみるに、第一段階の解答と第三段階の解答とが異なるものが相当数出た。この解答の変化を整理してみると、第一段階の調査が個人の場合と集団の場合とで多少異つてはいるが、一般的傾向として第一段階の時は嘘をいつていてもP・G・Rという危機場面の構成によつて（第三段階において）ある程度真実の解答が求められた様に思われる。而して第一段階の調査が集団である場合の方が個人である場合に比し解答の変化は起り易い様である。それは個人の場合はその調査が interwiew に近いものであり、次の危機場面の構成の効果が集団の場合に比し比較的少いのに対し、集団の場合はP・G・Rという危機場面の構成の効果が個人の場合に比しはるかに大きかつたということがうかがわれる。

以上危機場面の構成によつて質問紙調査法の信頼性を或る程度高めることが出来ることをみたのであるが、その様な危機場面を構成しても尙且つ嘘をいう場合がある。即ちP・G・R位の危機場面の構成では真実を語らない問題があるということである。そこでP・G・Rという危機場面の構成によつてどの種の問題に対して真実を語る様になるか、又嘘を繰り返す問題はどの機な問題であるかを整理してみると次の様である。

嘘から本当に解答が変化する問題は、あなたは学資を全部家から貰つていますか。あなたはボーイフレンドがありますか。あなたはカンニングをしたことがありますか等の問題で少しつゝこんで調べられればその真実が解ると認めた問題で、嘘から嘘をいゝはる問題は、あなたの家の収入はどの程度ですか、あなたは進んで勉強しますか等で出来るだけ人に知らせたくなくしかも少し位調査しても解らないと判定した問題に対しては嘘をおしとおそうとする傾向がみられる。従つてこの種の問題に対してはP・G・R等による危機場面の構成にては救い難き問題としてもつと根本的な究明が必要とされる。これに対し私達は個々人の性格との関係において解決の糸口が見出されるのではないかと考え次の実験計画を試みている。

8. 沖縄における教師の情緒性検査について

東京学芸大学　堀内 敏夫

本調査は昭和30年8月、沖縄本島の那覇、名護および知念地区における小学校教師223名、中学校教師140名、計363名について、牛島義友氏作成の情緒性検査を実施した結果である。

情緒性安定度は＋2，＋1，0，－1，－2，－3の六段階に分たれるが、小学校教師では各段階の%を＋2より漸次下段へと示すと、7%，22%，48%，19%，4%，0%，中学校教師では、9%，34%，42%，14%，2%，0%となり、いづれも－3の段階は0%で、小学校教師はやや不安定に傾き、中学校教師はやや安定に傾いている。

次に性別によつてみると、男教師（小学校 8%，25%，47%，17%，3%，0%，中学校 13%，33%，42%，10%，2%，0%）が女教師（小学校7%，21%，42%，21%，4%，0%，中学校2%，34%，43%，20%，2%，0%）よりも、やや安定していることが明らかとされる。

また、年令的にみると、20才代、30才代、40才代と年令が増加するにしたがつて、安定している。ただし、中学校女教師40才代（0%，41%，29%，24%，6%，0%）のみが30才代よりもやや不安定な傾向を示しているところに、問題点が存することが推察される。

次に25問題中、全体として不安定度の著しい問題内容を順にあげると、1．二二番「自分より偉い人の前では気おくれがしますか」（363人のうち66%）、2．二五番「時のはずみで物事をいい切つて後で悔みますか」（61%）、3．十五番「朝起きた時にはいつも十分休息したように感じますか」（54%）、4．四番「あなたは後悔することが多いですか」（53%）、5．十八番「初めての場所へいつもたやすく行き着くことができますか」（49%）、6．十七番「決心がつかないで時期を失してしまうことが多いですか」（48%）、7．八番「時々気落ちがしますか」（47%）、8．二四番「気のすすまぬさそいをうけた時、ことわりきれないで困りますか」（45%）、9．二三番「あなたは人から面倒な相談をもちかけられるのはいやですか」（45%）となつている。

以上、第1位より第4位までは、小学校、中学校教師男女ともに不安定回答が50%以上もあるが、十八番は小学校

男女教師および中学校女教師に、十七番及び八番は小中学校女教師に、二四番は小学校男教師および中学校女教師に二三番は中学校男教師に不安定回答が多い。

これらの問題のほかに、九番「先生（校長）の間に進んで答えるのに気おくれがしますか」は小学校女教師に、十九番「何でもないと知つていながら物事が心配でならぬことがありますか」は、小学校および中学校の女教師に、二番「人の前で話すのが困難ですか」は、小学校男女教師に不安定回答が多く、いずれも50%以上を示している。

以上によつて、教師の情緒的不安定性の具体的内容が明らかにされたと思うが、ここから個々の教師の管理的立場にある校長や指導主事の指導対策、または教師みずからの自己指導の方策が導き出されれば幸いである。

9. 平均寄与率の構造について

名古屋大学　白　石　一　誠

要　約

m個の下位検査よりなるテストの合計点（又は平均点）に対して、個々の下位検査の成績が寄与する割合（それを相関係数をもつて示すものとする）を下位検査の寄与率と称することとして、そのm個の寄与率の平均を平均寄与率と呼ぶこととする。平均寄与率と各下位検査間の内部相関との関係については既に幾人かの学者によつて示されている。* これについて少し異なる算式の立場より導出したことと、更にこれより拡張された内部一致性を示す信頼性係数の公式の構造を考えて見たので報告することとする。

(1)　下位検査の成績が標準化されている場合

m個の下位検査が各々標準化されていて、その平均が0、分散が1であるとき、テストの平均点（合計点をmで割つたもの）と第i番目の下位検査との相関係数を γ_i で表わす。

平均寄与率：　$\overline{\gamma} = \frac{1}{m}\sum_{i=1}^{m}\gamma_i$

第i番目と第j番目の下位検査間の相関係数を γ_{ij} で表わす。

又テストの平均点の分散を σ_c^2 で表わすと、簡単な計算より次式が得られる。

$$\sigma_c = \sqrt{\widetilde{\gamma_{ij}}}$$

但し　$\widetilde{\gamma_{ij}} = \dfrac{m+2\sum_{i=1}^{m}\sum_{i<j}\gamma_{ij}}{m^2}$

又　$\overline{\gamma} = \dfrac{\widetilde{\gamma_{ij}}}{\sigma_c} = \sqrt{\widetilde{\gamma_{ij}}} = \sigma_c$

となる。

γ_{ij} の普通の平均を $\overline{\gamma_{ij}}$ とすると

$$\overline{\gamma_{ij}} = \frac{2\sum_{i=1}^{m}\sum_{i<j}\gamma_{ij}}{m(m-1)}$$

となつているから

$$\widetilde{\gamma_{ij}} - \overline{\gamma_{ij}} = \frac{1}{m}\left(1-\overline{\gamma_{ij}}\right) \geqq 0$$

又は　$\widetilde{\gamma_{ij}} = \overline{\gamma_{ij}} + \dfrac{1-\overline{\gamma_{ij}}}{m}$　なる関係が成立つ。

(2)　下位検査が標準化されていない場合

各下位検査の分散を σ_i^2 で示し、(1)と同様の記号を用いると、次式が保たれる。

$$\sigma_c^2 = \frac{1}{m^2}\sum_{i=1}^{m}\sigma_i^2\sum_{j=1}^{m}\gamma_{ij} = \widetilde{\sigma_i^2\,\gamma_{ij}}$$

$$\overline{\gamma} = \frac{1}{\sigma_c}\,\frac{\sum_{i=1}^{m}\sigma_i\sum_{j=1}^{m}\gamma_{ij}}{m^2} = \frac{\widetilde{\sigma_i\,\gamma_{ij}}}{\sigma_c}$$

従つて　$\overline{\gamma} = \dfrac{\widetilde{\sigma_i\,\gamma_{ij}}}{\sqrt{\widetilde{\sigma_i^2\,\gamma_{ij}}}}$

となつている。σ_i が皆等しいときは(1)の場合となる。

(3)　N個の items からなるテストをm個の群に分割する場合の信頼性係数

---

* 例えば Guilford : Psychometric methods.　Gulliksen : Theory of mental tests.　を参照

N個の items 中、正当率の等しいものだけを各一つの群にまとめて、m個の群に分けて、第 i 群の成績（合計点）を X_i 全合計点を X で示すと

$$X=\sum_{i=1}^{m} X_i$$

分散 ： $V(X)=\sum_{i=1}^{m} V(X_i)+2\sum_{i=1}^{m}\sum_{i<j}\gamma_{ij}\,\sigma_i\,\sigma_j$

従つて Cronbach の意味でのα係数は次式で示される。 $\alpha=\left(\frac{m}{m-1}\right)\left[1-\frac{\sum_{i=1}^{m} V(X_i)}{V(X)}\right]$ の各々は

$$V(X)=\sum k_i^2\,p_i\,q_i\,\widetilde{\gamma_{(i)}}+2\sum_{i=1}^{m}\sum_{i<j}\gamma_{ij}\,k_i\sqrt{p_i\,q_i}\,k_j\sqrt{p_j\,q_j}$$

$$V(X_i)=\sum_{i=i}^{m} k_i^2\,p_i\,q_i\,\widetilde{\gamma_{(i)}}$$

である。但し k_i は第 i 群の items の数、 $\widetilde{\gamma_{(i)}}$は第 i 群内の平均寄与率を示す。

8. 社　　会

1. 意見の変化に影響する集団規準効果

徳島大学　岸田元美

目的　集団規準に対する集団成員の遵奉態度は、集団成員のパースナリテイの相異によても変化するが、むしろ、その集団の構造、集団条件、集団規準の内容、規準設定の条件等によつて、より多くの影響をうける。S.C.Goldberg や W. J. Mcbeachie の実験は、これをある程度まで実証している。

こゝでは集団規準として、学生の集団活動に対する態度を取り上げ、それに対する学生集団成員の遵奉態度に影響する条件として、成員数の多少、集団凝集度、集団規準設定の方法及び規準内容の４条件を実験条件とし、それらの条件が成員の規準遵奉態度に如何なる影響を持つものであるか、これを明らかにすることを目的とした。

方法　集団規準設定に伴う意見の変化を調査する集団を実験集団とし、集団規準を設定せず意見の自然的変化を調査する集団を統制集団とする。実験集団には、集団条件の相異する12個の集団、統制集団には集団条件同一の２個の集団が含まれる。実験集団の成員は social distance scale による友人関係調査及び社会性調査の結果から、集団凝集度などにおいて実験集団成員として適当なものが選抜された。表(1)は実験計画の集団条件である。

凝集力	集団決定 ／ 集団の大いさ	投票集団			討議集団		
		5名集団	10名集団	30名集団	5名集団	10名集団	30名集団
親近集団	集団番号	1	2	3	4	5	6
	成員数	5	10	26	5	10	30
	凝集力指数	4.15	3.56	3.52	4.10	3.47	3.21
	社会性評定値 Ⅰ	3.4	3.3	2.92	3.2	3.3	3.37
	Ⅱ	3.4	3.0	3.31	3.0	3.2	3.03
	Ⅲ	3.4	3.3	3.42	2 8	3.9	3.37
疎遠集団	集団番号	7	8	9	10	11	12
	成員数	5	10	28	5	10	30
	凝集力指数	1.20	1.79	1.83	1.10	1.90	1.72
	社会性評定値 Ⅰ	3.0	3.6	3.5	2.8	3.4	3.1
	Ⅱ	3.2	2.5	2.82	3.2	2.8	3.0
	Ⅲ	3.0	3.5	3.53	3.0	3.5	3.23

統制集団では、学生集団活動に対する意見調査を１日間隔で、同一調査用紙で２回調査する。実験集団では各集団別に統制集団と同じ方法で意見調査を先づ１回行い、次に実験集団中の投票集団では第１回目の調査後、その結果を口頭で発表し、しかる後に再ど同一調査用紙で２回目の調査をする。討議集団では１回目の後に討論によつて、その集団活動について集団決定をし、更に２回目の意見調査をする。整理は、１回目と２回目の意見の変化を数量化する。

結果　規準設定前に各成員が持つていた意見が、規準設定後に、どれだけ集団規準の方向に変化したかをみた。

その結果は

1) 実験集団の意見の変化は、統制集団の意見の自然的変化以上に、有意な差でもつて集団規準方向に変化していた。

2) 集団規準効果と成員数　10名集団＞30名集団＞5名集団　しかしその差は有意でない。

3) 集団基準効果と集団凝集度　凝集度大なる親近集団＞小なる疎遠集団　有意差なし。

4) 集団規準効果と規準設定法　討議集団＞投票集団　有意差あり。

5) 集団規準効果と規準内容　この関係はこのたびの実験条件では、明瞭になし得なかつた。

2. Red Pentadic Relation における選択

日本大学 近喰秀大 ○大村政男

（問題と方法）　グループの構造を特性づけるものは、個体のステイタスとその間を結びつける連結路の配置である。その研究はまたグループ内における個間的均衡と個内的均衡の問題の解決の一端にもなりうると思う。ここでは Åke Bjerstedt*の構造公式化を参考にして、5名の成員による一連の仮設的作業を考え、社会計測的に分析をほどこしていつた。すなわちAという個体から始つてB・C・D・Eの4個体を経由して、再びAが処理するという仮設的作業において、いかなる連結路とどんなウエイトが置かれるかという問題を採りあげてみた。B・C・D・Eの4個体についてのウエイトは 1. 単なる意味での親密さによる選択 2. 看護訓練における選択 3. レクリエーションにおける選択 4. 今後の共同生活における選択の4つの視点からなされた。

（結果）　ある特殊な看護婦グループの全グループにおける Red Pentadic Relation の型は↘型が最高で37.60%を占め、↘↗型27.30%、↗型16.90%、⌒型とW↗・⌒型は最低で、9.10%であつた。（矢印はウエイトの上昇および下降を示す。）この結果は X^2 検定の結果 X^2 23.42＜.01 で有意であつた。次に起点となる個体の看護課程の成績によつて、U・L両グループに分割し、Relationの型を見るとUグループには特徴的な型の頻度は見当らない、しかしLグループにおいては、↘型・↘↗型・↗型の順で頻度が低下し、⌒型とW↗・⌒型が同率で最低であり、X^2 18.73＜.01 で有意であつた。最後に起点となる個体の占める特殊な看護婦グループにおける階級によつてU・L両グループに分割し、Relationの型を比較してみた。そうした場合Uグループには特徴的な型の頻度は見当らない。しかしLグループでは、↘型・↘↗型の順で頻度が低下し、↗型・⌒型とW↗・⌒型が同率で最低であり、$X^2$10.35＜.05 で有意であつた。

Red Pentadic Relation における連結路は、かような外部的なものばかりでなく、さらに個間関係の Morale の面をも考慮しなければならない。いま最高の Morale (Maximum Reversibility) の生じた場合を M.Q 1 とし、看護課程の成績を指標として差を見ると、Uグループ→$\bar{x}$0.52 (0.01)**、Lグループ→$\bar{x}$0.54(0.02)となり、F_0 0.54＜F で有意な差が認められない。階級を指標にして見ると、Uグループ→$\bar{x}$0.60 (0.02)、Lグループ→$\bar{x}$0.53(0.01)となり、F_0 6.48＞F (α.05) で有意な差が認められた。さらに別な方面からの分析によれば、ある個体が設定した連結路は—one way attitude にせよ—始点となつた個体の予想どおりの方向をたどつてはいない。しかしA→B間の頻度は当然100%の一致性を持つているが、B→C間では33.70%、C→D間では27.20%、D→E間では25.90%、E→A間では5.1%の一致性しか認められなかつた。

*The Psychological and Educational Institute at the University of Lund, Sweden

**不偏分散値

3. Influence Process の実験的研究

帝塚山学院短期大学　沢井幸樹
浪速大学 ○松原慶太郎

集団作業についてのシャハターの実験手続を参考として、小集団で作業をさせた。その際集団を凝集力の異なる3集団（H.M.L）に分け、各集団について作業速度に関する正負の誘導（＋－）をあたえ、更にその誘導を除くという操作をほどこした。その場合作業量及その増減率を手がかりとし、質問票の解答を参考として、6条件（H＋、M＋、L＋、H－、M－、L－）のもとに生ずる影響のあらわれ方を見た。

その結果、影響過程についてのフェスティンガーの第2仮説と一致するもの、一致しないものが見られた。また＋誘導と－誘導とでは作業前の一般的教示（＋の方向）に関係して条件が異なるのではないかと考えられた。変数の操作は一応成功したが充分とは言えない。

したがつて、相互に矛盾する結果となつたが、影響事態についての充分な条件分析によつて、フェスティンガーの影響の2つの型を実験的に検討することが今後の問題である。

4. 集団の成層構造に関する一研究
—精神薄弱児集団の場合—

実践女子大学 {小林さえ子 ○齊藤美智子}

「目的」 特殊学級児童を対象とする集団成層構造の実験的研究。

「対象」 東京都内特殊学級児童相当学年5年の男女各々4集団。1集団4名。計32名。

「方法」 被験集団として特定の指導者1名（IQ平均75）追随者3名（IQ平均57）からなる「有成層集団」（以下SG）と特定の指導者なき成員4名（IQ平均55）の「無成層集団」（以下NSG）を男女各々2集団組織する。課題は有意味及び無意味の等分図形。統一図形と自由画の塗り絵の共同作業をさせる。〝4人できれいに塗るように〟教示する。実験場所は被験者達の学級。記録法は K.Lewin の Total behavior method により有意味的社会的言動（言葉と動作）の一切を記録する。

「実験期間」 昭和30年9月

「結果」 記録した有意味的社会言動を優位（A） 服従（S） 客観（O） 無視（I） 情緒（E）の5つの型に分類する。

1） 社会的言動総数は SG 476 NSG 437。

2） 課題別にみるとSGの言動数は自由画が最多、次いで統一図形、等分図形の順に多い。これは正常児童集団にみる傾向と同じである。一方 NSG は等分統一図形間に差はなく自由画は極めて少い。こゝに精薄児集団の構造の特性がみられる。NSGは指導者がいない為、成員相互のコミュニケーションが円滑にゆかず、社会的言動は少くなり自由画課題でありながら各個作業になつた。次に有意味等分図形でSGよりNSGに言動が著しく多いのは前者では指導者が成員の言動を制禦する為と思われる。

3） 性別。言動総数は男子499女子414で男子の方が多い。課題別にみると男子SGでは言動数は自由画が最多、次いで統一・等分図形の順に多い。女子SGの1つでは自由画の言動数が少い。これは指導者が主に単独で作業を仕上げたことによる。

4） 社会的言動の型。SG全言動数の中（A）の型50％（S）30（O）17（I）2（E）1。NSG（A）48％（S）19（O）24（I）5（E）4。SGとNSGの言動の相違としてS型が前者に多いのは指導者のAに規定された言動であり、O型が後者に多いのは指導者がいない為である。

5） 指導者と成員の社会的言動数とその型。SGの指導者の言動総数平均53.（A）79％（S）5（O）13（I）1（E）2 成員1人平均言動数22.（A）29％（S）49（O）20（I）2（E）0.4 NSG成員1人平均言動数27.（A）48％（S）1°（O）24（I）5（E）4。SGの言動型としては指導者の（A）型が最多、成員としては（S）型が多く、NSGではSGの成員より（A）が多く（S）が少ない。以上有成層集団の構造は正常児のそれと類似しているが無成層集団では正常児のそれとはかなりの相違がみられる。

5. 社会的適応と社会的規準（第2回目）

早稲田大学 伊藤安二

第17回名古屋大学に於ける日本応用心理学会においては、大学生男女各50人づつテストケースに就ての結果を発表したが、今回は更に性別及び年令差の立場から男子230人、女子170人合計400人についてまとめてみた。

1. 被験者は昭和6年生れから昭和12年生れまでのもの、即ち検査実施当時は昭和29年7.8.9月であるから現在年令満23才から17才までのものである。

2. 分析の目標 社会的適応に於ける、A関心度の分析。B偏向度の分析。AとBに於いては男子群と女子群との比較と、20、21、22、23才の年長群と、19、18、17才の年少群との比較を試みた。

3. 結果 まづ偏向度についてみれば、 a. 現代の20才前後の青年の社会的適応の仕方は、社会的な因子の方が生物的な因子の方よりも左に大きく変動してゐる。これは前の名大に於ける研究発表と一致してゐる。即ち、成人期に於ける革新的傾向、社会的規準への抗争、権威への反逆の特徴と合致してゐるものとも云えよう。 b. 男子の方が女子よりも、年長者の方が年少者の方が年少者よりも、左に変動の傾向がみられる。即ち、女子群は男子群に比較すれば、やや保守的で、従来の社会的規準から脱却しきれないきらいがあり、且つ、極端性は少ない。更に年少群には変動のきざしが認められる。 c. 次に関心度の一結論であるが、関心度の高低は年令差もしくは性別差をあまり認められず、社会的な因子、生物的な因子にも関係が深くあるとは現段階では考えられない。

以上の結果を足がかりとして提出されたる問題の妥当性、分析方法の吟味、更に新しい問題の発見を意図している。

6. 児童と社会環境（其の2）
—工場街のこどもの生活と意識—

社会心理学研究所　寺　内　礼治郎

第17回応用心理学会において、われわれは、大工場地帯の児童と小工場ないしは家内工場地帯の児童の、もののみかた、考え方を比較しながら、その類似点、差異点を考察した。そのときの1つの特徴として、家内工場地帯の児童は、親を中心とした「家」意識が強く「家」のためには、喜んで親と労働をともにするということがあげられた。今回は、この点に着目して、戦前、戦時中において、日本の社会に支配的であつた権威主義的または封建的な価値体系が、現在の小工場、家内工場地帯の児童の意識に、どの程度反映され、どの程度の崩壊がおこなわれているかをみようとした。いうまでもなく、明治以来の日本資本主義の発展は、極めて特殊な形態で行われ、資本主義社会の前段階である封建制の残滓を数多く伴つている。そうして、そこには1つの原理をみることができる。それは封建的な支配と服従の原理である。いいかえれば、家父長の支配する「家」の原理である。

これを小工場についていえば、工場主と労働者の関係は親方と子方の関係であり、親方は、子方を徒弟として仕上げていく。このような背景のもとに児童は成長していく。その社会的意識は、① 親、教師、おとなに対しては、服従—支配の関係はないが、親に対しては恩返しするといつた、封建的な恩情主義がみらはる。②「不幸」とか「苦労」感については、「苦労をしないでこの世の中を渡ろうということがすでにまちがつており」「苦しみはむくいられることがある」から「いまの苦労をいやがつてはならない」と思い、ときには「自分よりもまだ不幸な人がある」と思つて自分をなぐさめる。それはさらに「金持でも貧乏人でもそれに満足していれば同じだ」という論理に飛躍する。このように過去の日本人に独特な不幸感、苦労感はこれらの児童にうけつがれている。けれども ③ 運命主義や宿命主義には、はつきりと反対の態度をとつてをり、④「本は勉強に使うものだから、ふまないように、机の上にのせておく」といつた精神主義もその姿を没している。それに反して、⑥ 生活態度についてみれば、「弱きをたすけ、強きをくじく」ことが男らしい態度だと思い、従つて「おとなに叱られるときには、一発バンとなぐられた方が、ぐずぐず、何度も口でいわれるよりも、気持がよい」と思うのである。これは東京の下町にある家内工場地帯では、江戸時代以来の下町気質が依然として衰えていないことを示している。

以上のことから、（六三制教育がまがりなりにも実施されて）戦後10年を経た今日でも、児童の社会的意識のなかには、伝統的な、封建的な価値体系が残つていることを知る。このことは、社会的意識を規定するものとして、教育の力とかマス・コミュニケーションの力とかを過大に評価して考えるべきでなく、やはり日本社会の特殊性・変則性の中にそれを求めなければならないことを暗示している。

7. 交通事故が生じた人身傷害におよぼせる心理的要因に関する二、三の考察

日本大学 {○渡辺　徹
浅井　正昭

人口の増加に伴い、陸上、水上および空中にわたつて最近交通事故がますます頻発して、わが国でも国政上の大問題となつて来た。その事故発生の要因の大部分が自然的なものよりも人的なものにあるというので、われわれ心理の学徒もこの問題緩和のためにいく分でも寄与しようということになつた。1954年1月の国際応用心理学会の「ビルタン」にフォーブスが米国心理学者の交通事故軽減法研究の現状を報告し、最近、同氏が送つてくれた「公道安全研究の分野」によつても米国の交通事故研究に心理学者が参加している状況が判る。古賀教授が英国から持ち帰られた王立事故予防協会の書類に徴しても英国では女王がパトロンとなつて家庭や児童の交通安全教育に力を注いでいる趣を看取することができる。しかしわたくしの今日の話はもつぱら東京の警視庁管内の交通事情の現状に立脚して心理の学徒として交通安全につき立論して見たいと思う。

警視庁交通第2課が昭和30年7月1日刊行した「交通事故1箇年の反省」によると、29年7月から30年までに事故発生件数16,856、軽傷6,900、重傷4,195、死亡748、物の損害（1000円単位）330,919で、これらは事故件数も被害も前1箇年にくらべて増えて来たが、この増加率は前前1箇年に対して見れば、件数は¼に、死傷者は½に、物の損害は⅓に低下しているという。これらの事故の81.2%は自動車事故で、次いで自転車、歩行者、原動機付自転車、電車、諸車の順。自動車中でも乗用4輪が55.1%、うちタクシーが58%。こんな交通事故はどんな原因から起つたか。その原因は主として過失で、それが加害者側の自動車運転者の方にある場合と被害者側の歩行者の方にある場合とがある。前者のおもなものは「前方へ注意が足りない」、「ハンドル操作の不確実」、「他の優先交通権を無視する」、「追越不注意」の4つで事故の48%が起つている。その他「速度違反」や「徐行しない」、「酩酊運転」などが事故を起している。事故時運転者の心理、「先方でよけると思つた」31%「危険に直面してあわてた」28%、「現場附近の地理がわからない」23%、その他18%。後者のおもなもの「横断上不注意」52%、「児童幼児関係」30%、「酩酊その他」18%などであるから、事故防止対策は人事を中心として研究を進めなければならない。運転手の免許には視・聴・運動の諸

知覚の外、注意や知能・反応時間・感情安定度・責任感などの広義の適性検査を加える必要があろう。交通の教育訓練を力強く推進することが加害者側にも被害者側にも必要であろう。なおかような予防対策が当面の急務であることはいうまでもないが、更に事後対策を十分に練る必要がある。衝突・轢過・挾圧などの惨禍を受けて死亡した場合の遺族の処置は勿論、重軽傷者の症状固定後、恐らく大部分は肢体不自由者となるであろうが、それらのひとびとの更生対策は心理学徒の重要な課題となると思う。すなわち、(1) 運転手免許検査、(2) 交通標識および整理法、(3) 家庭および児童の交通教育、(4) 被害者更生などが中心問題となる。

8. 電話交換作業に於ける Action Research (その1)
—交換要員の組編成についての Sociometric Study—

広島大学 {兼子宙 正戸茂 ○西山啓

本研究は文部省科学研究費綜合研究 1040 の分担課題「集団活動の Action Research」研究の一環として行つたものである。

我々は1955年7月以降電話の交換作業の能率化をはじめ、交換要員として望ましい Personality. 作業 team の編成等に関し、「職場の人間関係」を中心として社会心理学、産業心理学の立場から、Action Research を企図し実施しつつあるものであるが、今回は交換要員の team 編成についての sociometric study を中心にその資料の一端を報告する。

対象及び方法：

鳥取県倉吉電報電話局女子交換要員61名に対し、1) 自分を含めて6名の作業チームの編成を行わせる。2) Bernreuter Personality Inventory を行い各人の性格傾向の Profile をとる。3) 技能検定試験（市内線・市外線）による技能の段階づけを行う。

結果及び考察：

第1回目の Action Research の結果については、目下観察の途中であるため、次回の報告にゆだねる事とし、今回は第1回目の Action Resarch を加えるに至る迄の background となつた資料に関する若干の implicalion につきのべる。

social acceptance の大なる者の特性としては、1) 神経質傾向の比較的大なるもの、2) 内向的なもの、3) 自己充足の大なもの、4) 社交性の中庸なるもの、といつた傾向がみられ、又 5) 技能のすぐれているもの程、大なる acceptance を受けるが、6) 余り自信の強すぎるものは歓迎されず、7) 支配的な同僚も敬遠される、といつた女子の職場特有の雰囲気が看取されるのである。特にしばしば同一 team の member は狭い局内の宿直室へ寝泊りしたり、食事を共にするといつた仕事以外の私生活面での接触を保つ事を余儀なくされるため、とりわけ上述の1)〜4)の factor が重要視されるのではないかと思われる。

さて、これらの結果のみでは Action Resarch の現状分析として充分でないことは勿論である。我々は今後技能検定の結果と Bernreuter Personality Inventony に表わされた性格傾向との比較考察を行い、更に各要因による team 編成を施し 3) その結果、実際作業における監査成績との相関的研究、或いは各要因別の分析等より綜合的な解明を行い、之にしたがつて今後の問題を推進してゆきたいと思うのである。

9. 青年の消費行動について

広島女子短期大学　鹿股寿美江

消費行動を決定する基礎的要因として、(Ⅰ) 青年の家庭環境（イ 職業的環境　ロ 生活の場　ハ 精神的および物質的幸福度、不幸度）(Ⅱ) 学力 (Ⅲ) 性格について検討を行つた。

第1段階は、次の調査資料を基礎に考察を行つた。調査対象は女子大生2年生、73名　調査期間は昭和29年1月から12月に至る1年間である。年間の消費分布表においての高位群（1ケ月の消費額が10,000円以上を示したもの）と低位群（1,000円未満のもの）について比較した。

〔Ⅰ〕(イ) 家庭の職業的環境が、高位のものは、専務、課長、支店長級が32%、商業が40%を示し、低位のものにおいては、無職が40%を示している。

(ロ) 生活の場が、高位のものは、下宿、寮に生活している者が48%、自宅が87%をしめている。

(ハ) 幸福度の点数は、（70項目よりなる幸福度測定によつて点数を算出）は低位のものの方が、幸福度がつよく、又不幸度は現実の不幸を肯定して高い。

〔Ⅱ〕 学力においては、2ケ年間の学業成績平均点数が高位のもの33.3　低位のもの31.4を示し、消費額の高いものの方が学力が優位でる。

〔Ⅲ〕 性格においては、教師のみた人物評価においては、高位のものは、〔明るい、積極的である、目立つ存在である〕といつた項目に該当するものが86%、低位のものは〔まじめである、ねばり強い、おちついている、何ごとも控目である〕といつた項目に該当している。

第2段階においては、Bernreuter の人格テスト（近藤、小林氏の人格診断検査を使用）によつて、性格と消費額との関係を考察した。

調査対象は女子大1年生A（37名）B（37名）C（43名）の3クラス。調査期間は昭和30年5月、6月、消費額は自由消費額（授業料その他学校に納入すべき費用および定期的交通費を省いたもの）を求め、5、6両月の平均額によつた。A、B、Cは同1科で専攻を異にするクラスである。学力においてAが高くBが中位、Cが低い。この調査においては次の結果を示した。

a. 性格の正常のものは、消費額も中庸的であり、性格の強いもの、又弱いものにおいて特別高位の消費額を示しているものがいる。

b. 学力のたかいAクラスにおいては、aの如き結果を示したが、低いB、Cクラスにおいては、性格検査の分布状態が一様の傾向を示した。

c. 学力の高いAクラスは平均消費額が、3,881円、中位のBは2,878円、低位のCクラスは、2,435円である。学力と消費額が平行的である。

d. 消費額の中庸的段階にいる者の型は性格線がおだやかである。高位のものは、性格線が、個性的の強い線が出ている。

e. 消費額の高位のものは、低位より神経質、自信がつよい結果を示した。他の項目は差異を認めない。

10. 社会現象の予測研究
—社会的行動の流動過程の要因分析（I）

輿論科学協会　牧　田　　稔

社会的な集団の行動は種々なる複雑な要因によつて絶えずその方向の規定を受けている。これら要因を解きほぐすことによつて、始めてこれら社会の集団現象の予測が可能になるであろう。ところでこれら要因は余りに複雑だと考えられている為、同時に作用する場合の影響の分析を行うことは不可能だと考えられていた。特に数値的な予測は著しく困難なものとして、社会心理学の分野では数年前までは手を染められずにいたものである。

しかし社会集団の測定技術の進歩によりその断面の測定に成功をおさめて以来、これら断面の Trend の作成が可能となり、ここから統計的な数値予測の可能性が示唆されるに至つた。特にサイバネティックスの思想はこれの解決にある方向性を与えた。

我々の研究グループはこの期に当り、幾つかの社会現象の Trend を作成し、数値予測の為の要因分析に着手した。現在手をつけているものは政治動向に関するもの、一つは商品の購買状況に関するものであり、ここで発表するのは前者であり、その研究過程の報告を第1報とした。

まづ過去6年間（昭和24年）の東京都区内の有権者の支持政党の Trend を作成した。

次にこれらを保守と革新の二層に分けた Trend の作成を行い、これら支持層の分析を行つてみた。

その結果年令的な要因がこれらの支持には優勢であることが認められたので、まづ、この要因についてのみの解析を行つてみた。

Trend の起算年を昭和26年とし、年令別に1年後、2年後、3年後、4年後の支持率の変化を措定する数式を決定し、これら数式中の未知数を最小自乗法により決定せんと試みた。

数式の1例を示せば次の如くである。

$$\frac{(c_{20}-d_2)\sum_{i=20}^{28} n_1 + (c_{20}+b-d_1)\,n_{19}}{\sum_{i=20}^{28} n_i + n_{19}} = \text{昭和27年度20代平均革新党支持率}$$

ここに c_{20} は昭和26年度20才代平均革新党支持率、d_2 は20才代に於て1年毎に減少する革新党支持率、即ち年令が増加するに従い革新支持は減る。n_i は27年度に於けるi才の東京都区内有権者数、bは20才を中心にし、10才代の1年に於て増大する革新支持率、即ち年代が若くなるに従つて革新支持はふえるとみる。d_1 は10代に於て1年後に減少する革新支持率

2年後では次の式の如くなる。

$$\frac{(c_{20}-d_2)\sum_{i=20}^{27} n_i + (c_{20}+b-d_1-d_2)\,n_{19} + (c_{20}+2b-2d_1)\,n_{18}}{\sum_{i=20}^{27} n_i + n_{19} + n_{18}} = \text{昭和28年度20代平均革新党支持率}$$

11. 戦後10年間の社会現象に対する適応の一調査

南山大学　寺沢ひさ

目的　終戦後10年間に生じた社会的現象の中、「六三三制度」、「男女共学」、「社交ダンス」、「自由結婚」、「選挙権の男女平等」の5目に対する戦後派と準戦後派の反応を比較し、各々の社会適応の状態をみんために本調査を行つた。

方法　質問紙法が用いられ、各々5項目の現象に対する賛否及びその理由を筆記又は口頭にて述べられた。被験者としては、18才より20才までの男子39名女子21名を戦後派とし、25才から30才までの男子15名女子13名を準戦後派として名古屋市内から選択した。

結果

1. 六三三制度　戦後派においては賛成の傾向が強く、その主な理由は、「教育の普及と均等」、「義務教育の年数延長」である。不賛成の理由に「入試地獄」や「予備校の存在」があるのは戦後派の特色である。準戦後派は賛否大体半々であるが、「学力低下」や「日本の国情に不適」を理由にして特に男子に不賛成の傾向が強い。

2. 男女共学　両派共賛成が多く、その主な理由は「男女相互の理解」及び「男女平等」である。不賛成の理由としては「男女の心身の差」と「異性問題」が主である。女子が「女子の学力向上」を理由にして賛意を表し、男子が「男子の学力低下」を理由にして不賛成を表して居るのは興味がある。

3. 社交ダンス　準戦後派が同等に賛否を示して居るのに比して、戦後派は賛成の傾向が大きい。賛成の理由としては両派共に「健全なレクリエイションであり社交術である」及び「男女が気易くつき合える」が多く、不賛成は準戦後派の男子に著しく、その理由としては「頽廃的な娯楽」や「日本の国に不適」がある。

4. 自由結婚　両派共に本人の意見を親の意見より重視する傾向があるが、特に戦後派にその傾向が強い。その理由としては「結婚は本人がするのであつて親がするのではない」というのが圧倒的に多い。不賛成の理由として準戦後派は主に「青年の未経験」と「無責任な結婚の増加」を挙げて居る。両派共女子は男子より親の意見に重点をおいて居り、その主な理由は「結婚生活の円満の缺除」にある。

5. 選挙権の男女平等　両派共賛成が圧倒的に多く、その主な理由は「人権平等」である。女子が「女性の地位向上」を理由に大凡100%賛成して居るに反して一部の男子が「女子の誤つた同権意識」及び「女性の政治への無関心」を理由に不賛成を表明して居る。又準戦後派の男子2名は「女は男に劣る」からと不同意を示してゐる。

全項目を見ると戦後派に比して準戦後派において「賛成」と「不賛成」の比率が重複して居る。又男子は女子より不賛成の反応が多い。

以上戦後の急激に変化した我が国の社会現象の中のごく一部に対する而も限られた被験者に対する調査であるが、これからみても戦後派、準戦後派及び男性、女性が夫々の心理的特質を基礎として夫々の立場に於て新しい社会に適応してゐる事がわかる。

12. 駐留軍基地の幼児について

広島女子短大　山内美子

調査対象　呉地区基地保育所8ヶ所325名。対照として呉市山手住宅街保育所2、広島市保育所2、農村3ヶ所248名をとつた。

調査方法　幼児は個人面接、保護者には調査書を配布した。

成績及び考察　幼児の教育態度を知るために設定した項目へ check をさせたのを基にして厳格、甘蔵、感情、放任の各家庭を決定した。「家の近くへ来た事がない」が男女計39.3%、「家の前を通る」が26.0%に対して「近所の家に泊る」が20.5%「家に来る」が9.7%、「家に泊る」が5.5%である。駐留軍に対して親の意見として「子供の教育上悪いから早く帰国してほしい」が40.6%「子供の教育上悪いが家計上どうにもならぬ」が5.8%「影響なし、家計上長くいてほしい、無答」と子女の教育にふれぬのが35.3%もあるが、幼児は「好き」が男女計64.1%、「嫌い」が35.9%いる如く何れの児童も関心をもつている。好きの理由は「菓子類、金銭をくれるから」で50.4%、嫌いも「何もくれないから」となつている。「親が嫌うから」は4.9%で、もつと幼児と話合つて欲しと思う。売春婦に対する関心は基地児中で男子12.2%。女子は38.3%で男女差が表われている。女子は「可愛い、きれい、やさしい、美味な物を食べる、服を多く持つている」と外観に憧がれている。「母がいけない人といつたから嫌い」というのは2.2%の僅少である。幼児の家庭教育に細心の注意を払つてほしいと思う。1日の小遣いは基地の各種の家庭の幼児が一般の幼児に比して多く使つていると有意の差が出ている。遊びは「戦争ごつこ、ちやんばら」をさせぬように干渉するのが基地で25.6%、一般が5.0%で有意の差が認められる。医者及び売春ごつこも「するらしい」「他家の子はするらしい」「最近はしないらしい」はそれぞれ有意の差が認められる。即ち、11.6%に対して0.8%、14.1%に対して1.2%、17.7%に対して1.6%となつている。幼児には良き遊びと遊び場を与えなければ人格形成に支障を来すと思

われる。幼児の異常状態については「偏食」は基地の各種家庭に「夜尿症」は基地の厳格及び感情家庭に、「すぐ泣く」は基地の厳格家庭に「嘘言」は基地の厳格及感情家庭に「爪を噛む」は基地の感情家庭に多く、一般家庭との間に有意の差が認められる。親の意識無識の不安、幼児にとつて不当な抑圧が源因していると思われる。

幼児と共に遊んだり、話をしたりすれば、愛情及び、承認の欲求を満足させるからFrustrationによる退行現象、異常行為は消失するものと思われる。

13. 琉球に於ける民族好性について

広島大学　酒井行雄

A. 目　的

国際連合の委任統治下にある琉球の住民がこれに関係ある他の民族に対して如何なる感情を持つているかを把捉しようとする。

B. 被験者及び方法

宮古群島の各地から集つた169名の小中高校の男女教員を被験者として1955年8月28日、宮古高等学校で Sartain and Bell の改訂したボーガーダスの社会距離スケールを用いて調査した。

回答を各質問毎に整理して百分比による好性の順位を算出した。

C. 結果とその検討

親近感の順位は日本、ドイツ、アメリカ、英国、イタリー、フランス、中国（台湾）、泰、印度、仏印諸国、スペイン、インドネシヤ、アイヌ、メキシコ、フイリツピン、韓国、中共、北鮮、ソ連、黒人であつた。更にこれを分析すると、

(1) 共産主義系民族への反感がみられる。これは日本との共通事情にもよるが、ラジオ、新聞等のマスコンミュニケーションによる影響も考えられる。

(2) 自由主義系民族への親近感が(1)の裏返えしとして当然ながら見られる。

(3) 特殊事情による親近感。同じ自由主義系民族に対しても、政治的並に歴史的事情によつて親近感に差がある。ドイツに対しては歴史的な事情により、アメリカに対しては主として政治的事情により、中国に対しては地理的、社会的事情により顕著な親近感を持つているようである。

(4) 東南アジア民族への親近感、地域的、文化的に相近いことがこのような親近感を持たせるのであろう。フイリツピンに対しては戦時中、及び戦後の特殊事情による例外であろう。

(5) 対米感情は良好であるが7項8項9項に於て拒否的であるのは、集団或は国民としての米人に対しては個人としての米人と異る感情を持つものとして、祖国復帰運動ともにらみ合せて注目される現象である。

(6) 黒人に対する感情の不良なのは主として身体的事情によるが、黒人兵の犯罪が多いことも一因と見られる。

次代による民族好性の差異をみるために、20才台と40才台の比較をした。共産系民族と自由主義系民族とに対する好性の世代差は見られず、順位相関も0.8であつた x^2 検定によると、第9項追放に関してのみ0.02水準で若い世代のソ連に対する拒否が大であるとの有意差が見られる。又中国人とソ連人に対し第7項特別区域設定に関し0.05水準で世代間の有意が見られるのみで、その他は凡て有意な差がない。この結果民族好性について宮古群島では極めて等質的であるとの結論が得られた。

14. 原爆被害の社会心理的処理

川村短大　松浦田鶴子

この研究は、古賀先生還暦記念心理学論文集に発表した原爆被害直後の被害者の立場から10年間の状態をみたものである。

それ等の被災者は、個々のうけた経済的、或は個人の肉体的及び親子関係の被害等を、10年間に如何に処理してきただらうかという様な現実の問題を実体的に把握する為に行われたものの一部である。

まず、今回は女子の肉体に及ぼせる被害の社会心理的問題について行う。

現在肉体的に被害をうけている人達を分類すると、火傷、切傷、骨折等であるが、これらの肉体的被害の中、日常生活にいつも人目につきやすいもの、或は常に生活に支障を来たすものを取りあげて、この人達がどの様に生活して来たか、その場にのぞんでどの様に対処してきたか等を調査分析した。

調査は現在病床にある人、及び病院など特定の施設の中に生活している人は除外して行つた。

社会人としての青年期の女子が対象である。特に美貌に対しての、失われた美に対する意識は強烈である。

社会的条件、経済的条件を全然除外して調査を考察する事は出来ないが、外傷からくる神経衰弱的な憂うつ性、それらにともなつておこる自己逃避、自己嫌悪、種々複雑なものがある。

15. 里子定着の予測

岡山大学　天野牧夫
岡山県玉島児童相談所　○須見喜六
鳥取少年鑑別　菅　俊夫

目的　里子が里親家庭に定着するか否かの予測に有意な要因を探究し、要因のカテゴリーを数量化して的中率のなるべく高い予測表を作成し今後失敗に終るべき里親里子の結合を未然に防止して里親制度運営上の改善向上に資しようとする。

手続　使用した資料は岡山県下児童相談所の里親登録簿の記載と児童相談所職員による親里子との面接調査の結果報告による。被調査者は昭和28年2月11日から昭和30年8月末までの間に里親里子となつたもので1年以上経過し現に定着しているものを成功群（82名）、定着し得ず中途で不調になつたものを失敗群（41名）、に分けて次の手続をとつた。

(1) 要因の選定　里親里子の調査項目の中から心理乃至社会的な要因45箇をとりあげ成功里親子群と失敗里親子群とをなるべく大きく引離す要因を X^2 検定により選定する。

(2) カテゴリーの数量化　各要因のカテゴリーの質的な差を数量化して点数を与える。その与え方は両群の分散が1に近くなり平均の差 li が最大となるようにする。要因により平均の差が違うので各カテゴリーの点数に重み $\alpha i = \frac{li}{\Sigma li}$ を乗じる。

(3) 経験表の作成　各人の総得点を算出し予測の経験表を作成する。分割点は $X_0 = \frac{m\sigma' + m'\sigma}{\sigma + \sigma'}$ で計算。判断成功率は $\frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_{-\frac{\sqrt{\Sigma li}}{2}}^{\infty} e^{-\frac{t^2}{2}} dt$ により計算。

結果(1) 予測に役立つ要因として受託の動機保護歴、忙しさ、里親の性格、里子の性格、里母の年令、委託年令、里子の知能、同居子供数、経済状態の10箇の要因を得た。

(2) カテゴリーの数量化した結果は別表の1の通。

(3) 予測の経験表を作成した結果は別表の2の通の分布型を示した。分割点は－0.019理論的判断成功率は92%であるが経験表による的中率は83%。

結果の考察(1) 予測に役立つ要因10箇の中特に有意差の顕著なものは里親の方では受託の動機、忙しさ、里親の性格であり里子の方では、保護歴、里子の性格であつてその他の要因は差が比較的顕著でない。

(2) 10箇の要因中里親の性格と里子の性格とは成功又は失敗という結果からの先入観念に影響されて評定が主観的になり易いがその他の要因は客観的に調査できる。

(3) 失敗群の中で予測表による分割点－0.019以上の得点のもの8名（20%）、成功群の中で分割点以下の得点のもの13名（1ゝ%）で計21名（17%）が的中しなかつたが、得点＋0.615以上のものは必ず成功、－0.347以下のものは必ず失敗となつている。

(4) 予測に反して失敗した事例では委託後の家庭事情、里子の職業志望の変化等特殊な条件が働いて居り、予測に反して成功した事例では恵まれない条件にあつたのがその後の指導如何と里子の忍耐によつて失敗を免れる場合もあり、委託後の定着指導の大切なことが認められた。

（今回は委託前の要因のみによつたが、委託後の要因を含めた予測については次の機会に発表したい。）

9 産　業

1. Productivity と労働態度についての一研究

広島大学　正戸　茂

1. Productivity という用語について、Productivity という用語は普通、一つの企業体（又は一つの国）、あるいはグループについて使用されるのであるが、ここでは individual productivity の意味に使用している。

2. 対象工場　A.B.2工場　　A工場　N＝282人
　　B工場　N＝ 86人

3. Reliability of the scale.

この態度調査表による調査の reliability を Split-half method によつて検定し、さらに Spearman-Brown formula によつて修正値を求めたところ、次の数値を得た。

A工場　γ＝0.86
B工場　γ＝0.84

4. Item analysis.

始め30個の items を用意していたが、 Good-poor analysis（R. Likert の方法）を用いて、綜合点を出して、最高点から25%（高い方から25%）、最低点から25%（低い方から25%）の両群をつくり、その両群について、各質問毎に両群の差の検定(Non-parametric test. S Test)を行つて、第7，9，13,23,29,30の6個の質問項目を除去した。

5. 生産性 high gronp と low group の選び方

A工場では、各人の生産成績がわかつているので、最近期間の生産成績をリスト化し、high 群25%、low 群25%をとつた。

B工場では、流れ作業であつて、各人の生産量が把握できないので、機械装置の取扱い方、作業方法、作業規律、安全等を規準として、監督者全員17人の平均評定によつて、high 群25% low 群25%をえられた。

6. 結果

各質問項目を次の dimensions に大分類した。

(1) 仕事　(2) 労働条件　(3) 監督者　(4) 同僚　(5) 作業組織　(6) 会社

そして、この各 dimension 毎に、生産性 high 群、low 群の綜合平均点を算出した上、両群の平均点の差の検定を行つた（Non-parametric test. S. Test)

その結果――A工場、B工場ともに、有意な差を示した dimension は (1) 仕事 (2) 労働条件 のみであつた。これは次のことを意味すると考えられる。

i 仕事について。

仕事が自分に適していると考え
仕事が大切であると考え
仕事を改良するべく常に努力している
} この差が productivity の差をつくる。

ii 労働条件について

労働条件について
満足し労働環境について安心して働く
} また、この差が productivity の差を生ぜしめていると考えられる。

2. 社会行動の構造論的考察（第一報告）

名古屋大学 { 白石一誠 / 中獄治麿 / 太田雅夫 / ○山本輝夫
犬山高校 梅田昭吾

その表現される様式についても又それに関与する要因についても極めて多種多様な社会行動の構造を一義的に取扱うことは叙述を一層漠然たらしめるのみで有効な情報の把握からは遠ざかる傾向がある。

この第一報告では慣習的な行動の中で特に特定地域社会の購買行動をとり上げ、いわゆる購買慣習の実態とその構造を究明することを目標にした。

購買慣習なる行動は要求が購買という行動を媒介として満足される過程が固定化され習慣されて一定の行動様式をもつに到つたものと考えることによつて、吾々はそこにやゝ安定した行動の pattern を想定することが可能である。そこで購買慣習の実態としての表現型を一応、購買慣習、購買心理（狭義)、購買領域、購買量（消費量)、値頃、Socio-Economic な背景の各側面から捉えて、こゝに提出される構造的特性を引き出して購買慣習を組み立てゝいる要因相互の関係を見出そうとするものである。

対象として愛知県犬山市の住民をとり上げて、上記目標に従つて調査した結果を基礎資料とする。調査対象は成人とし有権者の中から389名（男184、女205）の無作為抽出による標本を抽出した。

こゝでは応答を分類することによつて得た統計量の特性に注目して地域社会の背景の上に購買慣習の類型を考察することにより構造的なものを把握しようとして

1. A―C型 { A 犬山市の中心商業地域にみられる典型的な購買行動
　　C 週辺及び郡部地域にみられる購買行動
2. M―F型 { M 男子に典型的とみられる行動
　　P 女子に典型的とみられる行動
3. Y―O型 { Y 青年的な特徴をもつた行動
　　O 老年的な特徴をもつた行動

の三類型を導き出すことが出来た。これは裏がえせば、それぞれの型に属する人々の商店に対する要求、或は彼等の購買慣習を規定する商店撰択の特質と考えられるものである。

これら各々の類型に対する特別方程式を求めると、

1. A.C型　$X=.24(G_3)+.45(G_7)+.18(G_{10})+.52(S_1)+.19(S_2)+1.29(P_{12})$
2. M.F型　$X=.28(S_e)+.42(G_3)+.53(G_4)+.20(G_7)+.41(S_1)-.06(S_2)$
3. Y.O型　$X=.48(A_g)+.80(G_3)+.81(S_1e)+(S_{1s})$

こゝでS_eは男女　A_gは年令　その他は質問紙の番号である。

これら方程式の変数はそれぞれの型の構造を規定する要因と考えられ、又変数の係数はその変数の寄与の度合を示す量と考えられる。併し社会行動は極めて複雑な内部構造を有しており、これらの表現型式を基礎とする分析のみでは充分でないと考えられる。

初期の目的達成の為には更に高次な多次元解析及びより精密な資料の獲得が必要とされる。その時始めて習慣化して行く Process についての叙述が可能となるであろう。

3. 身体障害者の情意生活について

鉄道公済会　丸　山　茂　樹

国鉄職員の業務上の災害により障害を受けて後治療の温泉療養に専念する期間に、身体的にも精神的にもまた職業的にも充分役立つよう更生指導することを委託された弘済会は全国七ケ所の鉄道療養所に指導員を配置し、障害者と起居寝食を共にしつつ体力の恢復にもまた精神の調整に、職業的には適性検査を施行して、選転、復転のカウンセリングを行つている。精神指導は最も至難な事で、まずパアソナリテイの把握と理解のために、障害者個人の内部の精神の動き、情緒的な緊張の度を測定して障害者の気質面を探知する為に、パアソナリテイテストとして労研編の情意生活しらべを適性検査と同時にK療養所入所者42名、S療養所入所者23名、計65名に施行した。

この方法は60の質問に肯定、否定、無答の何れかの応答を記入させて、この肯定に反応した数を個人の情意不安の数として、60題の中20以上の肯定反応数があれば情意不安の存在期とし、30以上あるものは神経症的症状があるとして注意し、40以上の肯定反応があれば入院加療の必要もあるとされる。

この情意生活しらべの結果は次の通りである。

情意生活しらべを行つた人数	65名
情意不安を訴えた数の平均	21.2
標準偏差	9.5

これを障害別に見ると手、足の切断者の重度障害者は、腰椎、脊椎、胸椎等の損傷者や打撲、捻挫による障害者に比して情意不安の訴えが少ない。骨折やその他軽微の障害者は最も情意不安の訴えが少ない。

これを施設別に見るとK療養所の入療者はS療養所の入所者より情意不安の訴えが多い。これは環境条件の負荷の強いことを示めすものと思われる。

これを年令別に見ると

18—19才の情意不安の訴え数平均		11
20—24才	〃	25
25—29才	〃	21
30—34才	〃	24
35—39才	〃	17
40—44才	〃	15
45—49才	〃	14
50才—	〃	28

壮年期の障害者に情意不安の訴えの多いのは、職場の適応や、家庭の問題、生活と労働と障害の関係から来る緊張の高まりから来るものと思われる。

つぎに入療所数と情意生活の関係を見ると60日より80日の間までには情意不安の訴え数が多く、入療所数が90日より100日と日数が多くなるに従つて情意不安の訴え数が少なくなつて来る。60日から80日までの期間が障害者の最も情意不安を訴える緊張した期間である。長期療養者は情意の不安の訴えが少なくなる傾向がある。これは環境に適応した事と、障害を諦観した緊張の弱まつた状態にあるものと思われる。

4. 交通事故防止の心理学的問題について

国鉄労働科学研究室　鶴　田　正　一

毎年交通安全週間は繰返し、繰返し催されているが、交通事故の絶え間はない。しかし、このことは、必ずしも従来の事故対策が全面的に効果がなかつたというのではない。ある種の事故は、その原因の除去に成功して発生しなくなつても、社会状勢や交通機関の目まぐるしい変化が、また次から次へと別の原因による事故を発生せしめているのである。

しかし、事故の防止はその原因の調査からといゝ、よく、物的原因とか人的原因とかに分けて考えられるが、一事故の原因をそのいずれかに帰してしまつたり、また人的原因にしても、いくつかの因子のうちの、たゞ一つだけに帰して、そのためにその他の関係因子がともすればかくれてしまうことに気づかず、そうしたものを集計した単式統計

によつて、どの因子による事故が多いといつたところで、それだけからでは有効適切な対策は生れて来ない。たとえば、色々な事故統計をみると、人的原因として、いまでも本人の不注意とか軽卒とかで片づけてしまつているのが多い。そして、その不注意の現象が生ずるようなその状態が何故生じたか、その状態は人間一般の能力の限界を超えたものではなかつたのか、ということさえも不問にしている。

こうした人達のたてる事故対策は、たゞ、〝信号に注意せよ〟とか、〝周囲に注意を払え〟とかいうことを叫んだりして、そのようなポスターをやたらに、あちこちに貼りつけて、それが安全運動だとして毎年繰返しているにすぎない。そんなことでは、いつまで経つても、この種の事故は絶えない。

そこで、最近は Case study をがつちりやることからスタートすべきだということがいわれてきている。これには、永年事故を惹起しなかつた人とか、そうした人の多い職場とか、あるいは、事故を未然に防止した場合とかなどについても行うべきであるが、やはり、いざとなるとその方法は簡単ではない。また現場の人達は、このような調査に快よく応じてくれない。そこで、やむを得ず、徹底的な究明をはかるのには重大事故の調査に限られてくることになる。しかし、これによつて、一事故に関与する原因因子が複雑多岐にからみあつている実態が判明すると共に、それらの因子の防止対策の目標も自ら生れてくる。その事例として昭和22年の八高線列車脱線事故と、昭和26年の桜木町駅列車火災事故とをあげる。(説明省略)

事故の具体策はこのような Case study と、作業種別による事故発生因子についての複式統計との併用によつて進められるものであり、その一方だけからでは適切な対策は生れない。Case study だけでは大極的な見透しは得られず、統計的な結果だけを眺めたのでは、それにかくれている事故の因子の関係が見られない。

10. 司　　法

1. 嘘偽診断に於ける判定の基準について

東京工業大学　宇留野　藤　雄
日本大学　○岡　本　　健

目的　嘘偽判定にさいして如何なる示標と基準をもちいれば適中率を高めることが出来るかについて検討した。

実験群を3つに分け、1つをコントロール群、他の2つのうち1つは先行経験が如何に後の経験に影響をもちその結果判定がどのように妨害されるかをみ、いま1つの群は逆に電気ショックによる恐怖感が先行経験に如何なる影響をもち、また如何に判定を誤るかをみた。

実験方法　測定器は工大式 Wheatstone bridge 回路をもちいた。被験者は各群それぞれ12名づつとし、対象は心理学専攻学生であつた(男24名、女子12名)。

手続　テストの方法は Peak of Tension Test でこの方法では被験者は自分の選んだ数以外は何も知らない。つまり実験者が5から9までのうち故意に8を引かせる方法である。質問は各数字について5回くり返し、質問による順序差をなくするように配列した。第2実験群では数字8を引かせた後1回テストをし、次に6を引かせた。第3実験群では数字8を引かせて1回テストし、次に6を引かせテストした場合に電気ショックをかけ、以後数字8をかくすように指示しもし適中すればさらに強い電気ショックを与えることを暗示した。答はすべて「いいえ」とした。

結果　第1に、各値の大小によつて分類すれば次のようになる。

	実験群Ⅰ	実験群Ⅱ	実験群Ⅲ
潜　時(小)	71.0%	56.0%	50.0%
反射時(大)	67.7〃	36.4〃	53.3〃
反射量(大)	83.4〃	72.5〃	77.5〃

以上の結果から反射量の大に着目すれば実験群Ⅰ.Ⅱ.Ⅲのいずれに於ても他の示標に比べて最も高い適中率が示される。次にいずれの示標によつてみても実験群Ⅱ、つまり先行経験が後経験に影響する場合は適中率が低下することは注目すべきことである。第2に、各数字の潜時、反射時、反射量についてそれ以外の数字のそれらに対する平均との比を求めてみると下記の如くになる。

		実験群Ⅰ	実験群Ⅱ	実験群Ⅲ
適中率及び比の範囲	潜　時(小)	12.5% (0.24)	18.2% (0.35～0.44)	10.0% (0.78)
	反射時(大)	62.5〃 (1.14～8.10)	23.2〃 (1.34～2.60)	60.0〃 (2.00～3.22)
	反射量(大)	75.0〃 (1.46～4.18)	36.5〃 (1.40～2.60)	80.0〃 (1.72～5.26)

この結果からみると、潜時の小に着目するといずれも20%に満たない適中率である。次に反射時の大は実験群Ⅱ以外は50%以上の適中率であるが、この場合も反射量に着目することは実験群Ⅱを除いてはいずれも高い適中率を示

す。また、反射量に於てはその比が1.5以上を示さない場合は嘘偽と判定することは危険であろう。

考察　以上の結果は予備的段階に得られたものであるが、実験群Ⅱ及びⅢが実験群Ⅰに比べて低い適中率を示したことは今後嘘偽診断の理論的究明に示唆を与えるであろう。また全体として刺激に対する明瞭な変化が得られなかつたが、この種の実験室テストではより強い情緒性をもつ刺激を与えるべきであろう。

2.　収容少年の交友関係（生徒と比較して）

高松家庭裁判所　稲　毛　登代子

1.　調査目的―青年期の交友関係は青年期の心理的特性により、児童期や成人期のものに比べて、より内部的な結合をもつため、交友の影響は家族のそれにも比肩される程重要である。家庭裁判所において取扱う非行少年の異常性要因にも、更に強力、且つ、特異な交友関係の影響が屢々表現されるので、収容少年の概観的交友関係を調査したのである。

2.　調査対象と方法―少年院、教護院に収容中の少年男女285名、これに比較対照するための生徒男女815名、及び、共犯関係の非行少年男女1,127名で14才以上20才未満の者、合計2,127名に対し質問紙法と第一次文書統計法を用い、昭和29年9月に実施したのである。

3.　結論―生徒の交友関係に表われた状態と比較して収容少年の特色を述べると、収容少年男子は孤独的で友人は1人位で保護者の知らない友人が半数に及び、衝動的、機会的要因によつて結合した者もかなりみられ、交友期間も1年以下の短期間が多く、別れたい友人が相当にある。その友人は外貌的、支配的、闘争的な特徴をもつた年上の身体労働者で、経済的に同程度よりやゝ上の家庭の者であるような比較的に良好でない場合が多く、而も、半数は非行の経験をもち、又その少年と非行を共同した者もかなりある。彼等のグループも友人と同じような特徴がある。

異性関係には、性的関心が友人によつて喚起されたものが半数を越え、性交経験者が40%もあつて、その初発年令は生徒より2年乃至4年位早く、異性友人も年上が多い。非行友人や異性との関係は16才、17才に最も多く、交友関係として問題になるような条件は年令の上昇につれて、増加する傾向がある。

収容少年女子は、孤独的な者と多数の友人をもつ者が共に多く、友人の家庭に対する関心の薄い者、将来交際を継続したいか否かの意思不明な者もかなりある。又友人の半数が異性であるため男子の特色も相当表われており、その結果は、大体において収容少年男子の場合と同様である。その他の特色として、外貌的、攻撃的、権威的な特徴をもつ者で、職業は雑業、無職、職業不明というような健全性を欠く友人もある。

異性関係では、性交経験者が72%にも及び、その初発は15才に最高率を示し、性的関心も「ためしにしてみたくて」「むりやりにされてから」起つたというような早熟さと特殊な受動性がみられる。

要するに収容少年の場合は、よく闘争的、虚勢的、逃避的で、移気で補充要求も強く、より早熟であるという性格と、知能的にやゝ低格ではないかとみられるなどの特性が、交友関係の影響に関聯して、相当特色のある結果が表現されたものと思われる。

3.　心理テストに基く少年交通事犯の研究

大阪家庭裁判所　上　田　好　一
　　○豊　田　十三郎

交通取締違反、交通事故等の少年交通事犯の急激な場加に際し、その保護対策に役立つ何等かの資料を得る為に、昨年10月より本年3月末に到る間に、大阪家裁本庁に於いて受理した交通事故（過失傷害及び致死）少年155名、無謀操縦前歴5件以上に及ぶ常習違反少年85名、対照群として本年7月中に受理した軽微な交通違反少年の内初犯者100名を任意に抽出し、実態調査を行つたが、その際実施した各種心理検査結果の整理を一応終了し、之等少年の取扱上、参考になると考えられる二、三の事実に気付いたので、検討不充分ではあるが、報告し批判を請う。なお検定は、χ^2テスト及び正規分布によつた。

1.　知能検査成績（新制田中B式）

知能指数平均値をみる。過失少年（以下少年を略す）は86.8　常習88.5　初犯94.5を示す。過失と常習の差は認められないが、この二群と初犯の間には、明確に差が認められる。（t＝2.41）常習と初犯の差

知能分布に於いては、過失・常習に準正常域の者が著しく目立つ。各群に於ける準正常域以下の者の出現率をみれば、過失55.1　常習61.3　初犯40(%)を示し、過失・常習に低知能者が多いと云える。（危険率1%以下）

2.　クレペリシ内田精神作業素質検査成績

判定cf以下の要注意曲線の各群に於ける出現率をみれば、過失63.9　常習49.3　初犯47(%)を示し、過失に最も高く、順次出現率が低くなると云える。（危険率1%以下）

平均曲線を比較すれば、過失は休憩前に於いて強い興奮傾向を示し、休憩後に初頭緊張を全く欠き、4―5分目の

興奮現れず、意志の弛緩を感じさせる。常習は過失に傾向類似するも、興奮やゝ弱く、特に休憩後に初頭緊張が認められる。初犯は理想的定型に近い。常態指数を示せば、過失 (+)0.58 常習 (+)0.73 初犯 (+)0.95 である。

3. 向性検査成績（淡路）

平均向性指数を示せば、過失 102.7 常習 105.8 初犯 100.6 で有意差はない。

4. 適性検査成績（山越式器具による）

各検査の平均適性点をみる。

型盤は、過失 41.1 常習 43.8 常習が勝る。(t=2.11)

形態は、過失 41.2 常習 42.4 差なし。

狙準は、過失 43.8 常習 40.7 過失が勝る。(t=3.35)

速度は、過失 46.6 常習 44.9 差なし。

運転に関係あると思われる物のみ採用した。

以上より、過失・常習には知能程度劣る者が多く、作業素質に於いては、過失の多くは不良曲線を示し、常習者が之に次ぎ、情状の重い者に低質者が多いと思われる。適性検査を通じては、過失・常習を通じて高度の作業能力を要する職種に不適の者が多いと云える。

かゝる素質上の問題が、事故・常習違反にかなりの関連を持つ事が窺われ、之等交通事犯少年も、やはり科学的調査・審判の対象として相応しいものであると考える。

4. 非行少年に対する Client-Centered Counseling
——実施結果について——

茨城県中央児童相談所　遠　藤　　勉

1. 対象者は昭和30年1月より同年8月末までの間に、茨城県中央児童相談所に於て一時保護を加えた、男女非行少年50名である。

2. 基本的態度は、シカゴ大学教授 C. R. Rogers の創唱する Client-Centered の精神に於て一貫したことである。其の他今回特に留意した諸点は、(イ) 一時保護中の処遇を可能なる限り nondirective としたこと。(ロ) Counseling 回数に、週2回を原則とし、その1回の時間は、30分乃至50分に留めたこと。(ハ) 第1回の面接を一時保護の即日実施し、場面構成も実施したこと。(ニ) 保護者に対して、カンセリングの要を認めた際は実施する方針をとつたこと等である。

3. 措置の決定は、関係全職員（精神医、テスター、ケースワーカー、生活指導員其の他）から成る措置会議によつた。カンセラーは此の際Counseling process を発表し、その転換の状況を明らかにすることに努めた。

4. 実施結果は、成功と認められた者33名65%にして、不充分のまゝ中止となつた者17名34%であつた。以上の結果保護所より直ちに帰宅した者21名42%、保護者の受容態勢整わぬことから当分養護施設生活となつた者12名24%、不充分のまゝ中止となつた17名は教護院収容となつた。

50名をカンセリング回数、年令、I.Q.の3点から検討すると、成功と認められた Client の面接回数は最少4回最大15回にして平均8回。面接10回以上の結果は、8名中8名の成功にして100%、6回以上8回までは、76乃至77%4回以上5回までは44%であつた。

年令差よりみると、12才以上17才までは、36名中27名75%、12才以上14才までは、28名中21名71%、8才以上11才までは、14名中6名43%であつた。

I.Q.（鈴木ビネー）差よりみると、I.Q.90以上115までの場合は22名中16名73%、76以上89までの場合は14名中10名71%、63以上75までは14名中7名50%

5. 以上は児童相談所の対象となつた非行少年であるが、結論的には年令、I.Q.の高い程、更にCounseling回数の多かつた程成功率が高かつた。特に12才以上にしてI.Q.76以上の Client の場合は80%の成功率を示した。年令I.Q.共にこれ以下の Client の場合は50%に満たない状況なれば、Play therapy 等によることが、より効果的と考える。被虐待者、保護者との対立甚だしい者の場合は、先づ保護者と別居の方途を講じ然る後、両者に別個のカンセラーに於て実施すべきことを認めた。

5. 交友関係と不良化

東京家庭裁判所　山　本　晴　雄

先に10代の不良化には家庭より友人が大きな比重をなすことを発表したが（第17回大会発表）本研究はそれを深めたものである。

親しい友人について種々の質問群を作成しこれを非行少年152人、非行少女123人に実施し、比較のため夜間高校生男106人、女102人に実施し、1,603人の親友について分析した。なお非行少年少女に対しては「くれだした頃」を想

い出させてその頃の親しい友人について記入させた。

彼等の親しい友人数は、1人当り非行少年男友達2人、女友達0.2人、非行少女は女友達1.4人、男友達1.3人であり、普通少年は男友達2.1人、女友達0.37人、普通少女は女友達2人、男友達0.36人である。そして非行群であつては非行少年の男友達の77%、非行少女の女友達の56%がぐれていた。そこでぐれている友達と普通群の友達とを比較することにした。

先ず「どこで知合うか」について見ると、普通群の友人は学校、職場で知合うことが多いが、非行群の非行友人は学校、職場で知合う率がより少く、友達の紹介、近所、盛り場、パチンコ屋、ダンスホール等で知合うことがより多い。「どのような点にひかれたか」を見ると、両群の差が目立つのは、普通群にあつては、勉強ができる、よく勉強する、仕事に熱心、明朗、真面目、正直、おとなしい、人がいいが目立ち、非行群にあつてはゲームがうまい、顔がきれい、腕力が強い、名が売れている、仲間を引廻している、腕がある、侠気がある、可愛がつてくれる、優しくしてくれる、自分の言うことを聞く、などが目立つ。

次に友達の非行の程度を非行点で示すと、その平均は普通群の男友達0.33点、女友達0.1点であるのに対し、非行群の男友達15.5点、女友達11.6点である。将来これを更に整備して非行得点の標準化をはかりたい。なおこれを一一の項目について見ると興味深いものがあるが、省略する。

次に「友達といつしよにどんなことをしているか」を見ると、非行群にあつては余暇利用の悪さが目立つている。これを得点で示すと、「よい行動」は普通群男2.7点、女2.8点であるのに対し、非行群にあつては男1.0点、女1.1点であり、「よくもわるくもない行動」は普通群男6.7点、女5.6点であるのに対し非行群男11.1点、女10.8点であり「わるい行動」は普通群男0.2点、女0.05点であるのに対し、非行群男10.4点、女6.7点である。一一の行動については省略する。なお普通の行動が非行群に多いことは余暇の善用に利用せらるべきでもある。

次に交友関係を保護者が知つていたかどうかを見ると、保護者が知つていたのは、普通群男67%、女82%に対し非行群男57%、女39%であり、保護者が知らない理由としては非行群では75%が故意にかくしている。保護者が知つて交際を断つように勧めても男89%、女92%はこれに反抗している。

6. 気象と人身犯罪 (3)

警視庁　佐伯茂雄

戦前と戦後の犯罪の様相は大部変つたとみられている。それ故に、気象と人身犯罪の関係についても再検討を加えておく必要があるだらう。このような意味でその一部は、(1)と(2)で報告した。今回は、昭和28年中に全国で発生した傷害件49,526件について報告する。考察検討するに当り、地方別に分類し、これを月別（平均発生件数）気温ならびに湿度段階別にし、これらの発生件数に対する期待件数を求め比較考察した。

その結果は、

Ⅰ. 月別、北海道の例外を除いて各地方とも7、8月に発生件数は期待件数を上まわり、その差は有意である。なお、月別発生件数の地方間の相関は、北海道を除きすべて有意な相関々係にある。故に、例外を除けば過去の研究結果と同様、夏季に傷害事件は多く発生するといい得る。

Ⅱ. 気温段階別発現日数と同発生件数との相関は、有意な相関々係にある。故に、発現日数に発生件数は依存しているが、考察の結果では、全国的にみて摂氏18度以上の場合に発生件数は、期待件数を上まわり、その差は有意である。但し、平均気温の低い北海道、東北は8度以上の場合に上まわつている。したがつて、気温の上昇は傷害事件を誘発し易くすると考えられ、夏季に発生件数の多いこともうなずけるが、ただ地方によつては気温何度以上ということに違いがあることを考えなければならない。

Ⅲ. 湿度との関係は、気温よりも発生が発現日数に依存している。したがつて、湿度そのものと傷害事件の発生は一応無関係であると考えられるが、全国的に眺めると48%～77%の間に期待件数を上まわることが知られる。しかし、中国地方の如きはいづれの段階にもほとんど差がなく、発現日数即発生件数に近い件数を示している。

戦前の石井俊瑞、戦後の増田光男等の研究から考える時、湿度は人身犯罪に無関係のようではないが、気温ほど積極的な関係にはないようである。それ故に、気温との相関において考察しなければ湿度との関係を明確にし得ないが、今回は一部資料の不備のため考察を省略するほかはなかつた。

Ⅳ. 石井、増田等の研究、および(1)の報告と以上の結果を綜合していえば、気象―気温と湿度―と人身犯罪の関係、人身犯罪を誘発し発生を高める気温と湿度は、大体、高温中湿（気温20度以上、湿度10～80%の範囲）であるということができると共に、戦前と戦後の犯罪の様相は変つたとはいえ、地方によつて、多少の違いはあつても一般的には、気象との関係は、なんら変らないということができる。

すなわち、人身犯罪は夏季に多く発生するということである。なお、人口との比を求めた結果から、暑い地方に人身犯罪は多く発生するということも間違いないようである。

7. 刑期の判決に現われし数字習慣

明治大学　小熊　虎之助

すべて犯罪は、その前提として、それが客観的事実であることを幾人かの人間によつて確証確定される事を必要とする。詳言すると、被害者から始まり、一般証人、警察官、検察官、進んで被疑者または加害者、最後に裁判官を通して、初めにその事実が犯罪として認定され、裁決されなくてはならぬ。すなわち、すべての犯罪事実は、最初にこれらの人たちの主観を通し、その複雑な心理を通して客観的に確立されたものである事を前提とする。昔Hans Grossは、この前段階の犯罪の研究、すなわち犯罪を確定するまでの心理の研究を主観的犯罪心理学、後段階の犯罪の研究、すなわち確立された犯罪の心理その者の研究を客観的犯罪心理学とそれぞれ呼んだ。今日では、前者は普通に犯罪心理学、後者は裁判心理学とよばれる。ただし刑事裁判は、事実の認定と、法律の適用と、刑罰の量定との三段を含むものとされているが、この主観心理は、詳しくはこの三段階全体にわたるものである。私の研究は、特にこの最後の段階での裁判官の下す刑期の判決の上に現われた数字傾向を対象としたものである。

刑期8年以下の累犯者収容の某B級刑務所内の受刑者のうちから約500名を at random に選んで、その刑期を調べた結果は次の如くである。（各罪種名はこゝでは省略する）

4ケ月（3人）　5ケ月（1人）　6ケ月（14人）　7ケ月（1人）　8ケ月（15人）　9ケ月（1人）　10ケ月（46人）
1年（101人）　1年2ケ月（39人）　1年3ケ月（2人）　1年4ケ月（7人）　1年6ケ月（100人）　1年8ケ月（4人）
1年10ケ月（3人）　2年（52人）　2年2ケ月（1人）　2年3ケ月（2人）　2年6ケ月（25人）　3年（38人）　3年6ケ月（3人）　4年（18人）　4年6ケ月（5人）　5年（14人）　6年（9人）　7年（10人）　8年（3人）
合計　517名。

この統計を見ると、たとえば1年から2年の間では、1年1ケ月、5ケ月、7ケ月、9ケ月、11ケ月が全く無いにもかかわらず、その前後の刑期は相当多数にのぼつているという有様で、一種の数字傾向が存在する事は確実と見られる。ただ今後の問題として、(1) 事実の詳細の研究（たとえば罪種と数字傾向との関係や、同じ窃盗罪で1年1ケ月や1年3ケ月を選ばずに特に1年2ケ月の判決を与える裁判官の心理や、あるいは裁判官の Case work など）、(2) その発生の主観的と客観的との原因の研究（たとえば、主観的では社会的民族的か、あるいは全く個人的な数字習慣、客観的では、明治41年以来の新刑法によつて窃盗は10年以下、強盗は一律に5年以上というように刑期の範囲が一般に広くなつた事など）。(3) この数字傾向防止策の研究（たとえば、刑期の範囲を縮少すること、裁判官に自己の数習慣を反省させること、数人の裁判官の個々の量定の算術的平均をとることなど）が残されている。

11. 臨床・異常

1. 触読推理に関する研究

広島大学　林　重　政

点字紙面の点突起は一般につぶれ易く、触読、取扱、保存等に注意を要する。ここに点を故意につぶすことにより盲人がそれを如何に読み取るかについての実験的研究を行つた。

単語の或一点又は二点とつぶすこと（問題1～40）及び一つの短文の中より総計20個の点をつぶすこと（問題41, 42）によりつぶれた点を補つて一つの言葉又は完成した文をつくる様に求めた。被験者は盲小学部4～6年18名である。

誤答（無応答を除いて）97、その中明らかに点の位置を読み違えていると考えるものが5であり、検査者の指示を守らないで起つた誤りが38、計93で誤答の殆どがこれらに起因している。

例えば問題9「ガラス」の「カの6の点」をつぶした時これを「オルス」又は「オロス」と答えるとか、問題14「ミカン」で「カの1の点」「ンの3の点」をつぶした時これを「みなみ」「みらい」等と誤つたりするなど誤読の殆どが位置の誤りである。その他書きと読みの誤り、ますあけをつめて読んだ為起つたもの、句点又は鍵とあやまつたものなど若干あつた。

検査者の指示を守らないで起つたものとしてはどこか一点をうめる様指示した時でも一ますの中で2点又は3点をうめて勝手に言葉をつくることなどによるものである。

一般に上級学年程誤答が少く又学校での学業成績に関係がある様である。

2. 臨床心理学と精神医学との関聯に関する所観
——裁判鑑定患者に関する両者の所見を通じて—

広大医学部　小沼　十寸穂

1. 臨床心理学の在り方の国際的概念を批判し、日本における精神医学並に精神科臨床の現状から臨床心理学への要請の実態と臨床心理学の介与の仕方の理想と現在の限度等について私見を述べ、　2. 今夏広島静養院において行

われた広島大学心理学科学生による臨床心理学的研究（陳旧精神分裂病、陳旧躁鬱病、癲癇症並精神薄弱各一例）について、その精神科臨床所見を基にしての交見会が行れたが、その際における精神医学と臨床心理学的所見との綜合的検討における問題を基にして、両科の関聯について私見を述べ、　3．その際の「癲癇症」例は、私も亦その裁判鑑定に与り、自ら臨床心理学的検査を行つているので、自らの所見とその時の所見とをつけ合せて考究し、検査の場の問題、検査に対する患者の精神的態度の問題から、ひいて拘禁性神経症性態度に対する臨床心理学的検討等について、所見を述べた。

3．偉大性に関する研究（第3報）
—性度の問題を中心にして—

日本大学　高島正士

1．目的　偉大性とは何か。偉大性を組成する要因は何か。また過去の偉人研究にあたつて、その偉大性を如何に客観的な尺度で測ることができるか等の諸問題を明らかにするために、私はまず現存人、特に優秀人を対象にして、種々の角度から分析研究してきた。今回は性度に関する問題を中心とし、これらが偉人の偉大性分析に何等かの手がかりになりはしないかというところに目的がある。

2．対象及び方法　前回同様中学3年生を対象とし、これらを次の要領で選出した。①High Group（H・G）知能偏差値65以上有し学業成績知能に比例して優秀なもの、②Low Group（L・G）知能偏差値45以下で学業成績中以下のもの、各々男26名、女35名計122名とした。これらの生徒に、渡辺・村中氏に依る「簡易性度検査」を使用した。

3．結果　性度の割合はH・G男でM（男性度）を示すもの62%．F（女性度）を示すもの38%．L・G男子でMが73%．F27%．これに対しH・G女子でFを示すもの60%．M40%．でL・G女子ではF91%．Mは僅か9%．であつた。この結果男子よりも女子のH・GとL・Gとの間には顕著な差がみられた。今両者の関係をカイ自乗検定すると、$\alpha<0.01$で有意の差が得られた。男子の場合殆んど関係がない。つぎに知能との相関をみると、H・G男子、L・G男女では共に相関がなく、たゞH・G女子で$\gamma=0.34$で前者に比して相関がある。また男子で知能の高いものに寧ろF度が多い。結果を綜合的にみるとL・G男子のMがH・G男子のMより高く、女子ではL・GよりもH・Gの方が遙かに男性度が高い。またF度を示したもので、顕著な差は、L・G女子はH・G女子よりもF度が高い。即ち女子はどの場合に於いても女子のH・GはL・Gよりも男性的である。知能が低い程女性的であり、知能の高い女子は男性的であるといえる。また各問で特に目立つた点は、同情に関するもので、H・Gほど同情心がL・Gより少なく、殊にH・G女子はH・G男子のそれよりもM度が高い。これは極言すれば知的優秀な女子ほど冷淡であるという結果になりそうである。

次に教師及び両親の意見を綜合すると、教師は優秀者に就いては男女ともにMの場合、平素きつい、勝気、頑固、努力的、男まさり、しつこい等を挙げている。低い生徒でMの場合おとなしすぎる、元気がない、身体が弱い、だらしがない、内気であると。これらが多分に性度と関連して知能及び行動に影響を与えているものと思う。両親はこれらについては、兄弟姉妹、一人子、末子等の関係を強調しており、又幼児期に於ける疾病、怪我、及び近所の友だちの影響、又両親自らの性格遺伝だとしている。

要約　性度がどの程度偉大性に関係してくるものか、これだけではわからないが、特にAggressiveであることが、ある程度知的、性格的な面で偉大たらしめていると言えよう。偉人は中性的性格を有す傾向がみられる。

4．聾児童・生徒の言語能力（その4）
—特に表現語彙の発達についての量的考察—

日本大学　森　一司

聾児童、生徒の語彙発達の一般的傾向を調べるために、15分間の自由聯想法による表現語彙の実験を行つた。この方法は過去に於て松本金寿氏が正常児童について実施された。今回の報告はその一部であつて聾児童、生徒の表現語彙の一般的増加及び語彙発達の割合が正常児童、生徒と比較してどのような特徴をもつかの2点について報告する。実験は昭和30年9月—10月にかけて実施され、被験者は、東京都立某聾学校小学1年以上、神奈川県下2校の聾学校小学3年以上で、聾群（D群）小、中、高、専攻科509名、別に正常児童、生徒、小、中校生（H群）466名が統制群となつた。

東京都立某聾学校には幼稚部が附設され、小学1年で学習年限3年にあたる。語彙量の平均値は、幼稚部を経た小学1年の量と幼稚部を経ない小学3年とほゞ同じであつた。また性別の差はほとんど認められず、被験者の少い理由もてつだつて男女一緒にした在学年数を中心にして聾としての一般的傾向として考察を進めてゆく。語彙量の平均値はD群が低く、特に在学第7年目あたりでかなり差をもつてくる。標準偏差はD群が大きな数値を示した。D群、H群ともに同傾向の語彙発達曲線をえがき、3、4、5年あたりまで直線的上昇を示し、以後上昇のピッチが落ち、なだらかな曲線をえがきながら上昇している。次に表現語彙発達率であるが、D群の在学3年をOとし、H群の1年を

Oとして1年ごとの語彙の増加率を調べた。D群では3—4、4～5年の間の増加率が最も高く、以後増加率はおちている。H群は1—2、2—3、3—4年で増加率高く6—7年で再び高く、それ以後は低くなつている。これらの結果を、昭和12年に正常者について調査した阪本一郎氏の標準語彙量の研究の中から年令間の語彙増加の割合と比べると、本調査のD群の語彙量、増加率は、ともに正常者より低いが、その一般的傾向はグラフにしてみると非常に類似している。在学5年あたりまでは増加の割合がほぼ平行的であるが、それ以後は発達率の差が開き、阪本氏の曲線は右半分を切りとつたような蓋然曲線的発達率曲線をえがいているに対し、本D群は在学5年を境として曲線のやまが学習年令が進むにつれてなだらかとなり両曲線の間に空間ができ、語彙量の少さと発達率の低さを明白に示した。しかし一般的傾向としては非常に類似した曲線を示している。

以上の結果から聾児童、生徒の語彙、特に表現語彙の発達は入学後1、2、3、4、5年くらいまでは、語彙量、発達率が低いにしても正常児と比べ平行的発達を示したにもかかわらず、それ以後の発達ははるかに低い割合で語彙の増加を示すものと考えられる。またこの結果から理解語彙の発達も同様な傾向を示すものと推測される。これらのことは5、6年以後の聾教育の言語指導に何らかの示唆を与えるものと考えられる。

5. 沖縄における神経症の一症例

東京教育大学　鈴　木　　清

最近この種の受験に関する神経症が多く現われているし、この事例は沖縄の事情、沖縄の青年の葛藤をよく現わし、しかも治療効果が極めて著しかつたので報告しておきたい。

症状　沖縄南部（糸満地区）農村、高等学校3年男、18才。家族は母、兄、妹2人。前年秋から多夢、不眠、脱力感、息がとまる、手が冷える、妙な声が出る、目まいがする、人に会うのがこわい、特に勉強にかかろうとすると、目の附近が痛む、首筋が硬直、頭部（特に中心部）に激痛がある、胸がさされるようで、時々脊筋から頭に痛いものが走る、などを経験している。レントゲン胸部診断3回とも異常なし。

診断・所見・処置・診断面接および家族からの聴取により、本人が真面目な勉強家で、高校入学以来平均5時間位の睡眠しかとらず、日本の大学進学を熱望して受験勉強を続けていたこと、昨年10月学資を約束していた伯父が失脚し、学資援助が不能になつたと申し渡されたこと、兄が昨年琉球大学入試に失敗し、自棄的になり、毎日ごろごろして母との間に口論があること、などが明らかとなつた。

TATによる所見　孤独感、不安、反抗、動揺などが著明、知能は優秀（田中B式、偏差値62）

けつきよく本例は、要求の挫折と家族間の緊張からくる不安神経症であり、さまざまな身体的症状は実現される見込みのない努力からの逃避とも考えられる。

処置の方針は、(1) 結核への恐怖の除去、(2) 母への反抗、兄への憎悪を同情に転換すること、(3) 大学進学、将来への進路について考え方を広くすること、におき結核とは別のものであること、全く精神的なものであるから考え方を変えれば治ること、母や兄の立場についてはむしろ同情すべきであるから、その調節に進んで協力すべきこと、日本の大学でなくとも進路は開けるし、日本の大学進学についても伯父にたよるより以外の方法が可能であることを説得した。

予後　翌朝面接から帰つて以来いつもの症状がなくなり、勉強を始めることができたと報告があり、満1年後、現地に出張して間宮氏が、その後完全に治癒していることを確認した。

6. 機会的非行者　—行為場面と人格—

横浜少年鑑別所　台　　利　夫
明治大学　○堀　　淑　昭

このケースの行為場面を簡単に述べると、A少年が偶然出会つたかつての恋人の婚約者と待合せの約束をさせられ、K駅のプラットホームで待つていたが相手は来なかつた。丁度転を失いその日1日中さまざまのフラストレーションに出会い、郷里に帰る旅費もなく酒を飲んできた後だつた。その時彼は熟睡しているよつぱらいにつまづき、見るとポケットから財布がのぞいていた。あたりには人影もなく、ちゆうちよの後遂にその財布をスリ取つた途端、彼は公安官に捕えられた。

機会的非行者は、このように、その場面状況から行動を了解できる。と同時に、彼がなぜそのように場面に支配されてしまうかを了解するには、その人格を理解することが必要である。本発表は、非行者を現象学的に理解し、その全体的人間理解から、非行をもその1つの現れとして了解する方法の試みを、1つのケースを例として報告するものである。

このA少年と非指示的面接を行い、その録音記録を資料とする。彼の表現をその中に見出されるカテゴリーに従つて類別し、各々のカテゴリーの中の諸表現をまとめる本質的なものを洞察する。そこに見出されたものに更に同じ操

作をくりかえすことにより、段々と中心的な本質を明らかにし、彼自身の世界を再構成してゆく。第二段目の操作からを具体的に示すと、

1. 彼自身が世の中をどうみているか、(1) みんないい人だと思う 10 (2) 今後は変な目でみられるかもしれず心配5 (3) でもあやまれば許してくれよう、援けてもらいたい6 (4) 自分は目下のものはかばつてやり、目上には甘える、人には親切だと言われる7 (5) 人に非難されるのはいやだ 10 (洋数字はそのカテゴリーに属する表現の数)。これらは基本的に世の中を善意に満ちた暖いものと認め、自分もそのなかで高くみとめられ、暖い関係をもちたいと望んでいることを示していよう。

2. 自分自身をどう認知しているか、(1) 優秀なしつかりした7 (2) 非難されるのがいやな 10 (3) 不思議に気の変る8 (4) 頭がよくなく素直でないのかもしれぬ、などの缺点をもつ5 人間である。ここには自己の価値づけと、その侵害の排斥がみられ、自己の現実が問題としてぼんやり意識されている。

これらを綜合すると、自己の認知と社会の認知はきわめて緊密な関係にあり、世の中の暖さと自信から、不安のない甘い認識と親しみの感情がありながら、非行逮捕という障害にぶつかつた為も加わつてか、問題意識を生じている、と思われる。

この機会的非行の了解には、1. 自己を暖い正常社会の1員として感じ、その中で高く承認されることを求めている点 2. 社会の暖さ彼の親近感から社会的禁止は強く感じられない。3. 社会の抵抗が少なく、状況に応じて流動的表面的に行動する点、が重要であろう。

7. パースナリテイ・インヴエントリイの特性について

慶応義塾大学 ○佐野勝男
精神医学研究所 槇田仁

種々なる質問形式のインヴエントリイ(以下INV.と略す)を試みることにより、INV.の特性について考察を行つた。

INV.は Kretschmer の所謂分裂性等5つの類型を把握すべく試みたものであるが、その質問形式は以下の如くであり、年代順に順次試行されていつたものである。

第1型("ハイ"型)特性の記述が並べられて居り(1類型は10, 計50)、その中自分に該当するものに○をつける型。

第2型(選択肢型)特性の記述は略々第1型と同じ。"多い〜少い"の面にそつて選択肢が配列されている点が違うのみである。

第3型(場面+選択肢型) 特性記述の文章は少しく具体的な場面をつけて居り、第1、2型程直接的なきき方ではない。選択肢は第2型を少しつづめた程度である。

〔例〕 あなたは友達などと一緒に楽しむのと、只1人で散歩をしたり、書物を読んだりするのと、どちらの方をむしろ好みますか

1. いつも一緒に 2. 多くは一緒に 3. 多くは1人 4. いつも1人

第4型(場面+多面的選択肢型)第3型と同じく場面をつけた文章を用いたが、その場面も文章のニユアンス等迄細かく問題にし、更に選択肢は単に"多い、少い"といつた段階ではなく、多面的な行動の見本を示して、それらのどれかに○をつけさせ、どうしても該当しない時は、自由に書き足させるといつた方法をとつた。

〔例〕 あなたは考えや、性格の違う人とでも気軽につき合つて行ける方ですか。

a. 誰にでも親しみを覚え、楽につき合つて行ける方です。 b. 直ぐ親しみを覚え、割に誰とでもつき合つて行ける方です。 c. 普通につき合つて行ける方です。 d. 殆どつき合えなない方です。

第5型(第4型の簡素化)文章は第2型と第3型の中間位にし、選択肢は a, b, c の3種とし、4型と同型の簡単なるものとした。

〔例〕 あなたは考えや、性格のちがう人とでも気軽につき合つて行ける方ですか。

a. 割に気軽につて合つてゆける方です。 b. 気軽でもないがとくに苦にしません。 c. どちらかというとつき合えない方です。

以上の如きものを施行することにより、

1. INV.の特性は大量に集団的に施行出来、しかも機械的処理によつて大略の傾向を出すというのが特性であつて、第4型の使い方は INV.の限界以上を求めたやり方であると考えられる。

2. 現段階に於ける INV.は多面的な知識をうるのを目的として構成されるのが無難である。INV.の理想的用い方は狭い1つの面に限定し、そこに沢山の文章を配列して行うのが最もよい用い方と思われるが、現実の臨床には役立たない。

3. 個人のパースナリテイ構造を問題とする現実の臨床診断に於ては、INV.を発展的に解消させて SCT(文章完

成法テスト）の特殊版の如き形にし（場面を少しく附加したSCT)、自由にSsに書き込ませ、それより clinicianが診断するという方が直接的に役立つと思われる。（これを traits test〔仮唱〕とよびたい。）

8. 精神薄弱者鑑定についての一研究
—知能測定における実験者—被験者間の rapport—

名古屋大学　秦　安　雄

心理学の研究において、実験者と被験者間の rapport が、研究の結果に重要な影響を与えるということは、常識的に認められていることである。この問題を実験的に確証する試で、この研究がなされた。こゝでは、実験者—被験者間の rapport の問題を、特に精神薄弱児の鑑定に結びつけて取上げた。

精神薄弱児の鑑定には、知能検査が主要な役割をはたしている。精神薄弱児鑑定のための知能検査実施にあたつて、検査者—被検査者間のrapportが、その結果に重要な影響を与えると考えられる。この研究では、このrapportの差違が、知能検査の結果に、どの様な効果をもたらすか、決定しようとした。

「精神薄弱児の知能測定において、検査者—被検査者間の rapport の程度によつて、その結果に有意な差が生ずる」という仮設のもとに、実験計画を立てた。3人の rapport の程度の異る実験者と3種類の知能検査を用いて、等質と見做される三つの被験者群に検査が実施された。

実験の結果は、以上のどの要因が有意に作用しているか分析するため、分散分析によつて検討された。

分析の結果、実験者の間に有意な差がみとめられた。又どの実験者の間に有意な差があるか、検定の結果、よく rapport の出来ていると見做された実験者及び、少しは rapport の出来ていると見做された実験者と、殆どrapportは出来ていないと見做される実験者との間に有意の差がみとめられた。

結論として、精神薄弱児の知能測定において、rapport の程度の差違が、結果に有意な差を生ぜしめるということが云える。精神薄弱者鑑定にあたつて、rapport が、よく出来ていない場合には、知能検査の結果に信頼性が薄くなると考えられる。

今後の問題の1，2は、精神薄弱児を被験者とする場合でなく、普通児において、はたしてこの様なことが云えるかどうか、知能測定ではない、他の実験材料を用いた場合、実験者—被験者間の rapport の関係はどうであるかである。これ等の検討の結果は、更に多くの問題が出て来る。

9. 肢体不自由者の診断法の研究（そのⅢ）
—Rorschach Test による Habilitationの予診—

国立身体障害者更生指導所　○田中　豊
早稲田大学　金子精宏

目的：　我々は過去2回に亘つて肢体不自由者の自己の障害に対する Acceptance（受容）の問題について研究した結果を報告したのであるが、基本的に「肢体不自由」という要因が、そのパーソナリテイにどのような影響をもたらすものであるかについて、Rorschach Test によつてこれを研究することを目的とした。即ち全般的に言つて肢体不自由者の特性があるかどうか、又障害部位或いはその発生時期によつて何等かの差異が認められるかどうかということである。

更にまた、Joseph Levi の指摘するようにF＋パターンが最上の経過を An パターンが最も劣つた経過をその Habilitation に示すということを追試することを目的としたものである。

被験者：　昭和30年7月までの間に国立身体障害者更生指導所に入所した肢体不自由者 200例（男子 127名、女子73名）を対象とした。年令は16才～42才で平均23.6才、その学歴は高小卒、新制中卒が大部分で未就学、大学卒、高校卒も若干あつた。病別には脊髄性小児麻痺、脳性小児麻痺、上肢及び下肢切断が主で、関節結核その他10種以上に及ぶ。また入所以前には転歴をもたぬものが大部分であつた。

方法：　早大版を使用し、施行は標準的方法に従つた。

結果：　200例のプロトコールを平均すると、Rは27.8でW%は高く（42.2%)、F＋%は低く（51.8%)、FY.FV.FTがやや多く（1.6）その他A%、M等は±であつた。これを更に、障害部位別（上下肢ともに障害をもつもの、下肢障害者、上肢障害者)、病別（上肢切断、下肢切断、脳性小児麻痺、脊髄性小児麻痺)、発生時期（0才～6才、15才以後）の各要因より比較調査したが、有意な差を各群相互間に認めなかつた。

F＋反応についてはF＋%が70%以上を示したものは25例あつた、これを各群別にみると障害発生時期別に於て0才～6才と15才以後の者に於て著しく少なかつた。しかし Levi の所説の如き攻撃的動物反応を多く示したものはなかつたのであるが概括的に言つてF＋%の高いものはその Habilitation の経過は良好と認められた。

An反応が10%以上であつた者は26例であつた。これをF＋反応と同様に各群別に比較したところ上下肢ともに障害をもつものに最も高い出現率を認め、時期別では0才～6才群は12.8%、15才以後群では16.5%、7才～14才群では4%であつた。これ等26例のうちには訓練を忌避して中途退所したもの2例、医学的には肯定出来ない眼性疲労を訴えたもの2例、その他訓練を拒否する傾向の強かつたもの4例があり、全般的に言つてその経過は劣つていた。

10. 精神薄弱児の運動能（I）
—その発達過程について—

大阪市立思齊小、中学校　吉　岡　　宏

我々は生後一定期間後に、直立し、歩行し、あるいは手や指を合目的に使用する。もしその年令に達してもこのような運動を行い得ないとしたら……学問的規定は未だ得られていないが実践的教育的な意味で運動能、又その発達における個人差が問題になつてくる。

1. 問題　精神発達の遅滞せる精薄児には、運動能とその発達過程に普通児と異る特性が果してあるのであらうか。又基本的運動能の発達と精神発達との間に果して特筆すべきものがあるのであらうか。本調査はかゝる意図のもとに計画された精薄児の運動能発達過程についての遂年的研究の第1報告である。

2. 方法　生活年令13才以下本校児童30余名、普通小学校児童20余名、知能テストの外、運動能発達検査(狩野氏)によりあくまで児童の日常生活におけるいろいろな運動行動に基付いた課題であり Skill に属するような種目、体力的な種目は除去きれている。精神発達に応じ課題に含まれたるA平衡機能、B全身運動の協調、D分離運動又は模倣運動、夫々に分析処理し考察した。

3. 考察　精薄児は一般に身心共に遅滞し、その発達に障害が認められる。低I.Q児では平衡機能（A）低劣であるが年令増加に伴い全身運動協調（B）が発達してゆく。しかもそれは極めて微々たるものである。手指運動（C）分離運動（D）に至つては学令前の運動能である。爪先立、片足立、片足とび、指折り、足ふみ手拍子、閉眼指接は年令が増加しても殆んど不可能。

I.Q 50以上の児童になると低I.Q児の如く偶発的な課題合格を示さず漸次系統的な合格を示してくる。しかしいずれの課題を採りあげても得点は不均衡である。生活年令相応な得点は期待できないにしても精神年令に相応な運動発達年令を示している。普通児になるとABCD得点が均衡を保つているがいづれも年令相応以上の合格を示している。

同一年令児との比較、精薄児に於ては課題BCが課題ADに較べて高い合格率を示しているにも拘らず普通児になると反対に課題A運動神経の分節度が要求される課題DがB.Cより高い合格率を示している。

年令増加によつて漸次得点増加をたどるわけでなく学令前に急激な上昇を示すのであらう、低年令でもかなり上の方の年令の課題に成功するものがあるかと思うと高年令でも、仲々出来ない課題もある。

精神年令と運動能発達年令との相関、普通児の場合見られなかつたが精薄児に於ては .6 の有力な相関を示している。これは本校の児童の知能指数の分布範囲が狭いためであらう。又I.Q 50以下の児童にとつては精神年令が運動能発達年令より下廻り、I.Q 50以上の児童になつてやゝ上廻つてゆくのは更に追究を要する問題である。

11. 日本人のロールシャツハ反応の研究（11）

日本女子大学 {○児玉　省・寺内幸子
　　渡辺和子・加藤千枝

ロールシャツハ・テストのプロトコールを読んで、この被験者は教育程度が高いらしいとか、社会性の発達が幼稚であるとか、経験の巾が狭いなどというが、それは主として反応内容を見て行われる診断である。こういう診断に客観性を与えるために、我々は我々の研究対象の反応内容を新しい角度から分析することを開始した。この発表はその序論的なものである。

H%A%は、ある年令段階を通じて、大差ない場合にも、その個々の内容に至つては、著るしく異ることがある。そしてその差異が、経験の巾や教育や、社会性などの、差異を表現していると考えられる場合が、しばしばある。この故にコンテントは、これらの経験の差異を表現するように分析することが必要である。

この分析の試みとして、我々は、5—6才、10—11才、13—14才、18—22才、35—45才、60才以上の6年令群の被験者の反応内容を、次のような角度から再分析を行つた。

H反応。単なる人間、行動する人間、伝説、架空的人間。A反応。動物園、絵本的動物、日常生活環境的動物、理科教科書的動物、映画その他。Ob反応。日常生産的、楽器、玩具、遊具、家具、装飾的な物、服飾等。At反応。骨関係、骨以外のもの（心臓、肺、胃腸等、動物の解剖反応等をふくむ。）Pl及びFl反応。部分反応、日常生活的なもの、理科教科書的なもの等。

これらの角度は、多くのプロトコールを検討しているうちに、拾い出したものであるが、これらの角度によつてコ

ンテントの分析を試みるとそれが年令群及びその他の特徴として取上げ得られることが見出された。それ故に、これらの内容を、年令群的及びその他の特徴として読む場合には、我々は、そのプロトコールの当事者を、年令群的にまたその他の特徴群に位置づけ、かくして、社会性的に幼稚であるとか、発達が未熟であるとかなどの判定をなし得る多少客観的な手がかりを得ることができるであろう。我々はまだコンテントにくつついている形容語について、またM・FM反応についても、これに類似した分析を試みつゝある。

At反応の分析について一例を示すと、

骨関係では、5—6才では、単に骨という反応。10—11才でがい骨が現われ、13—14才では特殊部分の骨現われ、18—22才頃で特殊部分でも、骨盤など現われ、また動物の骨出現す、その後特殊部分の骨減少す。となつている。

骨関係以外では、10—11才で心臓、肺など現われ、13—14才で動物の解剖反応現われ、その後増加して後、再び減少す。（この年令などはまだ暫定的なものであるが）。

日本人のロールシャツ反応の基準を開始して既に数年で、日本人をテストすること四千名を越えた。で以前に発表した数字など多少改訂、精緻化の必要に迫られつゝある。本研究もその精緻化の試みの一端である。

12. 危機場面におけるロールシャツハ・テストの集団検査実施結果について

香川大学 ○水口芳明
佃範夫

私たちはロールシャツハ・テストを危機場面において集団的に実施した。被験者は高等学校卒業を入学資格とする香川県下の某校の志望者の第1次合格者47名である。危機場面とは右某校の入学試験の一科目として行つた場面をさす。実施方法はロールシャツハ原図版を実物幻燈機をもつてデーライトスクリーンに暗室の中で一分映写し、ついで筆答できる程度に照明し、3分間に筆答させる。その間映写したまゝであり、かなり明瞭にみえる。図版は入学試験であるため時間の都合上第1図版、第3図版、第5図版、第9図版、第10図版の5版にした。教示は個人法と同じで出来るだけ示唆を与えないようにした。筆答がすむと5図版の略図をかいた別紙を与え、さきの反応場所を記入させた。これを他の種々の方法で行つた結果と比較してみる。方法は個人法と集団法。前者は早稲田版を使つた場合と原図版を使つた場合とし、以上三つの場合を普通場面において実施する。早稲田版を使つた個人法の被験者26人の平均反応数は26.3、原図版を使つた個人法の被験者9人の平均反応数は23.5である。これを被験者63人の普通場面における集団法の平均反応数16.4と比較すると反応数の上からは、個人法がすぐれていることになる。以上三つの場合を本実験と比較すると危機場面における集団法が最もすぐれていることになる。

然し危機場面つまり競争意識のある場合には反応総数は上昇するといわれている。けれども同時に不良反応と固執傾向を示めすといわれているので、その点を検討することにする。但し図版を同くする為に第1群はのぞく。又普通場面における集団法は10人、危機場面における集団法は15人について整理した。まず固執傾向を同一反応が現れると解する。然し「蝶」「こうもり」の反応はのぞくことにする。同一反応は個人法で二組、普通集団で二組、危機集団で六組現れた。後者が固執傾向が強いようであるが、これを一組に対する反応数についてみるとそれぞれ 118、82、83となつて、実際問題として80反応に一組の同反応では固執傾向ともいえまいと思う。次に不良反応の増加であるが、Ft反応についてみると個人法で78%、普通集団で74%で、集団法の場合稍増加するようであるが、危機集団では81%となつて却つて良反応が増加した。

以上の反応の質的分析及び先にのべた反応総数の結果からして、個人法が普通集団法より優れているようである。然し危機集団法は個人法より更に優秀な結果をもたらすようである。すると方法の差異よりも場面の差異の方が遙かに大きな決定要因をなすように思われる。いかなる場面で検査するかがどんな方法で検査するかよりも重大であるといえようかと思う。従つてこの方向に沿うた検査例えば本検査のように危機場面において行う集団検査は個人検査より優秀な結果をだすといえようかと思う。

13. Rorschah Test の集団法の試み

早稲田大学 本明寛

今日 Horrower, M. R. 等の集団法は数度の修正を経てかなりととのつた形を持つにいたつた。又これについては我国でも早くから実用化が試みられている。我々はこの方法を更に修正し、選択肢を用いながら個別的方法の特徴を生かし得る Test を考案したいと考えた。

我々のテストは印刷されたインク・ブロットと選択肢となる標準反応から成りたつている。各カードについて、選択肢は(+)点となる8つの言葉と、(−)点になる同じく8つの言葉がある。又標準反応といつたのは、その言葉を自由に訂正し、補足する事を許しているからである。(+)(−)については大部分 Harrower の〝Large Scale Rorschach Techuiques〟に準じたが、一部 Klopfer 及び Beck の新著によつて補正した。検査の所要時間は40分である。検査結果は第一に各選択肢のカギによつて処理されるのであるが、なるべく個別的な判定法による事にした。最

終評価は全得点に対するマイナス点のパーセントによつて行つた。

中学生100人について実施した予備テストの結果は次の通りである。(1) 標準反応の利用率は一般に各カードとも相当高い。但しマイナス得点のために用意されたものは修正、補足が多く、全体の利用率は低い。(2) 反応の決定因はその平均についてみると、F+,FC,CF,FM,F−,Mの順に高い頻度がみられた。これは個人検査の中学生における特徴と類似する。(3) 得点をパーセントに換算して段階づけると 0—9%(2) 10—19%(7) 20—29%(23) 30—39%(27) 40—49%(28) 50—59%(11) 65以上(2)〔カッコ内実数〕のような結果が得られた。このうち最下位の50%以上についてみると、学校側の問題児とする者の大部分を含んでいる。

この予備テストの結果から、標準反応を更に吟味すること、成績の評価法を工夫することにより、簡単な集団検査の成立が可能である見通しを得た。

12. シンポジアムについて

広島大学　高木貫一

シンポジアムは、下記の要領によつて行われた。

第1日　(10月29日)

「交通安全」(陸運の部)　13.30—15.30

第5室

司会者	東北大学	大脇義一
話題提供者	広島鉄道管理局	滝山養
	広島県警察本部	吉見村夫
	日本国有鉄道労働科学研究室	鶴田正一

第2日　(10月30日)

「交通安全」(海運の部)　13.00—15.30

第1会員控室

司会者	広島大学	高木貫一
話題提供者	最高裁判所	齊藤浄元
	第六管区海上保安本部	池端鉄郎
	労働科学研究所海上労働研究室	西部徹一

「非行青少の問題」　13,00—'5.30

第5室

司会者	広島大学	三好稔
話題提供者	香川大学	高橋茂雄
	東京警視庁	佐伯茂雄
	東京家庭裁判所	山本晴雄
	広島大学	小沼十寸穂

以上3つのシンポジアムのうち、前の2つは、前(第19回)大会において、会員特に大脇教授などの提案により、本学会においても交通安全の問題がとりあげられることになり、学会内に「交通事故防止対策委員会」が設置され、同委員会において審議決定された根本方針に基き関係各方面に同問題の研究体制確立の促進方につき要請が行われつつある現状に呼応して、本大会においてもとりあげられた次第である。そして、学会のシンポジアムとしては、本来ならばあらかじめ定められた研究課題について行われた会員の研究成果に基いての討議が行われることが最も望ましいのではあるが、本課題に関する学会の現状は、極めて少数の会員を除いては、その研究が未だ充分その全領域に亘つていない段階にあることに鑑み、今回は一先づ同課題に関する問題の所在を明かにする意味において、陸運及び海運関係の当局者に、それぞれの領域における交通事故に関してその実態と問題とを提示してもらい、会員と講師との質疑応答をとおして問題の心理学的性格をより明かにすることに重点がおかれたのである。幸にして、各講師はそれぞれの方面の第一流の学識経験者であり、貴重且つ豊富な資料に基いてその実態及び問題点を開陳されたので、われわれは同問題に関して極めて広範に亘る見透しと問題のあり方とを識ることが出来た。これらの成果は、恐らく今後の「交通事故対策委員会」の具体的活動に反映されると同時に会員の個別的研究にも具現されることと期待される。

第3の「非行青少年の問題」は、現在已に各方面において重要な問題としてとりあげられており、心理学界においてもある程度研究が積上げられている課題であるので、シンポジアムの本来の形である会員の研究に基く討議の形式に則り、しかもそれを各主要な角度から行い得るよう企てられていた。したがつて、各講師の提供は心理学的にも内容極めて豊富であつたのであるが、時間不足のため討議の余裕がなかつたのは遺憾であつた。

なお、以上の3シムポジアムの実施を通じ得られた所見は、そのもち方についてもつと時間的な余裕を考慮するとともに、一般報告、他のシムポジアム、その他の学会行事などとの間にも内容的及び時間的な振合に十分検討を要するということであつた。

あ と が き

編集の方針としては部門別にならべ体裁や用語法を統一したかつたのであるが、この度は各発表者から提出された原稿にできるだけ忠実に従つたため、必しもこれらの点に関して統一がとれていないことを御了承願いたい。尙この抄録には中、四国心理学会員の資格のみで参加した人の発表は含まれていない。又、第20回大会総会で会則の一部が変更になつたので新しい会則を最後につけ加えた。

日本応用心理学会会則

第1条　本会は日本応用心理学会（Japan Association of Applied Psychology）と称する。

第2条　本会は心理学およびこれに基づく学術技芸の応用発達を促進し、隣接諸科学との交流を図り、もつてわが国文化の向上発展に貢献することを目的とする。

第3条　本会は前条の目的を達成するために左記の事業を行う。

(1) 研究およびその応用に関する諸業務との連絡、新分野の開拓、会員の親和増進。

(2) 機関誌その他の刊行物の編集および刊行。

(3) 大会その他の必要な会合の開催。

(4) 外部からの要請による斯学研究および応用業務の受託あるいはあつせん。

(5) その他必要な事業。

第4条　本会の趣旨に賛同し、会員1名以上の紹介により運営委員会の承認を経て、所定の会費を納めた者を本会員とする。

第5条　本会の会員で永い間功績顕著な者は、運営委員会の議を経た上で、総会の承認を得て、これを名誉会員に推薦することができる。

名誉会員は会費を納める義務を有しない。

名誉会員は随時運営委員会に出席して意見を開陳することができる。

第6条　本会に左の役員を置く。

会長1名、副会長1名、運営委員若干名、幹事若干名。

第7条　会長は大会当番機関の代表者、副会長は前期大会当番機関の代表者がこれに当る。この場合会長の任期は前期大会終了の翌日から大会終了の日までとし、副会長の任期は大会終了の翌日から次期大会終了の日までとする。また大会当番機関の決定は当該大会に先行する総会の決議による。

第8条　会長は本会を代表し会務を統理する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはこれに代る。

第9条　運営委員は総会において選出し、任期は2カ年とする。ただし再選を妨げない。運営委員は会長及び副会長と共に運営委員会を構成し、本会の運営に当る。

運営委員は互選により常任委員若干名を選出する。常任委員は会長および副会長と共に常任委員を構成運営委員会の委託を受けて本会の運営を常時担当する。

運営委員会は会長がこれを召集する。

第10条　幹事は会事務の必要に応じ、会員中から会長が委嘱する。

第11条　本会の目的達成のために必要あるときは、随時委員会もしくは部会を設けることができる。部会に関す規程は別に定める。

第12条　総会は春秋2回開催の本会大会の時に開く。

ただし会長において必要があると認めるときは臨時総会を開くことができる。

第13条　会員がひきつづき2年間の会費を滞納した場合には退会したものと見做す。また不都合な行為をした場合は運営委員会の議決によりこれを除名することがある。

第14条　本会事務局を当分の間東京都千代田区神田三崎町日本大学文学部心理学研究室内に置く。事務局には局長1名および局員若干名を置く。局長および局員は会長がこれを委嘱する。

附　則

1. 会費は昭和30年度から当分の間年額500円とする。
2. 本会会則は昭和30年10月29日から実施する。

応用心理学論文集

——第20回大回発表研究抄録——

昭和30年12月25日印刷
昭和30年12月28日発行

編集兼発行者　日本応用心理学会
会長　古賀行義

広島市下中町55番地

印刷所　朝日精版印刷株式会社
代表者　本山登一郎

47.2 籍1
57.2.16
006162